KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol.19

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

Project Team for Paleolithic Studies : Distribution of Paleolithic Artifacts in Kanagawa Prefecture (7) Layer B2 (draw a conclusion) ····· 1

Project Team for Jômon Period Studies : Change of the Jômon Culture in Kanagawa Prefecture (Ⅷ) : An Example in the first part of Late Period. An Aspect of the Horinouchi-Type Pottery Period,Part 5 ····· 13

Project Team for Yayoi Period Studies: The Corpus of Yayoi pottery-Coffin in Kanagawa Prefecture (3) ····· 17

Project Team for Kofun Period Studies: Track of Dr. Naotada Akaboshi, A Pioneer of Archaeological Research in Kanagawa Prefecture (11): A Report of Materials of the Kofun Period in the So-called “Akaboshi Note”····· 29

Project Team for Nara-Heian Period Studies: Hardware in the Nara and Heian Periods in Kanagawa Prefecture: The Corpus of iron manufacturing artifacts (4) ····· 43

Project Team for Early Modern Age Studies: The Corpus of Common Houses in the Early Modern Age (9) ····· 57

Kaori Takahashi : Japanese ceramic tile production system upward the provincial monastery established in Sagami ：About the trend of the tile artisan between *Kokubun-ji, Kokufu,* and interior Buddhist temples ····· 71

March, 2014

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan

研究紀要19

かながわの考古学

二〇一四

公益財団法人 かながわ考古学財団

考古学財団

ISSN 1342-6834

研 究 紀 要 19

かながわの考古学

2014.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

研　究　紀　要　19

かながわの考古学

2014.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

はじめに

当財団の前身である財団法人かながわ考古学財団は、1993(平成５)年10月21日に神奈川県によって設立されました。

この研究紀要は、1990(平成２)年11月に神奈川県立埋蔵文化財センターによって刊行された『かながわの考古学』から受け継がれてきたものです。

その『かながわの考古学』は、1995(平成７)年11月刊行の第５号で終刊となりましたが、1996(平成８)年３月には神奈川県立埋蔵文化財センターと財団法人かながわ考古学財団とによって新たに研究紀要１『かながわの考古学』を刊行しました。二つの機関による刊行は1999(平成11)年３月の研究紀要４まで続き、研究紀要５からは財団法人かながわ考古学財団単独の刊行物となりました。

さらに当財団が財団法人から公益財団法人に移行し、2012(平成24) 年の研究紀要17からは公益財団法人かながわ考古学財団として刊行を続けています。

神奈川県の組織改編や当財団の変遷にかかわらず、『かながわの考古学』は神奈川県内の考古学に関する資料を各時代の研究プロジェクトがさまざまな形で提供しております。

今年度、当財団は無事20周年を迎え、記念の公開セミナーとシンポジウムを開催することができました。

記念すべきこの年に当たり、今後もこの姿勢を保っていきたいと決意を新たにしていますので、皆さまのご高評、ご批判をお待ちしております。

2014(平成26)年３月

公益財団法人かながわ考古学財団

目　　次

神奈川県における旧石器時代の遺物分布(その７)　－Ｂ２層(まとめ)－
旧石器時代研究プロジェクトチーム　……1

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ
－後期前葉期　堀之内式土器文化期の様相　その５－
縄文時代研究プロジェクトチーム　……13

神奈川県内出土の弥生時代土器棺(３)　－弥生時代中期後葉から古墳時代前期(その２)－
弥生時代研究プロジェクトチーム　……17

考古学の先駆者　赤星直忠博士の軌跡(11)　－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－
古墳時代研究プロジェクトチーム　……29

神奈川県における古代の鉄(４)　－生産関連遺構の集成－
奈良・平安時代研究プロジェクトチーム　……43

近世民家の集成(９)
近世研究プロジェクトチーム　……57

個人研究論文
相模における国分寺造営以降の瓦生産体制について
－国分寺・国府・国内諸寺間における瓦工人の動向について－
髙橋　香　……71

例　　言

1．本書は、公益財団法人かながわ考古学財団の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに共同研究を行った結果を掲載するものである。
また、公益財団法人かながわ考古学財団が平成24年度に研究助成を行った個人研究の成果を掲載する。

2．各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである。
(五十音順・◎はプロジェクトリーダー、○はサブリーダーを示す)

・旧石器時代研究プロジェクトチーム
井関文明・大塚健一・栗原伸好・鈴木次郎・中村雄紀・畠中俊明・◎三瓶裕司・○脇　幸生

・縄文時代研究プロジェクトチーム
阿部友寿・◎天野賢一・○井辺一徳・岡　稔・小川岳人

・弥生時代研究プロジェクトチーム
飯塚美保・◎池田　治・○櫻井真貴・新開基史・戸羽康一・渡辺　外

・古墳時代研究プロジェクトチーム
◎植山英史・○柏木善治・小西絵美・長澤保崇・長友　信・新山保和・吉澤　健

・奈良・平安時代研究プロジェクトチーム
◎加藤久美・川嶋実佳子・齊藤真一・○相良英樹・諏訪間直子・高橋　香・中田　英・宮井　香

・中世研究プロジェクトチーム
菊川　泉・◎松葉　崇・○宮坂淳一・山口正紀

・近世研究プロジェクトチーム
◎木村吉行

3．中世研究プロジェクトチームと近世研究プロジェクトチームは合同で研究を行い、いずれかの研究成果を報告するものとし、今回は近世を掲載することとした。

神奈川県における旧石器時代の遺物分布（その７）

― Ｂ２層（まとめ）―

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

当プロジェクトでは、2007年度から「神奈川県における旧石器時代の遺物分布」として資料集成に着手し、これまでに上層から順にL1S 層からL2層までの出土石器群を対象として、その分布状態の集成を行ってきた。これまでにL1S 層～L1H 層、B1層からL2層とある程度層準を区切ってそれぞれの層ごとに集成結果から見出される特筆すべき点の抽出を行っている。昨年度からは、さらに下層であるB2層出土の遺物を対象とした集成を開始し、この２ヶ年で既刊の発掘調査報告書より256ヶ所の遺物集中を集成した。

今年度はB2層の最終年度として、昨年度掲載し得なかった集成の残り105ヶ所の一覧を掲載するとともに、B2層は堆積が厚いため、集成した石器群を出土層位から上下に区分し、各々について「器種組成」・「石材組成」・「石器集中と遺構分布」の視点からその様相をまとめた。（三瓶）

１．B2層上部の石器集中

ａ）石器集中の器種組成

検討資料を抽出するにあたり、層位的位置づけの不明確な資料を除外し、また石器数４点以下の事例を除外した。また、分布や接合関係からまとまる石器集中は１つにまとめて集計した。その結果、81の石器集中、45組の石器群が抽出された。その上で簡潔に比較するため、石器組成を狩猟具、加工具（精製）、加工具（粗製）、礫塊石器、剥片、石核の６つのカテゴリーに分けて集計した（第１表）。

「狩猟具」には角錐状石器、ナイフ形石器、尖頭器を含めた。このうち問題となるのは尖頭器である。上和田城山遺跡第Ⅳ文化層では尖頭器３点の出土が報告されているが、２点は角錐状石器に再分類されており、１点は単独出土で本来はより新しい時期に属する可能性が高い。南葛野遺跡第Ⅱ文化層の尖頭器は石器集中付近からの出土だが出土層位が他の石器より上層で、共伴しない可能性がある。栗原中丸遺跡第Ⅵ文化層の「尖頭器様石器」はナイフ形石器に分類してよいと見られる。したがって集計に取り上げた中で尖頭器の出土例として残るのは高座渋谷団地内遺跡第Ⅴ文化層の事例のみとなる。

「加工具（精製）」には掻器、削器、錐形石器、彫器を含めた。このうち、錐形石器、彫器はごく僅か見られるのみであり、掻器・削器類がこのカテゴリーの大半を占める。特に円形掻器が特徴的である。

「加工具（粗製）」には二次加工剥片を含めた。本来なら使用痕のある剥片もこのカテゴリーに含まれるはずだが、素材が黒曜石の方が使用痕（または微細な剥離痕）が観察されやすいなど、分類基準が一定しない可能性が高いため、剥片として集計している。

「礫塊石器」には磨石、敲石などを含めた。

石器群の器種組成の傾向としては狩猟具が1点以上伴う事例が多いことで、45石器群中34石器群と7割以上である。但し角錐状石器は相対的に少なく、複数伴う事例は３例しかない。加工具類についても精製・粗製とも伴わないのは13石器群にすぎず、やはり７割以上の石器群で１点以上出土している。剥片剥離等の痕跡

第１表　B2層上部出土石器群の石器組成

遺跡名	文化層	集中部	狩猟具	加工具(精製)	加工具(粗製)	礫塊石器	剥片	石核	石器計
代官山	Ⅵ	A-H	21	5	14	0	398	15	453
用田南原	Ⅵ	1	10	7	0	2	274	3	296
高座渋谷団地	Ⅴ	2, 3, 5, 8, 9, 10, 13	23	6	17	0	213	19	278
南葛野	Ⅱ	第12号拡張区(S1-5)	26	13	8	0	134	0	181
橋本	Ⅳ		9	10	0	0	138	11	168
南葛野	Ⅱ	第11号拡張区(S1・2)	7	9	3	2	134	8	163
柏ヶ谷長ヲサ	Ⅵ	1, 2	10	5	2	2	128	4	151
吉岡Ｘ	Ⅴ	3	5	3	0	0	85	0	93
高座渋谷団地	Ⅴ	1, 4	14	1	2	0	70	0	87
南葛野	Ⅱ	第２号拡張区(S1)	0	1	0	0	78	2	81
吉岡Ｄ区	B2	2	10	1	11	0	53	0	75
南鍛冶山		0501	2	1	1	1	53	2	60
川尻	Ⅴ	1-4	3	3	1	14	27	1	49
月見野上野第1地点	Ⅷ	1	4	0	0	0	39	0	43
用田南原	Ⅵ	2	7	2	0	1	27	2	39
南葛野	Ⅱ	第15号拡張区(S1)	1	1	3	1	27	2	35
栗原中丸	Ⅵ	1	7	0	2	1	21	0	31
高座渋谷団地	Ⅴ	6	3	0	3	0	22	1	29
高座渋谷団地	Ⅴ	7	5	1	0	0	21	1	28
代官山	Ⅵ	I	0	0	0	0	24	0	24
高座渋谷団地	Ⅴ	11	2	1	0	0	17	3	23
神明若宮地区内Ｃ地区	Ⅲ	1	6	0	0	0	15	2	23
神明若宮地区内Ｃ地区	Ⅲ	2	3	0	0	0	20	0	23
代官山	Ⅵ	L-N	3	1	4	0	13	0	21
代官山	Ⅵ	J-K	0	2	0	0	15	2	19
代官山	Ⅵ	O-Q	3	1	0	2	9	4	19
根下	Ⅰ	1	1	2	0	0	14	0	17
上和田城山	Ⅳ	C・D-3グリッド	1	0	0	2	10	4	17
用田大河内(第６次)	Ⅵ	2, 6	0	0	1	4	10	1	16
用田大河内(第６次)	Ⅵ	5	1	3	0	0	7	2	13
南葛野	Ⅱ	第13号拡張区Ｂ	0	0	0	0	9	1	10
上草柳遺跡群　大和配水池内	Ⅷ	2	2	0	1	0	7	0	10
南葛野	Ⅱ	第13号拡張区Ｃ	0	0	1	0	7	0	8
上草柳遺跡群　大和配水池内	Ⅷ	5	1	1	0	0	5	1	8
南鍛冶山		0502	0	0	0	0	5	2	7
高座渋谷団地	Ⅴ	12	3	0	1	0	3	0	7
上草柳遺跡群　大和配水池内	Ⅷ	1	0	1	1	0	5	0	7
代官山	Ⅵ	X	1	1	0	0	4	0	6
南鍛冶山		0701	0	0	0	0	5	0	5
代官山	Ⅵ	U	0	0	0	0	5	0	5
代官山	Ⅵ	W	0	0	0	0	5	0	5
寺尾	Ⅴ	1	1	0	0	0	2	2	5
本入こざっ原	Ⅳ	1	2	0	1	0	2	0	5
上草柳遺跡群　大和配水池内	Ⅷ	3	1	0	0	0	4	0	5
上草柳遺跡群　大和配水池内	Ⅷ	4	1	0	0	0	4	0	5

が少ない小規模な石器群でも狩猟具・加工具を１点以上伴う事例が多いため、石器点数に占めるトゥールの割合は小規模な石器群の方が高い傾向がある。石器群の規模にかかわらず最小限のトゥールの構成が各地点に残されたものと解釈できる。　（中村）

ｂ）石器集中の石材組成

昨年度から集成を行っていたB2層を対象としたデータのうち、報告内容からB2層上部出土と捉えられる石器群を基に検討を加える。ただし、集成し得たデータのうち石材組成が明らかにされていない遺跡やブロックは除き、16遺跡66ブロックを検討の対象とした。

出土点数のみの比較では、全2342点(出土点数が判明しているデータのみ集計、以下同)のうち、黒曜石が900点(38%)と４割近い組成率を誇る。それ以外については、凝灰岩系石材264点(11%)、安山岩193点(８%)、

頁岩192点(８％)、ガラス質黒色安山岩41点(玄武岩197点を含む238点とすると10.1％)ともに１割程度の組成率となる。数値的には黒曜石が突出して用いられていたことが分かる。ただ、石材名は、昨今やや改変されているものもあるが、今回提示のデータは、報告書データを基としているため、これまでの報告書データを現状での判断基準により再考する必要があることを断わっておく。しかしながら、黒曜石とそれ以外ということの、判断基準には変化は無いと考えられるため、B2層上部では、黒曜石が最も多用されていたという事実に変わりはないと考えられよう。黒曜石以外の石材については、その組成に目立った特徴は見いだされないが、前述のとおり、今回対象とした石器群以外も含め、一度再考の必要があろう。

黒曜石について、今回対象とした遺跡のうち５遺跡で産地同定分析を実施しており、その結果が報告書内に記載されている。これらを第2表にまとめた。表を見ても分かるとおり、多くが伊豆・箱根系の黒曜石という分析結果が得られており、伊豆・箱根系の中でも畑宿系が群を抜いていることが分かる。今回の対象が５遺跡と少なく、絶対的なこの時期の傾向とするには、まだ資料不足は否めないが、今後の資料・情報増加とともに詳細な傾向が見えてくるものと思われる。

現時点でのB2層上部の石器群における石材利用の特徴としては、伊豆・箱根系の中でも畑宿系の黒曜石が主体をなして利用されており、これら以外には、在地系石材である凝灰岩系の石材や、安山岩やガラス質黒色安山岩などの石材により石材供給を補っている様子が看取されよう。　(大塚)

第２表　B2層上部出土黒曜石の産地同定結果

遺跡名	文化層	判定点数	伊豆・箱根系						信州系					北関東
			畑宿系	(箱根)	柏峠系	鍛冶屋系	上多賀系	(伊豆)	(信州)	和田峠・鷹山系	西霧ヶ峰系	男女倉系Ⅲ	冷山・麦草峠系	高原山系
柏ヶ谷長ヲサ	Ⅵ	134	131		2					1				
上土棚南６次	Ⅰ・Ⅱ	332	258		16	8	8			1	1	7	32	1
南葛野	Ⅱ	83		20				36	8					
代官山	Ⅵ	－	●											
橋本	Ⅳ	－	●							●				

●点数は不明
カッコつきの産地は地域の判別のみ

ｃ）石器集中と遺構分布

分布範囲(規模)が数値化された石器集中のうちで礫群を伴う石器集中は、川尻Ⅴ№.１・３等、2.5ｍの分布範囲以上で概ね伴う傾向にあることが指摘され(南鍛冶山0701では「備考」では伴う遺構が記載されていないが、「器種組成」で「礫55」は本来礫群と推定されるため、ここではその石器集中を礫群を伴う石器集中として扱う)、炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集中は、上和田城山Ⅳ等、3.2ｍの分布範囲以上で概ね伴う傾向にあることが指摘される。また礫群を伴う石器集中は、炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集中よりも分布範囲が小さい傾向にあることも指摘される。

石器点数が数値化された石器集中のうちで礫群を伴う石器集中は川尻Ⅴ№.3の4点以上で、炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集中は南鍛冶山0503の14点以上であるが、代官山Ⅵ№.Ｂの37点以上の石器集中や南鍛冶山0701の60点以上の石器集中でも遺構を伴わない石器集中もある。なお石器集中は、石器点数が多くなると礫群よりも炭化物集中(木炭集中)を伴う傾向にあることが指摘される。

分布密度が数値化された石器集中のうちで礫群を伴う石器集中は1.25以上で、炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集中は0.15以上であることから、礫群を伴う石器集中のほうが、炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集

中よりも分布密度が高いという傾向が指摘される。また分布密度が南鍛冶山0502の44.4や南鍛冶山0701の7.89の高い石器集中でも遺構を伴わない石器集中もあることが確認される。分布状態が捉えられた石器集中のうちで礫群を伴う石器集中は橋本Ⅴの「散漫」と川尻Ⅴ№.1の「集中」で、炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集中は南鍛冶山0501の「北寄りに密集」であることが確認された。３石器集中しか分布状態が捉えられなかったが、礫群を伴う石器集中と炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集中では炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集中のほうが「密集」した部分が見いだされる石器集中である可能性が考えられる。

器種組成が明らかにされた石器集中のうちで礫群を伴う石器集中は代官山VI№.Kの剥片と石核等、炭化物集中(木炭集中)を伴う石器集中も南鍛冶山0503の剥片と礫器等のように２種類以上の器種により構成される石器集中であることが確認される一方、遺構を伴わない石器集中は川尻Ⅴ№.6の剥片や代官山VI№.T等、単独の種類でしか構成されない石器集中もあることが確認される。個別の器種のうちでナイフ形石器を伴う石器集中では橋本Ⅳ、川尻Ⅴ№.１・３・４、代官山Ⅴ№.A・G・N・O・Qで礫群(礫集中)を伴い、橋本Ⅳ、南鍛冶山0501で炭化物集中を伴うことが確認される。槍先形尖頭器を伴う石器集中では上和田城山Ⅳで炭化物集中(木炭集中)を伴うことが確認される。角錐状石器を伴う石器集中は根下Ⅰで礫群を伴うことが確認される。掻器・削器・スクレイパー・彫器・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片のいずれかを伴う石器集中では橋本Ⅳ、上和田城山Ⅳ、川尻Ⅴ№.１・２・３、根下Ⅰ、代官山VI№.A・G・J・L・M・N・O・P・Qで礫群(礫集中)を伴い、橋本Ⅳ、上和田城山Ⅳ、南鍛冶山0501で炭化物集中(木炭集中)を伴う。石核を伴う石器集中では橋本Ⅳ、川尻Ⅴ№.１・２、代官山VI№.A・G・J・O・P・Qで礫群(礫集中)、上和田城山Ⅳ、南鍛冶山0501で炭化物集中(木炭集中)を伴うことが確認される。叩石(敲石・ハンマー)を伴う石器集中では川尻Ⅴ№.4、代官山VI№.P・Qで礫群、上和田城山Ⅳ、南鍛冶山0501で炭化物集中(木炭集中)を伴うことが確認される。以上、石器集中における器種と遺構との関係を概観したが、何らかの傾向を指摘しがたいことが判明した。

石材組成が明らかにされた石器組成のうちで礫群かもしくは炭化物集中を伴う石器集中は、川尻Ⅴ№.1の頁岩や代官山VI№.Gの黒曜石等を除くと２種類以上の石材で構成されている石器集中が大半であるのに対して、遺構を伴わない石器集中は大半が２種類以下の石材で構成されていることが明らかにされた。　(井関)

２．B2層下部の石器集中

ａ）石器集中の器種組成

対象とした遺跡と文化層は出土層位が「B2L」とされた栗原中丸Ⅶ、かしわ台駅前Ⅴ、柏ヶ谷長ヲサⅦ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ、長堀南Ⅵ、上和田城山Ⅳ・Ⅴ、上草柳第２地点Ⅱ、福田札ノ辻Ⅵ、早川天神森Ⅳ、地蔵坂、大和配水池内Ⅸ、鷹見塚、菖蒲沢大谷Ⅲ・Ⅳ、福田丙二ノ区、津久井城跡馬込地区の14遺跡20文化層88石器集中である。B2層下部から出土した石器器種は、ナイフ形石器、角錐状石器、尖頭器、彫器、削器、掻器、スクレイパー、揉錐器、楔形石器、RF、UF、剥片、砕片、礫器、石核、磨石(状円礫)、叩(敲)石、台石、原石である。この中からナイフ形石器、角錐状石器、尖頭器、磨石(状円礫)について、石器集中でのありかたについて述べる。

本層はナイフ形石器を主たる石器とする時期である。ナイフ形石器は、切出形、基部加工が卓越する。これに国府型がみられる。ナイフ形石器は、上記の石器集中全体の約半数、50石器集中から出土している。逆の言い方をすれば、半数の石器集中がナイフ形石器を組成していない事を示す。文化層の各石器集中においてもナイフ形石器を組成するものとしないものがみられる。この場合、遺物点数が少ない石器集中にはナイ

フ形石器が含まれていない傾向がみられる。

ナイフ形石器とともに本層に特徴的な器種は、角錐状石器である。角錐状石器は、B2層下部から上部にかけて出土し、素材を縦に用い、形態も縦に長く、基部を作り出すような形態から、やや寸詰まりで基部が平坦な形態へと変化する(亀田 1996)ことが指摘されている。これら角錐状石器は、非常に高い確率でナイフ形石器と共伴している。ナイフ形石器と共伴しない事例は、長堀南Ⅵのみである。同一文化層内での石器集中における組成もまた興味深い。柏ヶ谷長ヲサⅧでは７ヶ所、同Ⅸでは24ヶ所、Ⅹでは４ヶ所、津久井城跡馬込地区４では３ヶ所、菖蒲沢大谷Ⅲでは12ヶ所の石器集中が確認されているが、角錐状石器を組成する石器集中は各文化層で１～２ヶ所に過ぎない。組成するか、しないかで集団の違いや、石器集中での作業(機能)の違いを示すかはわからないが、角錐状石器という石器の持つ特異性を示すものと考えられようか。

尖頭器は、柏ヶ谷長ヲサⅨの１ヶ所の石器集中から２点出土している。これらを角錐状石器の範疇で捉える見解も有り、検討を要する。

磨石(状円礫)は、B2層上部でも見られるが、B2層下部が圧倒的に多い。出土した遺跡は、柏ヶ谷長ヲサⅧ・Ⅸ、早川天神森Ⅵ、菖蒲沢大谷Ⅲ・Ⅳである。出土した遺跡は少ないが、文化層内ではある一定の石器集中から出土がみられる。菖蒲沢大谷Ⅲでは半数の石器集中から出土がみられる。この石器は、ある範囲にまとまって出土することが特徴である。このことに関して、一地点にまとめて保管し、その場所で複数の人間がまとめて使用したことが想定されている(加藤 1996)。さらに礫群との関連から、植物質食料等の加工の用途を想定される(加藤前掲)ことから、限られた遺跡で、かつ限られた石器集中にのみ存在する石器と言えるだろう。 (脇)

ｂ）石器集中の石材組成

ここでは、B2L層の主な石器群を中心に石器の使用石材を検討する。今回集成した遺跡において、その報告にて明確にB2L層中から出土した石器群とされているものは、14遺跡20文化層を数える。そして、単独出土を含む石器集中は88ヶ所を数え、そのうち50点以上の石器が出土している石器集中地点は、柏ヶ谷長ヲサ遺跡の第Ⅶ文化層１・２、第Ⅷ文化層１・７、第Ⅸ文化層２・３、５～12、14～18、第Ⅹ文化層１・２ブロックと上草柳第Ⅱ地点第２文化層のA、菖蒲沢大谷遺跡第Ⅲ文化層５、第Ⅳ文化層２、福田丙二ノ区遺跡第Ⅲ文化層１ブロックの25ヶ所である。石器に使用されている石材をみると、黒曜石、硬質細粒凝灰岩、中粒凝灰岩、チャート、頁岩、珪質頁岩、ホルンフェルス、安山岩、ガラス質黒色安山岩、流紋岩、結晶片岩、鉄石英、玄武岩と多種多様である。とりわけ硬質細粒凝灰岩と黒曜石の頻度が高く、黒曜石はこれら25ヶ所全ての石器集中から出土している。なお、当概期88ヶ所の石器集中地点においても、実に80ヶ所(90%)において黒曜石が出土している。因みに、相模野台地で石器の素材として最も多用され、相模川水系で入手可能な在地石材である硬質細粒凝灰岩でさえ、88ヶ所中46ヶ所とおよそ半数の頻度にとどまる。このことからも、数量的な多少はあるものの、当概期の石器群において如何に黒曜石が多用されているかが分かる。

では、これらの黒曜石はどこから入手しているのであろうか。近年、蛍光Ｘ線法による黒曜石全点の産地同定分析が盛んに実施されるようになり、過去に調査された資料についても産地同定が試みられ、新たに産地の判明した試料も増加している。海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡では黒曜石全点の原産地同定分析を実施し、興味深い結果が得られている。B2L層の石器群とされる第Ⅶ文化層から第Ⅺ文化層の黒曜石計1506点のうち、1493点と実に99％が伊豆・箱根系の畑宿産または柏峠産の黒曜石であった。

ここでは、最も充実した内容を持つ第Ⅸ文化層を例に検討してみたい。柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅸ文化層は、

石器総点数2855点、石器集中24ブロックを数える。このうち黒曜石は1164点(40.7%)を数え、1120点について原産地同定がなされている。その結果55％が畑宿産、約44％が柏峠産とほぼ99%が伊豆・箱根系である。他に和田峠系、霧ヶ峰系、蓼科系、神津島系、高原山系がごく少量みられるが、これらは「ナイフ形石器や削器など製品として」搬入される事例が多いことが指摘されている(堤 1997)。黒曜石は24ブロック全てで認められ、本文化層から出土した113点のナイフ形石器のうち62点が黒曜石製で占められ、その他のガラス質黒色安山岩製26点や硬質細粒凝灰岩製23点と比較して倍以上と群を抜いている。石材全体に占める使用頻度や主要器種への加工頻度からも当概期において黒曜石は中心的な石材と位置づけられ、その素材獲得のための入手経路も伊豆・箱根系に偏っており、かなり保守的で限定的であった様子が窺える。 (畠中)

第３表 文化層別黒曜石原産地一覧

	畑宿		柏峠		和田峠系		霧ヶ峰系		蓼科系		神津島1群		高原山1群	
	点数(%)	重さ(g)	点数(%)	重さ(g)	点数(%)	重さ(g)	点数(%)	重さ(g)	点数(%)	重さ(g)	点数(%)	重さ(g)	点数(%)	重さ(g)
第Ⅶ文化層	3	22.46	175	443.3										
	1.69%	4.82%	98.31%	95.18%										
第Ⅷ文化層	15	53.45	69	96.5										
	17.86%	31.05%	82.14%	68.95%										
第Ⅸ文化層	616	2325	489	1739.4	2	14	2	2.9	1	4.3	2	2.08	8	30.9
	55%	56.45%	43.66%	42.23%	0.18%	0.34%	0.18%	0.07%	0.09%	0.10%	0.18%	0.05%	0.71%	0.75%
第Ⅹ文化層	62	414.1	58	294										
	51.67%	58.48%	48.33%	41.52%										
第Ⅺb文化層	4	44.84												
	100%	100%												
合 計	700	2859.85	791	2573.2	2	14	2	2.9	1	4.3	2	2.08	8	30.9
	46.5%		52.5%		0.1%		0.1%		0.1%		0.1%		0.5%	

＊望月明彦氏作成表一部改変

ｃ）石器集中と遺構分布

B2層の下部は、層厚が極めて厚く、条件が良好な場所では、上・中・下の３枚あるいはそれ以上に区分出来る。よって、ここでは各報文に基づき、層位的に下位の遺跡の事例から順に各遺構を観察する。

まず下部～下底部付近から出土した石器群として、柏ヶ谷長ヲサＸが上げられる。４基のブロックがほぼ東西方向に一直線に検出される。１・２号ブロックは配石・礫群との明確な平面的重複関係が認めらるが、３・４号ブロックは礫群・配石と近接した出土状態を呈する。但し、１・２号ブロックは、共に遺物の分布範囲を17×11ｍ・20×12ｍと広く捉えているが、遺物の分布密度は0.45・0.67と極めて小さい。礫群17基、配石10基が検出され、１・２号ブロックに礫群は６基ずつ、配石は１号に１基、２号に４基が重複はしているものの、礫群の構成礫数は２～18点、配石は1または2点であり、礫群・配石の規模は比較的小さい。

菖蒲沢大谷Ⅳは、B2L層下部から出土した石器群である。４基発見されたブロックのうち、２号ブロックのみが遺物の分布密度が５点代前半と高いものの、他の３基は１点代前半と低い。２～４号ブロックは、各々 10～20ｍ程の距離を隔てて存在するものの、１号ブロックのみは他のブロックと50ｍ以上の隔たりが認められる。報文中では、この１号ブロックの中で紹介されているが、本ブロックからは計17点の遺物が出土しているものの、この内の12点は磨石状円礫であり、この段階の石器群に特徴的に見られる磨石状集石と言えよう。他のブロックと平面的独立性が強く、小規模な石器ブロックに磨石状集石が平面的に重複して検出されていると考えられる。

中部付近から出土した柏ヶ谷長ヲサⅨは、相模野台地上の本時期の石器群の中で、規模・出土数共に充実した内容を示す石器群である。石器のブロック数は24箇所、ここから出土した石器類の点数は計2855点を数える。ブロックの規模は、最少11点、最高718点であり、100点未満15箇所、100～200点未満６箇所、200～

300点未満２箇所、700点以上１箇所である。これに礫群125基、配石61基が前述のブロックにほぼ重複して検出される。礫群の規模は、１～50点未満114基、50～100点未満７基、100～152点以下４基とこの段階においても、数量的に最も多いのは１～50点未満と構成礫数が少量のものであった。また、この中には、下底部で１基しか検出出来なかった磨石状集石が、８・11・15・24号ブロックでも検出される。11号ブロックでは、ブロックの中央部で３点の磨石状円礫の集中が確認されるが、他のブロックでは、分布の外縁部にその集中が認められる。

上部の柏ヶ谷長ヲサⅧは、規模的にはⅨには及ばないものの、石器1121点がほぼ７箇所のブロックに分かれて出土している。本文化層からは、同時に礫群15基、配石５基が検出され、各々１基ずつはブロックとの重複は認められなかったものの、他は全てブロックとの重複関係を有して検出されている。明確な磨石状集石は確認出来ないものの、１号ブロックでは、台石(１点)・磨石(２点)・大形剥片？が遺棄されたような状態で、ブロックの外縁部より検出されている(配石１)。また、その配石１の周辺からは、集石ほど密集はしていないものの、ブロックの外縁部に沿って磨石４点が出土している。

津久井城跡馬込地区４では、３箇所のブロックが検出されている。いずれのブロックにも礫群が伴う。ブロック・礫群とも小規模であり、遺物分布密度はいずれも1.00未満である。礫群の構成礫数は、各々10・31・３点と小規模である。１号ブロックでは重複するが、２・３号ブロックでは、いずれも石器分布の外縁部に位置し、ブロック・礫群の平面分布は近接してはいるものの必ずしも重複はしていない。　　(栗原)

おわりに

2012年度と今年度に集成を行ったB2層の遺物分布は、合わせて39遺跡・54文化層の石器集中256ヶ所を数える。今回は、B2層を上部と下部に分け、まとめとして集成結果をもとにそれぞれ石器集中の器種組成・石材組成・遺構分布との関係について検討を行った。そこでは、器種組成と石材組成についての全体的な特徴は、当然ながら以前(1993～1998年度)に検討を行った層位別(時期別)の石器群の様相と共通することが明らかにされたが、石器集中個別の特徴については十分明らかにすることはできなかった。特に、石材組成については、石器製作作業を行ったと推定される石器集中では使用した母岩の石材が多くを占めることになり、石器集中を遺した集団の道具箱の石材組成とはかけ離れた内容を示していることも想定される。この点は、器種組成についても程度の違いはあるものの同様と考えられる。また、遺構との関係については、当該期の遺構は礫群と配石がみとめられ、多くは石器集中と重複して検出されている。そして柏ヶ谷長ヲサ遺跡Ⅸ・Ⅹ文化層のように、石器集中の規模が径10mをこえるものでは、出土石器も多く、複数の礫群と重複している。これらの石器集中は、その範囲の捉え方の問題もあるが、石器の数量が100点以上、中には800点前後もあり、集中的に石器製作作業を行った場所であることを示している。また、石器集中ごとの個体別資料分析を行うことにより、こうした大規模な石器集中は小規模な石器集中が重複したもの、つまり回帰的な移動により複数回の居住によって残された可能性も考えられる。このほか、厳密には遺構とはいえないが、磨石状円礫が数点以上集中して出土することも当該期の特徴であり、これらは小規模な石器集中から検出される傾向があることが指摘される。なお、これまで各遺跡の遺物分布の集成を行った結果、報告されているデータが一様ではなく、中には石器集中ごとの数量的な器種組成や石材組成が不明な遺跡が多いという問題がある。このため、石器集中についての分析・検討は、こうしたデータが報告されている特定の数遺跡を対象に行わなければならず、その検討結果の普遍性がどこまで保証されるかが問題となる。

当財団職員等による各時代のグループ研究は1993(平成５)年度から行ってきたものであり、その歩みは当財団の歴史と同じく20年を迎えた。その中で、当プロジェクトでは、神奈川県内の旧石器時代遺跡に関する基礎資料の集成・検討を継続して行ってきた。現在行っている遺物分布の集成・検討は、2007年度以来7年目になり、まだL3層以下各層の集成・検討を残しているが、その遺跡数を考慮すると今回で大半の集成を終えたことになる。今後は、L3層以下各層の集成・検討とともに、これまでの集成・検討結果の総合とそれにもとづき神奈川県内の旧石器時代文化解明に向けた検討に取り組むことが課題となる。　　(鈴木)

引用文献

55　金山喜昭・土井永好・武藤康弘　1984　「第Ⅴ章　第４節　第Ⅳ文化層」『橋本遺跡　先土器時代編』相模原市橋本遺跡調査会　pp. 19-20・pp. 125-127

90　曽根博明・中村喜代重　1979　「第Ⅴ章　第１節　先土器時代」『上和田城山』大和市文化財調査報告書第２集　大和市教育委員会　pp. 15-95

109　上田　薫・砂田佳弘　1987　『代官山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告11　神奈川県立埋蔵文化財センター　pp. 230-284

111　望月　芳　1996　「第５章　先土器時代の調査」『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書　第３巻　先土器時代』藤沢市教育委員会　pp. 15-203

116　関根唯充・桜井準也ほか　1995　「第Ⅵ章第７節　第Ⅱ文化層」『南葛野遺跡－県道横浜・伊勢原線藤沢葛原地内に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』南葛野遺跡発掘調査団　pp. 140-273

120　御堂島　正・河野喜映・恩田　勇　1992「第Ⅴ章　第１節　5　第Ⅴ文化層」『川尻遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告23　神奈川県立埋蔵文化財センター　pp. 59-81

283　麻生順司　1987　「第Ⅲ章第1節　第Ⅰ文化層」『藤沢市大庭　根下遺跡発掘調査報告書』根下遺跡発掘調査団　pp. 10-19

335　栗原伸好　2002　「第Ⅴ章第５節(６) 第Ⅵ文化層(BB2層：角錐状石器)」『用田鳥居前遺跡』かながわ考古学財団調査報告128　財団法人かながわ考古学財団　pp. 470-514・571-580

336　畠中俊明　2003　「第Ⅴ章第５節(５) 第Ⅵ文化層(BB2L 層)」『葛原滝谷遺跡　葛原下滝谷戸遺跡』かながわ考古学財団調査報告151　財団法人かながわ考古学財団　pp. 131-145・151-152

339　栗原伸好　2004　「第Ⅴ章第５節(３) 第Ⅵ文化層(BB2層：角錐状石器)」『用田大河内遺跡』かながわ考古学財団調査報告167　財団法人かながわ考古学財団　pp. 298-461・466-494

339　井関文明　2012　「第Ⅱ編第2章第5節第2項　第Ⅵ文化層」『用田大河内遺跡Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告278　財団法人かながわ考古学財団　pp. 129-166

340　栗原伸好　2004　「第Ⅴ章第５節(３)　第Ⅵ文化層(BB2層：角錐状石器)」『用田南原遺跡』かながわ考古学財団調査報告168　財団法人かながわ考古学財団　pp. 319-358・490-499

363　戸田哲也他　2006　「第Ⅱ章第３節　第Ⅲ文化層」・「第Ⅱ章第4節　第Ⅳ文化層」『菖蒲沢大谷遺跡　発掘調査報告書　藤沢市北部第二(三地区)土地区画整理事業区域内遺跡群　菖蒲沢大谷地区』北部第二(三地区)土地区画整理事業区域内埋蔵文化財発掘調査団　pp. 44-81・125-127

364　畠中俊明・井関文明　1999「第Ⅴ章　第3節　第Ⅲ文化層(B2L 層)の調査」『福田丙二ノ区遺跡』かながわ考古学財団調査報告68　財団法人かながわ考古学財団　pp. 231-242

367　吉田政行　2003　「第Ⅴ章第４節第６項　旧石器時代　遺物群Ⅴ」『吉岡遺跡群Ⅹ』かながわ考古学財団調査報告153　財団法人かながわ考古学財団　pp. 120-153

368　畠中俊明　2010　「第５章第７節　第4文化層」『津久井城跡馬込地区』かながわ考古学財団調査報告249　財団法人かながわ考古学財団　pp. 360-374

369　麻生順司　2012　『藤沢椎名谷遺跡』藤沢市教育委員会　pp. 1-23

亀田直美　1996　「角錐状石器」『石器文化研究5』石器文化研究会　pp. 189-198

加藤勝仁　1996　「礫石器」『石器文化研究5』石器文化研究会　pp. 219-230

堤　　隆　1997　「Ⅳ総括　３石材利用について」『柏ヶ谷長ヲサ遺跡』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団　pp. 489-492

第４表　B2層の遺物分布

No.	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積（㎡）	各集中No.	分布範囲（m）	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	備　考（共伴遺構等）
55	橋本	B2U	Ⅳ	－	－	－	173	－	散漫	ナ9、ス10、礫5、F127、Ch11、核11	黒156、珪岩7、粘3、硬砂2、玄1、その他4	礫群13、炭化物集中2
90	上和田城山	B2L	Ⅴ	7426		5.2×4.5	49	2.09		彫1、削1、楔？1、石刃核1、核1	珪頁、安、黒、チ	礫群？（被熱礫8点）
90	上和田城山	B2U	Ⅳ	7426		3.2×1.7	24	4.41		ナ3、槍3、彫1、石核石器1、削1、核1、UF1、敲1	頁、珪、黒、瑪、多安、緑珪頁、硬凝、粘、チ、凝	木炭集中1 石器小集中2
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	A		248			ナ10、核1、RF6、UF6、調F1、F93、C131	黒243、凝2、安2、珪頁1	礫集中1
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	B		37			ナ1、彫1、RF1、UF1、F23、C10	黒37	
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	C		22			掻1、調F2、F11、C8	黒22	
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	D		22			ナ2、F13、C7	黒22	
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	E		34			ナ2、掻1、核3、RF1、UF2、調F1、F14、C10	黒7、粘27	
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	F		17			ナ4、RF1、UF2、F6、C4	黒14、粘1、珪頁2	
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	G		66			ナ2、錐2、核1、RF5、F44、C12	黒66	礫集中3
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	H		7			F4、C3	黒1、粘6	
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	I		24			F15、C9	粘24	
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	J		7			掻2、核2、RF1、F2	凝4、粘3	礫集中9
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	K		6			F3、C3	チ5、凝1	礫集中12
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	L		6			RF1、UF1、F4	黒2、凝1、チ1、粘1、珪頁1	礫集中14
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	M		7			RF2、F4、C1	黒6、チ1	礫集中13
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	N		8			ナ3、掻1、RF1、F2、C1	凝2、チ2、粘3、珪頁1	礫集中17
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	O		7			ナ1、核1、UF2、F1、調整C1、C1	黒4、凝2、粘1	礫集中18
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	P		5			彫1、叩1、核2、F1	黒3、粘1、砂1	礫集中20
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	Q		7			ナ2、叩1、核1、UF1、F2	黒4、チ1、凝1、砂1	礫集中22
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	R		3			ナ2、掻1	黒1、チ1、頁1	
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	S		3			ナ2、F1	頁3	
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	T		2			C2	粘1、チ1	
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	U		5			F4、C1	黒5	
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	V		3			彫1、UF1、F1	黒1、粘2	
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	W		5			RF1、C4	黒5	
109	代官山	B2U	Ⅵ	18750	X		6			ナ1、掻1、UF1、F1、C2	黒5、頁1	
111	南鍛冶山	L2L～B2U	501	49700		9.6×15	192	1.33	北寄りに密集	ナ2、削1、リタッチ1、核2、F50、C3、ハンマー1、礫132	黒14、珪頁33、頁10、斑2、粘1、シ2、ホ11、安19、火凝5、輝2、凝39、玄5、砂26、閃5、頁17、流1	炭化物集中
111	南鍛冶山	B2U	502			0.6×0.3	8	44.4		核2、F5、礫1	珪頁7、凝頁1	
111	南鍛冶山	B2U	503			8.5×10.7	14	0.15		F1、礫13	黒1、凝2、玄1、砂4、頁6	炭化物集中
111	南鍛冶山	B2U	701			1.9×4	60	7.89		F5、礫55	黒1、珪頁2、頁2、ホ7、安2、火凝2、輝凝3、凝7、珪頁6、玄5、硬砂19、泥1、斑3	
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	1		1			ナ1	珪頁1	

No.	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積（㎡）	各集中No.	分布範囲（m）	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	備　考（共伴遺構等）
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	Ⅱ-2-S1	1.5×2	81	27	楕円状	削1、F78、核2	黒15、黒頁50、珪頁9、チ7	
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	4		10			ナ1、掻1、礫8	黒1、珪頁1、安8	
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	5		1			礫1	安1	
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	9		5			角1、RF1、F3	黒4、珪頁1	
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	10		3			ナ1、F2	黒2、チ1	
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	11		166			ナ7、削3、掻5、彫1、RF3、F134、核8、敲2、亜石器3	黒141、黒頁2、珪頁2、凝頁6、チ11、玄安3	
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	Ⅱ-11-S1	3×2.2	121	18.3	中央密集	ナ3、掻4、彫1、RF3、核6、敲1、F100		
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	Ⅱ-11-S2	1.1×1.6	22	12.5	散漫	ナ1、RF1、核1、敲1、F18		
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	12		735			尖11、ナ10、角6、錐1、削7、掻2、円形掻2、彫1、RF8、F134、礫562	黒55、珪頁45、凝頁15、頁90、緻黒安38、チ13、結片1、凝153、安玄90、シ56、安47、砂26、玄19、玄安18、黒頁16、泥13、輝9、閃7、火凝5、硬砂4、ヒ3、細閃3、千2、輝安2、浮凝1	
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	Ⅱ-12-S1	3×7	44	2.09	密度高い	ナ1、角1、削1、掻2、RF3、核6、F30		R1・R2
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	Ⅱ-12-S2	2×2.4	9	1.87	小規模に散布	錐1、掻2、RF4、核2、F4		
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	Ⅱ-12-S3	4×4.6	38	2.06		ナ3、角1、削3、RF4、核2、F27		R2
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	Ⅱ-12-S4	3.8×5	21	1.1	やや密	ナ2、角2、掻1、RF1、核6、F21		R3
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	Ⅱ-12-S5	3.8×5	12	0.63	密	ナ2、角1、RF2、F7		
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	13		80			掻1、RF3、UF1、F20、核1、亜石器8、礫46	黒17、凝頁7、緻黒安2、凝5、安40、砂1、玄安8	R1～4
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	14		3			ナ1、彫1、礫1	黒2、安1	
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	15		110			角1、円形掻1、RF3、F27、核2、磨石1、亜石器9、礫66	黒2、珪頁12、凝頁14、緻黒安1、チ5、凝1、凝7、頁4、安52、砂1、玄安9、泥2	
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	Ⅱ-15-S1	1.4×2	27	9.64	散漫	掻1、RF2、核3、F21		R1・R2
116	南葛野	B1L～B2M	Ⅱ	8425	16		1			礫1	玄1	
120	川尻	B2UL～B2MU	Ⅴ	4170	1	2.5×1.5	8	2.13	集中	ナ1、削1、UF2、核1、F3	頁8	礫群4 他に礫4点
120	川尻	B2UL～B2MU	Ⅴ	4170	2	4.5×3.2	18	1.25		削2、RF1、UF2、核2、F11	頁2、凝頁13、黒1、硬細凝1、珪頁1	第1号礫群
120	川尻	B2UL～B2MU	Ⅴ	4170	3	2.5×1.2	4	1.33		ナ1、敲1、UF1、打痕礫1	凝頁1、凝砂2、黒1	第2号礫群
120	川尻	B2UL～B2MU	Ⅴ	4170	4	3.5×2.5	25	2.86		ナ1、磨12、磨の可能性ある礫2、F8	硬細凝8、玄溶14、石閃1、黒1	第3号礫群

No.	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積（㎡）	各集中No.	分布範囲（m）	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	備　考（共伴遺構等）
120	川尻	B2UL～B2MU	V	4170	5	－	2	－		核1、F1	硬細凝1、頁1	
120	川尻	B2UL～B2MU	V	4170	6	－	2	－		F2	凝頁1、硬細凝1	
283	根下	L2or B2U	I							角、ス、F、核、磨	黒、安	礫群4
335	用田鳥居前	B2L1～2	VI	1513	1	7.6×7.2	423	7.73	集中	槍1、角2、ナ5、掻5、削22、敲8、F307、Ch50、礫器4、核18、不明1	黒、中凝、珪頁、ガ安、頁、斑、硬細凝、閃、細斑、安、流	礫群1
336	葛原滝谷	B2L	VI	1025		9.0×6.8	43	0.70	散漫	ナ1、削2、礫器1、核2、RF4、F33	硬細凝、ホ、黒、ガ安、チ、砂、黒頁、珪頁	礫群1
339	用田大河内	B2L1	VI	1144	1	5.5×4.1	1 (71)	0.04 (3.15)	やや散漫	削1	チ	礫群と同意（　）内礫を含む数
339	用田大河内	B2L1	VI	1144	2	3.2×2.2	14 (62)	1.99 (8.81)	やや散漫	削1、F11、核2	チ、黒、ガ安	礫群と同意（　）内礫を含む数
339	用田大河内	B2L1	VI	1144	3	5.1×2.2	23	2.05	散漫	ナ1、F1、Ch12、核2	黒、ガ安	
339	用田大河内	B2U2～B2L1	VI	1144	4	6.7×6.5	862	19.79	集中	槍1、角16、ナ23、彫1、掻6、削20、F520、Ch271、核4	黒、ガ安、チ	
339	用田大河内	B2U2	VI	1144	5	6.7×4.1	57	2.07	やや散漫	ナ6、削2、F46、Ch2、核1	ガ安、黒、細安	第1・2号礫群
339	用田大河内	B2U2	VI	1144	6	1.6×1.5	4 (24)	1.67 (10)	散漫	掻2、F2	硬細凝、ガ安	礫群と同意（　）内礫を含む数
339	用田大河内	B2L1	VI	1144	7	2.6×2.4	21 (92)	3.37 (14.74)	やや散漫	角1、削2、F17、磨1	硬細凝、ガ安、黒、安	第1号炉址（　）礫を含む数
339	用田大河内	B2U2	VI	1144	8	2.9×2.2	74 (135)	11.60 (21.16)	やや散漫	ナ2、F58、Ch2、敲6、核6	ガ安、黒、硬細凝、珪、安	第1～3号礫群（　）礫を含む数
339	用田大河内	B2U2～B2L1	VI	1144	9	1.7×1.4	14	5.88	散漫	F11、磨2、核1	硬細凝、ホ、黒、富玄	焼礫9点
339	用田大河内第６次調査	B2U1～B2U2	VI	1850	1	2.1×1.0	3	1.43	散漫	角1、Ch1、核1	黒	
339	用田大河内第６次調査	B2U2～B2L1	VI		2	3.5×2.7	10	0.85	散漫	RF1、F3、Ch4、核1、敲1	硬細凝、チ、中凝、黒	
339	用田大河内第６次調査	B2U2	VI		3	1.7×0.8	1 (40)	0.74 (29.41)	集中	F1	黒	礫群と同意（　）内礫を含む数
339	用田大河内第６次調査	B2U2	VI		4	1.3×0.2	－	－	－	－	－	礫群と同意礫3点のみ
339	用田大河内第６次調査	B2U2	VI		5	4.9×2.9	13	0.91	散漫	角1、円掻1、掻1、削1、F4、Ch3、核2	硬細凝	礫群3
339	用田大河内第６次調査	B2L ③	VI		6	2.3×1.1	6	2.37	散漫	F3、磨状石3	富玄、黒、硬細凝	
339	用田大河内第６次調査	B2L1～B2L ③	VI		7	0.6×0.1	2	33.33		磨状石2	富玄	磨石状石器2点のみ
340	用田南原	B2U～B2L1	VI	1194	1	8.1×4.2	300	8.82	密集	角4、ナ6、削6、掻1、F188、Ch86、核3、敲1、磨1	黒、硬細凝、ホ、チ、ガ安、細安、中凝、粗凝、不明	礫群1基
340	用田南原	B2U～B2L1	VI	1194	2	5.3×2.8	58	3.91		角1、ナ6、削2、F17、Ch10、核2、敲1	黒、硬細凝、中凝	
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	1	5.2×2	15	0.99	散漫	F11、石核2、磨状礫2	黒12、多安2、チ1	
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	2	4.3×3.5	30	1.99	北西部やや集中	ス1、F22、核3、磨状礫4	黒6、凝7、多安1、頁1、ホ12、閃2、砂1	1号礫群
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	3	3.2×3.1	11	1.1	散漫	F11	黒10、ホ1	
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	4	3.1×2.3	8	1.12	散漫	F8	黒6、凝1、チ1	3号礫群
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	5	13.7×8.6	124	1.05	満遍なく分布	角1、ナ9、ス10、RF3、UF3、F96、核1、磨状礫2	黒99、凝7、安2、多安2、チ7、頁7	5号・7号・11号礫群
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	6	5.1×3.2	42	2.57	中央やや密度濃い	ナ1、ス1、RF2、UF1、F20、核1、磨状礫16	黒16、多安16、頁10	8号礫群

No.	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積（㎡）	各集中No.	分布範囲（m）	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	備　考（共伴遺構等）
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	7	2.5×1.8	20	4.44	中央密度濃い	ナ1、ス1、F18	黒5、安1、頁14	8号礫群
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	8	3.5×3.2	36	3.21	東側やや集中	ナ1、UF3、F28、磨状礫4	黒1、多安4、チ1、頁24	9号・10号礫群
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	9	2.3×0.5	8	6.95	細長い分布	F8	黒8	
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	10	2.2×2	10	2.27	散漫	UF2、F8	黒9、頁1	
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	11	3.6×3	38	3.51	北側やや集中	角1、ナ4、ス1、F30、敲1、磨状礫1	黒32、多安1、チ1、頁2、ホ2	14号礫群
363	菖蒲沢大谷	B2LU	Ⅲ	5940	12	1.7×0.8	5	3.67	散漫	F4、敲1	凝3、ホ2	16号礫群
363	菖蒲沢大谷	B2LL	Ⅳ	5940	1	7.2×2.2	17	1.07	北東方向に長い	UF1、F4、磨状礫12	黒2、凝1、ホ2、多安12	
363	菖蒲沢大谷	B2LL	Ⅳ		2	5.1×3.6	94	5.11	北西密度濃い	ナ3、UF6、F84、核1	黒93、凝1	
363	菖蒲沢大谷	B2LL	Ⅳ		3	5.3×3.2	25	1.47	北西方向長い	ナ3、F20、核2	黒22、凝1、ホ2	
363	菖蒲沢大谷	B2LL	Ⅳ		4	5.3×4.5	30	1.25	散漫	ナ2、ス2、UF1、F24、核1	黒27、凝2、ホ1	
364	福田丙二ノ区	B2LM	Ⅲ	1100	1	3.0×3.0	106	11.78	集中	ナ4（3）、F37、C63、核1	黒104	
364	福田丙二ノ区	B2LM	Ⅲ	1100	2	1.6×1.6	18	8.2	疎ら	F、C、核1、原材1	黒18	他に礫3点
367	吉岡Ⅹ	B2U～B2L	Ⅴ	41000	1	4.0×2.0	13	1.63		削1、彫1、RF3、UF1、削片1、F6	黒13	礫群3、配石1
367	吉岡Ⅹ	B2U～B2L	Ⅴ	41000	2	1.0×1.0	3	3.00		ナ1、核1、F1	黒3	礫群3、配石1
367	吉岡Ⅹ	B2U～B2L	Ⅴ	41000	3	4.0×2.0	93	11.63	集中	ナ5、彫2、穿孔器（錐）1、F85	黒93	礫群3、配石1
367	吉岡Ⅹ	B2U～B2L	Ⅴ	41000	4	5.0×3.0	63	4.20	集中	ナ2、掻1、UF1、核1、F58	硬細凝1、ガ黒安62	礫群3、配石1 礫群3と重複
367	吉岡Ⅹ	B2U～B2L	Ⅴ	41000	4外	－	2	－		楔1、F1	硬細凝1、F1	礫群3
368	津久井城跡馬込地区	B2LUU	4		1	3.3×2.2	7	0.96	散漫	ナ1、掻1、F2、核1、叩2	黒1、中凝5、不明1	1号礫群
368	津久井城跡馬込地区	B2LUU	4		2	7.2×5.7	24	0.58	散漫	ナ1、角1、掻4、削1、RF7、F9、核1	中凝11、黒9、閃1、チ2、石英1	2号礫群
368	津久井城跡馬込地区	B2LUU	4		3	6×5.7	25	0.73	散漫	F20、核3、叩2	中凝25	3号礫群
369	藤沢椎名谷遺跡	B2	1	64	1	4×3　以上	228	19.1	密集	ナ20、掻1、削3、RF9、UF4、F185、核5、叩1	黒110、安106、凝5、頁2、流紋4、ホ1	1～3号礫群（礫299点）

※1　器種組成（ナ：ナイフ形石器、槍：槍先形尖頭器、掻：掻器、削：削器、彫：彫器、楔：楔形石器、叩：叩石、打斧：打製石斧、磨斧：磨製石斧、台：台石、核：石核、刃　：刃器、MB：細石刃、MC：細石刃核、調F：調整剥片、磨状礫：刷石状円礫、UF：使用痕ある剥片、RF：加工痕ある剥片、錐：揉錐器、ピエス：ピエスエスキーユ、スク：スクレイパー、切断：切断剥片

※2　石材（ガ安：ガラス質黒色安山岩、安：安山岩、角閃安：角閃石安山岩、粘：粘板岩、黒：黒耀石、チ：チャート、砂：砂岩、頁：頁岩、凝：凝灰岩、硬細凝：硬質細粒凝灰岩、珪凝：珪質凝灰岩、溶結凝：溶結凝灰岩、石閃：石英閃緑岩、花閃：花崗閃緑岩、泥：泥岩、ホ：ホルンフェルス、珪泥：珪質泥岩、硬砂：硬質砂岩、斑：斑糲岩、珪頁：珪質頁岩45、凝頁：凝灰質頁岩、結片：結晶片岩、安玄：安山岩質玄武岩、玄安：玄武岩質安山岩、火凝：火山礫凝灰岩、ヒ：ヒン岩、細閃：細粒閃緑岩、千：千枚岩、輝凝：輝緑凝灰岩、輝安：輝緑安山岩、浮凝：浮石凝灰岩、緑珪頁：緑色珪質頁岩、シ：シルト岩、多安：多孔質安山岩、玄溶：玄武岩質溶岩、石閃：石英閃緑岩、富玄：富士玄武岩）

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ

―後期前葉期　堀之内式土器文化期の様相　その５―

縄文時代研究プロジェクトチーム

１．はじめに

縄文時代研究プロジェクトチームでは、神奈川における縄文時代文化の変遷として、早期からその様相を捉える試みを行っており、中期中葉期は変遷Ⅴ、中期後葉期は変遷Ⅵ、後期初頭期は変遷Ⅶ、後期前葉期は変遷Ⅷとしてその具体的な作業をおこなっている。

今回の後期前葉期堀之内式土器文化期の様相については、これまでに研究略史、文献集成、主要遺跡の一括出土事例、堀之内１式土器の変遷、堀之内２式土器の変遷の検討を行ってきた。

特に、今回取り扱っている後期前葉期の堀之内式期の土器は、質・量ともに県内から網羅的に出土しているため、集成作業においても多くの時間と労力を要し、当初データ集成以降も調査報告書の刊行により、新たな資料の増加が見られるため、今回は資料の補遺と遺跡分布について、取り扱うこととした。

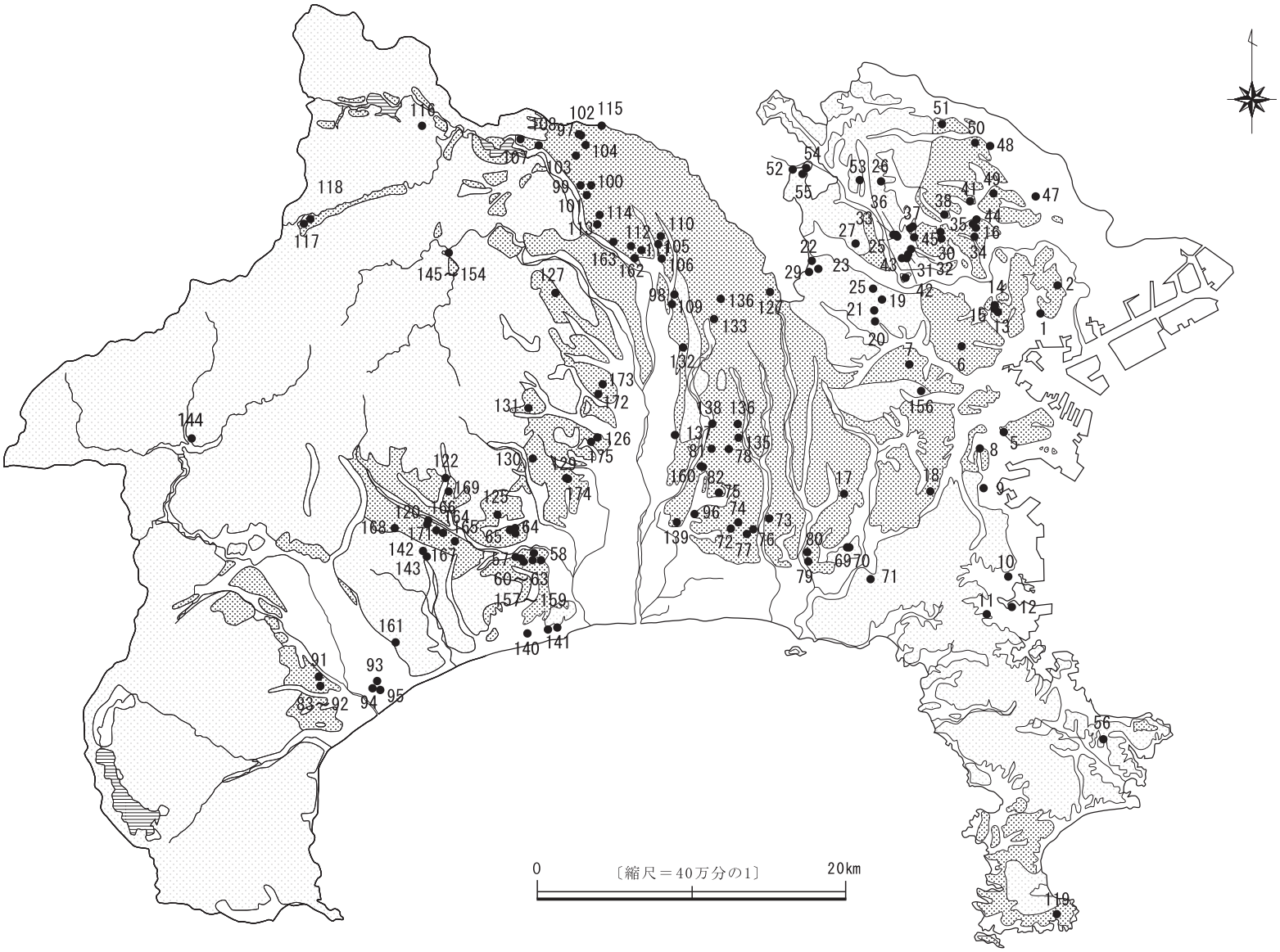
編年試案については、資料数が多いことから、堀之内1式と堀之内２式に分割して作業を行った。分割した場合、資料数をある程度限定できることから、作業の利便性に富むが、その前後の時間軸を分断してしまう弊害があり、特に土器型式の移行に関わる部分に対して、どのように捉えていくかが、重要となる。また「かながわの考古学」の主旨に象徴されるよう、基本的に神奈川県内の出土資料に限定して取り扱っているため、行政区分を超えた観点が欠けざるを得ない部分がある。本来は、時間軸及び行政区分に限定されずに、土器型式の広がりを踏まえた上で、一定の時間軸と地域性などの特徴を捉えていく必要があるが、県域でのあり方を追求し、各文化期の様相把握し、その真相にどこまで迫ることができるか、その可能性も含めた研究となるものである。

２．遺跡分布

第１図は、後期前葉期における主要遺跡の分布である。遺跡の分布を捉える上では、その性質上、発掘調査件数が反映されてしまうため、遺跡本来のあり方の解釈については、注意を要する。特に横浜市北部に所在する港北ニュータウンや平塚市の真田・北金目遺跡群など、開発の密度による遺跡の集中が分布図に反映されている。

分布図は、これまでと同様に、地形区分と主要河川を示した。山地、丘陵・台地、低地などの地形区分による遺跡立地あり方、または主要河川の流域に広がる遺跡の捉え方、神奈川県域の東西・南北に広がる地域性をどのように捉えて行くかなど、幾つかの基軸によって遺跡の広がりを捉えて行く試みをこれまで行ってきた。今回も同様に行う必要があるが、発見された遺構数量の把握や出土遺物の内容までの検討を踏まえた上で、遺跡分布に言及していきたいため、今回は、遺跡分布図を提示するにとどめ、次回以降に遺跡分布や個別の内容などの全体像をより具体的に検討する予定である。

（天野）



第１図　後期前葉期における主要遺跡の分布

神奈川県内　後期堀之内式土器出土主要遺跡地名表（補遺）

(1) この表は、「神奈川県における縄文文化の変遷Ⅷ－後期前葉期　堀之内式土器文化期の様相　その１－」（縄文時代研究プロジェクトチーム　2010「かながわの考古学」『研究紀要』15　財団法人かながわ考古学財団）に掲載した、主要遺跡地名表（文献目録）作成以降に刊行された報告書を中心に、神奈川県内における後期前葉期の主要遺跡を補遺としてまとめたものである。

(2) 掲載遺跡の抽出基準及び表の様式は、「研究紀要」15を原則として踏襲している。

(3) 文献の集成、データベースの作成、表の編集は、縄文時代研究プロジェクトチームが行った。

(4) 相模原市は、2010年４月１日に政令指定都市へ移行し、現在の相模原市では緑区・中央区・南区の３区制となっている。前回の集成は、相模原市と津久井郡４町（城山町・津久井町・相模湖町・藤野町）でおこなったが、今回は現在の行政区分で取り扱った。

No.	遺跡名	所在地	文献No.
横浜市神奈川区			
155	三ツ沢貝塚	横浜市神奈川区	149
横浜市保土ヶ谷区			
156	仏向貝塚・仏向・仏向町	横浜市保土ケ谷区仏向町	150～152
平塚市			
157	真田・北金目遺跡群57D1	平塚市北金目	153
158	真田・北金目遺跡群15E	平塚市北金目	154
159	真田・北金目遺跡群55A、56区	平塚市北金目	155
藤沢市			
160	用田大河内遺跡	藤沢市用田	156
小田原市			
161	曽我谷津岩本遺跡第１地点	小田原市曽我谷津	157
相模原市			
162	当麻遺跡第１地点	相模原市南区当麻	158
163	葉山島中平遺跡	相模原市緑区葉山島	159
秦野市			
164	太岳院遺跡	秦野市尾尻・明星	160・161
165	尾尻尾崎遺跡	秦野市尾尻尾崎	161
166	水神遺跡	秦野市今泉	161
167	今泉西堀遺跡	秦野市今泉	161
168	堂坂遺跡	秦野市渋沢字竹ノ上	162
169	寺山遺跡	秦野市寺山	162
170	寺山金目原遺跡	秦野市寺山字金目原	162
171	平沢同明遺跡	秦野市平沢堂明	162
厚木市			
172	松久保遺跡第３地点	厚木市温水松久保	163
173	温水宮原遺跡	厚木市温水字宮原	164
伊勢原市			
174	池端・坂戸遺跡	伊勢原市伊勢原４丁目	165
175	石田・細屋遺跡第６地点	伊勢原市石田	166

文献目録（文献No.は表中文献No.と一致）

149　今泉克巳ほか　2010　横浜市神奈川区　三ツ沢貝塚　沢渡55番80号地点の調査　（有）有明文化財研究所

150　渡辺外ほか　2010　仏向町団地建替事業に伴う発掘成果 仏向貝塚・仏向遺跡・仏向町遺跡　かながわ考古学財団調査報告244　（財）かながわ考古学財団

151　阿部友寿ほか　2012　仏向貝塚・仏向遺跡・仏向町遺跡　仏向町団地（2BL）埋蔵文化財包蔵地発掘調査　かながわ考古学財団調査報告279　（公財）かながわ考古学財団

152　小池聡ほか　2012　神奈川県横浜市保土ケ谷区　仏向遺跡　横浜市保土ケ谷区仏向町874-４外所在遺跡　（株）盤古堂

153　川端清倫ほか　2011　神奈川県平塚市　平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書８　第１分冊　15Ｅ・Ｆ・Ｇ、37、38区　15Ｅ・Ｆ・Ｇ、37、38、39、40、41Ａ・Ｂ、48、50Ａ・Ｃ・Ｄ、51Ａ～Ｅ、52Ａ・Ｂ区　平塚都市計画事業真田・北金目特定土地区画整理事業に伴う調査報告　平塚市真田・北金目遺跡調査会・独立行政法人都市再生機構

154　川端清倫ほか　2012　神奈川県平塚市　平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書９　第１分冊　53Ａ～Ｃ、54Ａ、57Ａ・Ｇ１区　53Ａ～Ｃ、54Ａ、57Ａ～Ｈ、58Ａ～Ｄ区　平塚都市計画事業真田・北金目特定土地区画整理事業に伴う調査報告　平塚市真田・北金目遺跡調査会・独立行政法人都市再生機構

155　川端清倫ほか　2012　神奈川県平塚市　平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書９　第２分冊　57Ｂ～Ｈ、58Ａ区　53Ａ～Ｃ、54Ａ、57Ａ～Ｈ、58Ａ～Ｄ区　平塚都市計画事業真田・北金目特定土地区画整理事業に伴う調査報告　平塚市真田・北金目遺跡調査会・独立行政法人都市再生機構

156　川端清倫ほか　2012　神奈川県平塚市　平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書９　第３分冊　58Ｂ～Ｄ区、まとめ、引用・参考文献、報告書抄録、遺構・写真遺物　53Ａ～Ｃ、54Ａ、57Ａ～Ｈ、58Ａ～Ｄ区 平塚都市計画事業真田・北金目特定土地区画整理事業に伴う調査報告　平塚市真田・北金目遺跡調査会・独立行政法人都市再生機構

157　川端清倫ほか　2013　神奈川県平塚市　平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書10　第１分冊　55Ａ・Ｂ、56、59Ａ・Ｂ、60Ａ～Ｃ、61Ａ～Ｄ、62、63区　平塚都市計画事業真田・北金目特定土地区画整理事業に伴う調査報告　55Ａ・56区　平塚市真田・北金目遺跡調査会・独立行政法人都市再生機構

158　井関文明ほか　2012　用田大河内遺跡Ⅱ　県道22号(横浜伊勢原)道路改良事業に伴う調査　かながわ考古学財団調査報告278　(公財)かながわ考古学財団

159　小池聡ほか　2010　神奈川県小田原市　曽我谷津岩本遺跡第Ⅰ地点　(株)盤古堂

160　大塚健一　2013　当麻遺跡第1地点　一般国道468号(さがみ縦貫道路相模原市当麻地区)建設事業に伴う発掘調査　かながわ考古学財団調査報告287　(公財)かながわ考古学財団

161　松田光太郎ほか　2012　葉山島中平遺跡　一般国道468号(さがみ縦貫道路相模原市城山地区)建設事業に伴う発掘調査　かながわ考古学財団調査報告286　(公財)かながわ考古学財団

162　戸田哲也ほか　2011　神奈川県秦野市　太岳院遺跡2006-02地点発掘調査報告書

163　坪田弘子ほか　2013　神奈川県秦野市　太岳院遺跡　尾尻尾崎遺跡　水神遺跡　今泉西堀遺跡　秦野市教育委員会

164　坪田弘子ほか　2012　神奈川県秦野市　堂坂遺跡9204地点・9308地点・9401地点・2001-04地点・2001-06地点　寺山遺跡9504地点　寺山金目原遺跡9608地点・9701地点・9804地点・9904地点　平沢同明遺跡9301地点　秦野市教育委員会

165　小林義典ほか　2010　神奈川県厚木市　松久保遺跡　第３地点　発掘調査報告書　(株)玉川文化財研究所

166　渡辺務　2013　温水宮原遺跡　日本窯業史研究所報告　第82冊　(株)日本窯業史研究所

167　小西絵美ほか　2012　池端・坂戸遺跡　県道44号(伊勢原藤沢)地方道路等整備(道路新設改良)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査　かながわ考古学財団調査報告 281　(公財)かながわ考古学財団

168　渡辺清史ほか　2012　神奈川県・伊勢原市　石田・細屋遺跡　第6地点　サービス付き高齢者向け住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査　国際文化財(株)

神奈川県内出土の弥生時代土器棺（３）

―弥生時代中期後葉から古墳時代前期（その２）―

弥生時代研究プロジェクトチーム

前回から弥生時代中期後葉から古墳時代前期にかけての土器棺集成を行い、前稿の「神奈川県内出土の弥生時代土器棺（２）では、集成した土器棺資料の図を提示した。今回はその集成資料に関する出土遺跡、遺構、土器などの概要解説を行った。前回の集成図と併せて見ていただくことをご了解いただきたい。概要解説の遺構名の前に付けた番号は、前稿の集成図および一覧表と共通である。遺構名の後に付けた図番号および解説文中の土器番号も、前稿における挿図の番号に対応している。

なお、前稿の集成図において、第４図の「18．山王山遺跡39号土壙」と「19．山王山遺跡１号埋甕」とは、番号名称と図が入れ替わっているので、ここで訂正する。

各資料の出土状況の集成および執筆は当プロジェクトメンバーが分担して行い、それぞれの文責は次の通りである。１～６・18・19：櫻井真貴、７～13：飯塚美保、14～17・20～22：新開基史、23・24・40～45：渡辺　外、25～30・46：戸羽康一、31～39：池田　治。全体の編集は、池田が行った。

また前々回に集成した弥生時代前期から中期中葉までの土器棺関連資料についての新規報告資料を、本稿末尾に補遺として掲載した。新資料の解説は戸羽が担当した。（池田）

弥生時代中期中葉から古墳時代前期の土器棺関連事例の概要

１．三荷座前遺跡　環濠覆土中（第４図）

三荷座前遺跡は、川崎市高津区三荷座前に所在している。遺跡が位置する高津区は川崎市の中央部にあたり、多摩川と鶴見川にはさまれた下末吉台地の北東端部の舌状台地上に位置している。遺跡付近には鶴見川の支流である矢上川が流れ、この舌状台地も樹枝上に複雑に開析されている。遺跡の標高は46.1ｍを測る。調査区は第１地点と第２地点に分かれていて、環濠と考えられる遺構は、第２地点で発見されている。

土器棺と考えられる土器は、遺跡内を北西から南東方向に走る環濠内で発見された。環濠の幅は確認面で3.7ｍ、溝底で0.4～0.6ｍを測り、断面形はＶ字状を呈している。土器棺とみられる土器は、溝底から20㎝ほどのところに２の口縁部を欠いた壺がほぼ正位で発見され、内部からは１の甕の底部が発見された。さらに２から南に1.6ｍの辺りで１の甕のその他の部分が散乱したような状態で破片となって発見され、完形に復元された。調査者は図示したように２の壺の上に１の甕を乗せた状態で埋納されたものが、後に底部以外は移動し、底部のみ空洞であった２の内部へ落ち込んだものと推定している。１は口縁部に斜縄文を施文する甕で、器高29.0㎝、胴部最大径は20.6㎝を測る。２はＳ字状結節文で区画された縄文帯が施文される壺で、残存高が30.3㎝、胴部最大径は32.0㎝を測る。１は吉ヶ谷式系、２は久ヶ原式系土器と報告されている。弥生時代後期に比定される。

２．三荷座前遺跡　１号方形周溝墓　西溝（１）（第４図）

この土器棺は、第２地点の東寄りにある１号方形周溝墓の西溝で発見された。１号方形周溝墓の規模は西

溝部分で方台部長9.3mである。西溝中央部の溝底にやや南寄りに50×66cm、深さ15cm程度の掘り込みが設けられ、そこに胴部上位以上を打ち欠いた壺形土器が合わせ口状に２点上下に重ねて配置してあった。１が上方に倒置されが下方に正位で配置されていた。１は胴部上位に撚糸文が、２には斜縄文が施されている。双方の土器とも穿孔はされず、副葬品と見られるその他の遺物も出土しなかった。２点とも吉ヶ谷式系のものとして報告されている。弥生時代後期に比定される。

３．三荷座前遺跡　１号方形周溝墓　西溝(２)(第４図)

この土器棺は、西溝南側の２号方形周溝墓との重複部分から発見されている。溝底に正位に据えられた３の甕形土器の上に４の高坏口縁部破片が逆位で蓋をするように配されていた。４のその他の部分は40cmほど西側から出土している。このため本来は３の上に４を被せたような状況で据えられていたと推定されている。３・４とも土圧でつぶされており、それぞれ一部を欠いている。３は脚部を欠損した台付甕で、現存高27.7cm、胴部最大径は21.0cmを測る。４は高坏で脚台部を欠いており、坏部も３／４の残存である。現存高は13.3cm、最大径は口縁部で14.0cmを測る。４は文様部分を除く内外面が赤彩されている。久ヶ原式系と報告されている。弥生時代後期に比定される。

４．野川神明社境内遺跡　１号土器棺墓(第４図)

川崎市宮前区野川に所在している。この付近は末長丘陵の北東端近くにあたり、丘陵状は樹枝上に複雑に開析を受けていることは三荷座前遺跡と類似した傾向にある。遺跡付近の標高は39mほどである。土器棺墓３基、方形周溝墓４基が調査されている。

１号土器棺墓の掘り込みの平面形はほぼ円形を呈し、直径が概ね１m程度、深さが20cmほどである。ただし、遺物の出土状況から判断して上部は削平されているものとみられる。土器棺自体は大型の壺であるが、胴部上位以上が撹乱によって失われている。報告文では上位に羽状縄文を区画した連続山形文が一段めぐらされており、胴部は朱が塗られ、胴部下位には直径１cmほどの孔が一個、山形文付近には二対の補修孔があるとされている。土器自体の実測図が掲載されていないため出土状況からの判断ではあるが、最大径は50cmほどの土器であると推定される。弥生時代後期に比定される。

５．野川神明社境内遺跡　２号土器棺墓(第４図)

２号土器棺墓は掘り込みが長径１m弱、短径が70cmほどで、平面形は不整楕円形をなす。長軸がほぼ南北方向にある。深さは確認面から20cmほどであるが、土器棺自体が掘り込み確認面よりも上層で発見されているので、本来の掘り込みは40cm以上あったものと推定される。土器棺の棺身は頸部以上を欠く壺で、底部と頸部は別個体の土器片で覆われていると報告されている。掘り込み内に口縁部を北に向けた横位で置かれている。棺身の壺は現存高で70cm、最大径は40cm以上と推定される。文様は頸部と胴部上半に沈線区画の羽状縄文帯を施文し、その下位に羽状縄文を充填した連続山形文が一段巡らされ、頸部と胴部には孔が２個開けられていると報告されている。弥生時代後期に比定される。

６．野川神明社境内遺跡　３号土器棺墓(第４図)

３号土器棺墓は遺構の一部が削平により失われているため本来の平面形や規模は不明であるが、報告文で

は長径1.2m、短径0.8m程度の楕円形の掘り込みが復元されている。遺構確認面からの深さは40cmほどであるが、２号土器棺墓と同様に土器棺自体が遺構確認面よりも上層で発見されたため、少なくとも45cm以上の掘り込みがあったものと推定される。長軸はほぼ南北方向に沿っている。土器棺はほぼ完形に復元されると推定される壺で、高さは概ね70cm、胴部最大径は45cm程度と推定される。文様は三段の羽状縄文を平行沈線で区画した文様帯を頸部と胴部上位に２帯施文している。胴中央部の一部を打ち欠き、その破片を口縁部に置いてある。また器面の一部に不規則な朱が施されているとされている。弥生時代後期に比定される。

７．八幡山遺跡　壺棺（第１図）

横浜市都筑区に所在し、鶴見川支流の早渕川左岸の、舌状に張り出した下末吉台地上に立地している遺跡である。本遺跡は弥生時代中期後葉から後期にかけての集落が展開している。このうち、Ｙ17号住居址の南東壁際の確認面付近で、壺が組み合わさった状態で出土している。口縁部を欠損した正位の壺２の上に、壺の底部１が逆位で蓋をするように検出されている。掘り込みなどは確認されていない。報告書文中では壺棺と呼称し、弥生時代中期後葉に位置づけている。棺身となる壺２は器高18cmほどである。土器棺と断定することは難しいものの、組み合わさった状態での出土から、可能性があるものとして掲載した。

８．境田遺跡　Ｙ１号住居址　Ｐ２（第１図）

横浜市都筑区に所在し、鶴見川支流の早渕川右岸の、下末吉台地上に立地している遺跡である。本遺跡は弥生時代中期後葉の集落が検出されている。Ｙ１号住居址のＰ２と報告された38×39cm、深さ22cmのピットから、３個の壺が重なって検出されている。胴部最大径17.3cmの口縁部を欠損した壺がピット内にほぼ直立して埋められており、頸部より上を欠損した胴部最大径11.4cmの小型の壺が逆位で被さっていた。その上に壺の頸部～胴部上半が下の２つの土器を包むような状態で検出されている。これらは住居との関係は不明ながら、土器棺の可能性は高いものと考えられる。いずれの壺も弥生時代中期後葉に比定される。

９．歳勝土南遺跡　３号方形周溝墓（第１図）

横浜市都筑区に所在し、鶴見川支流の早渕川左岸の、下末吉台地上に立地している遺跡である。歳勝土遺跡に隣接するが、遺跡の境は未調査であり両遺跡の連続性などは不明である。発掘調査が行われた１号方形周溝墓に近接した畑から土器が出土したため、土器が出土した箇所のみの調査が行われたのが、３号方形周溝墓である。胴部最大径49cm、現存高48.4cmの頸部より上を欠損した壺が正位で出土している。壺は幅90cmほどの溝内から溝底より５cmほど浮いて出土した。壺の付近は25cmほどレベルが下がっているが、調査範囲の狭さから、溝内土坑と断定は難しい。壺は弥生時代中期後葉に比定される。

10．歳勝土遺跡　Ｓ３号方形周溝墓　Ｔ１号壺棺（第１図）

横浜市都筑区に所在し、鶴見川支流の早渕川左岸の、下末吉台地上に立地している遺跡である。本遺跡は弥生時代中期後葉の方形周溝墓群と後期の集落が展開している。墓群の西端のＳ３号方形周溝墓の西溝中央よりやや北寄りで出土している。溝底が10cm程度掘り下げられた土坑内から検出された。肩部より上を欠損した壺に完形の甕を逆位に被せた形で、ほぼ原形を留めた形での出土である。壺は底径７cm、胴部最大径35cm、現存高28.5cm、甕は口径35cm、高さ39cmである。壺および甕ともに弥生時代中期後葉に比定される。

11．歳勝土遺跡　Ｓ４号方形周溝墓　Ｔ２号壺棺(第１図)

墓群のほぼ中央部にあるＳ４号方形周溝墓の南溝西端で出土している。溝底が６㎝程度掘り下げられた土坑内から検出された。肩部より上を欠損した壺に胴部上半より上を欠損した壺を逆位に被せたものが、横倒しの状態で出土している。棺に使われた壺は底径5.9㎝、胴部最大径23.5㎝、現存高25㎝、蓋に使われた壺は底径6.6㎝、胴部最大径15㎝、現存高10㎝である。いずれも弥生時代中期後葉に比定される。

12．歳勝土遺跡　Ｔ３号壺棺(第４図)

墓群の西端のＳ３号方形周溝墓の西溝北端の脇に位置し、周溝墓から約30㎝離れて出土している。土層の状態から何らかの掘り込みが想定されるが、木の根等による攪乱により、明確には捉えられなかったようである。胴部上半より上を欠損した壺が横倒しの状態で検出されている。その上に別個体の壺の破片が表面を覆って検出されている。棺に使われた壺は底径９㎝、胴部最大径39㎝、現存高29㎝で、胴部に穿孔が確認される。いずれの壺も弥生時代後期に比定される。後期の集落域から外れた台地の縁辺にあたり、出土状況から土器棺の可能性があるものとして掲載した。

13．歳勝土遺跡　Ｔ４号壺棺(第４図)

Ｔ３号壺棺から７ｍほど離れた台地の縁辺部に位置している。出土状態が不明である壺の胴部で、弥生時代後期に比定される。後期の遺物がほとんど散布していないエリアで、Ｔ３号壺棺から比較的近いことなどにより、壺棺とされたものであるため、断定することは難しいと考えられる。可能性があるものとして集成対象とした。

14．権田原遺跡　Ｆ区５号土坑(第１図)

横浜市都筑区早渕に所在し、鶴見川支流の早渕川右岸の沖積地を望む台地上に立地している環濠集落である。遺構は、環濠集落の南北に営まれた方形周溝墓を主体とする墓域の内、北側の墓域にあり、周溝を伴わない単独の土坑である。土坑の規模は長軸が1.23ｍ、短軸が1.05ｍで、底面は長軸方向に２段になっており、深さは最も深い部分で0.73ｍである。土器は土坑の最も深い部分に大型の壺(微細図上計測で胴部径40㎝以上)を横たえ、甕を蓋として被せてあった。壺の口頸部は打ち欠かれ、破片の一部が甕との隙間に置かれていたという。弥生時代中期後葉に比定される。

15．宮原遺跡　Ｈ溝内土坑　甕棺(第２図)

横浜市都筑区佐江戸に所在し、鶴見川左岸の沖積地に岬状に突き出した台地上に立地している環濠集落である。遺跡は土地区画整理事業による破壊の中でかろうじて断片的に記録されたものであり、当該遺構以外にも類する遺構が存在した可能性がある。遺構のあるＨ溝は集落が展開する台地の先端部をめぐる環濠で、断面Ｖ字状を呈し、幅3.3ｍ以上、深さ2.7ｍ以上の規模をもつ。土坑はＨ溝の覆土中層から掘り込まれている。規模は長軸1.27ｍ、短軸0.56ｍで深さは不明である。報告で甕棺としている甕は土坑中央から検出された。土坑の長軸方向に合わせ、口縁部を南東に横たえて埋置され、甕の内部胴部中位から下位には骨粉・焼土を含む灰褐色土が入っていた。甕はほぼ完形で底部を欠いているが、内容物の状況から埋置段階では底部も残存していた可能性がある。土器の残存高は30.3㎝、胴部最大径は25.6㎝である。弥生時代中期後葉に比

定される。

16．折本西原遺跡　７号方形周溝墓（第２図）

横浜市都筑区折本町に所在し、鶴見川左岸の台地上に立地する環濠集落である。本遺構は集落域の北側に重複する墓域にあり、台地北側縁辺の斜面に位置する。規模は東西が11.4m、南北は北側周溝が道路により削平され不明である。土器棺は７号方形周溝墓の南溝東端付近底面に穿たれた60cm四方、深さ30cmの土坑に、肩部以上を欠いた大型の壺が、胴部下半を土坑底部につけ、斜めに横たえた状態で埋置されていた。土坑は埋置した土器の大きさに対して浅いが、近くの溝底部に土坑を掘削した際に排出されたとみられるロームが堆積しており、溝の埋没前に掘削されたと推測されている。壺の残存高は43.3cm、胴部最大径は50.1cmである。弥生時代中期後葉に比定される。

17．東耕地遺跡　壺棺（第８図）

横浜市緑区東本郷町に所在し、鶴見川右岸の台地上に立地している遺跡である。本遺構がある第１号方形周溝墓は墓域の一部とみられる調査区北側にあり、南北に隣接して検出された２基の方形周溝墓の内、北側に位置する。規模は一辺約９ｍのほぼ正方形である。土器棺は、周溝の南東角に外へ張り出すように掘削された土坑の底面に、頸部から口縁部を欠いた壺がやや東に傾いて正位に置かれ、高坏の坏部1/3破片を被せてあった。内部から骨片等は検出されていない。土坑の規模は南北約60cm、深さ約45cmを測り、周溝を切って構築されていた。壺の残存高は34.1cm、胴部最大径は36.7cmである。古墳時代前期に比定される。

18．山王山遺跡　39号土壙（第４図）

横浜市港北区岸根町に所在している。鶴見川中流右岸の沖積地の南側に位置する下末吉台地の尾根と谷が入り組んだ複雑な地形をした丘陵上に位置している。遺跡を乗せた尾根の北側は比較的急峻な崖となっており、遺構は概ね尾根上から南東に向いた斜面上から谷部に分布している。この遺跡では弥生時代中期後葉から古墳前期までの集落や方形周溝墓などが発見されている。

39号土壙は深く谷が入り込んだ東側斜面上に位置しており、尾根部のすぐ下部に広がる３号土器捨て場の一部に存在している。壙規模は長軸が118cm、短軸80cmを計る不整楕円形をなす。深さは斜面上位である西壁で55cmを図るが、斜面下位の東壁は削平され失われている。土壙内に底部を欠いた１の甕が逆位で置かれ、その中から２の壺口縁部が出土した。土壙内から出土した甕および壺口縁部を、土器棺の事例として取り上げる。１の甕は、残存高約23cm、胴部径約24cm である。弥生時代後期に比定される。

19．山王山遺跡　１号埋甕（第４図）

東方向に緩やかに傾斜した台地の尾根付近に位置している。この遺構は、長軸39cm、短軸32cmを測る楕円形の掘り込み内に甕を埋設したもので、埋設されていた甕を本稿では土器棺として取り上げた。掘り込みの深さは確認面から22cmであるが、土器の一部が確認面より露出しているので本来の掘り込みはさらに深かったものと推定される。土器棺として取り上げる土器は、ほぼ完形の平底の甕で、器高21.3cmを測る。弥生時代後期に比定される。

20．上星川遺跡　第12号住居址　合わせ口甕棺(第５図)

横浜市保土ヶ谷区釜台町に所在し、帷子川左岸の台地上に立地している遺跡である。本遺構がある第12号住居址は、検出された集落域の東寄りの台地縁辺に近い緩斜面にあり、規模は長軸が5.25ｍ、短軸が3.85ｍである。土器棺は住居西側隅の周溝内に穿たれた深さ34cmのＰ14内に埋置されていた。３個の土器を組み合わせており、下段に脚部先端と口縁部を欠いた台付甕を底面に接して正位に置き、中段に胴部下半を欠いた甕を合わせ口状に逆位に重ね、上段に口縁部から底部まで復元可能で一部欠損した甕を載せ、最後に粘土で覆っていた。上段の甕は、ピットの掘り込み面よりも高い位置にあり、横倒しに潰れた状態で出土している。下段の甕は残存高が19.0cm、胴部最大径が18.2cm、中段の甕は残存高が17.0cm、胴部最大径が18.5cm、上段の甕は器高が27.0cm、胴部最大径が21.5cmである。弥生時代後期に比定される。

21．沼間ポンプ場南台地遺跡　３号住居址内壺(第８図)

逗子市沼間に所在し、田越川左岸の丘陵上に立地している遺跡である。３号住居址は、丘陵頂部の南～東側に展開する集落の南端に位置し、規模は長軸が4.09ｍ、短軸が4.05ｍで、焼失住居である。土器棺と推定される壺は、３号住居址南東隅の周溝際床面直上に、胴部下半を床につけ、斜めに倒れた状態で出土した。すぐ脇には壺の頸部が口縁部を床につけて置かれてあったが直接の関係はなさそうである。壺は口縁部の大部分を欠くがほぼ完形で、胴部上半に径約10cmの孔が穿たれていた。土器棺の可能性を示す根拠はこの穿孔のみである。土器の器高は32.2cm、胴部最大径は28.8cmである。古墳時代前期に比定される。

22．池子遺跡群№.１－Ａ地点　第２号方形周溝墓　北溝(第８図)

逗子市池子に所在し､池子川右岸の樹枝状に開析された狭い谷戸の低地部を広範囲に調査した遺跡である。№.１－Ａ地点は谷戸開口部の最も下流側に位置する。本遺構がある第２号方形周溝墓は、北西側および北東側の丘陵崖裾微高地に形成された墓域のうち、北西側一群の南側に位置する。土器棺と推定される土器は、北溝の東寄りの溝底面から約７cmの高さから出土した。３個の土器を組み合わせており、下段に肩部以上を欠いた壺を正位に埋置し、その上面を覆う形で上下を欠いた胴部のみの壺を被せ、さらにその上から口縁部まで残る丸底の壺を破砕して覆っていた。内部からは骨粉と推定される白色の粉が検出されている。下段の頸部を欠いた壺は残存高24cm、胴部最大径32.8cmである。古墳時代前期に比定される。

23．三足谷遺跡　１号墓壙(第８図)

横須賀市池田町に所在し、平作川左岸の丘陵上西側緩斜面に立地する。調査範囲の北端、18号住居址に隣接した１号墓壙より完形の甕１点が出土している。墓壙の大きさは長径33cm、短径30cm、深さ18cmを測る。墓壙内から出土した甕は、坑底に接地して口縁部を上に向けてやや傾いた状態で埋納されていた。法量は比較的小振りで、口縁～頸部にかけて輪積痕を６段分残している。器高は18.0cm、胴部径は22.2cmである。口縁部にキザミや押捺はなく、胴部にハケメ調整が残る。古墳時代前期に比定される。

24．住吉遺跡　１号住居址覆土内合わせ口壺(第８図)

横須賀市衣笠に所在し、平作川の支流である大矢部川右岸の丘陵端部に立地している。第１号住居址北東隅付近の覆土内から合わせ口にして据えられた状態で壺２点が出土した。頸部以上を打ち欠いた壺１を正位

で埋置し、胴部上半を打ち欠いた法量のより大きい壺２を倒立させた形で覆い被せるようにしている。どちらの壺も小振りの底部から球形胴が強く張り出している。棺身となる壺１は残存高29.6cm、胴部径34.9cm、蓋となる壺２は残存高31.7cm、胴部最大径53.7cmを測る。住居址の覆土堆積中に埋納されたものと考えられており、報文中では「再葬墓」として取り扱われているが、土器の特徴からは古墳時代前期に帰属するものと考えられるので、本稿では土器棺墓の一事例とした。

25．大源太遺跡　１号土壙（第２図）

藤沢市片瀬に所在し、片瀬川左岸の砂丘低地に立地する。標高は８ｍ前後を測る。弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴状遺構２基、方形周溝墓２基、土壙１基が検出されている。１号土壙は竪穴状遺構と方形周溝墓の中間地点に位置している。土壙は平面楕円形を呈し、長軸83cm、短軸74cm、深さ19cmを測る。壺型土器が逆斜位の状態で出土している。壺は底部に木葉痕が見られ、土器の高さは30.3cm、胴部最大径は22.0cmである。弥生時代中期後葉に比定される。

26．石名坂遺跡第５地点　１号住居址内土壙（第２図）

藤沢市本藤沢に所在し、相模野台地南端の稲荷台地と呼称される台地に立地する。標高は45ｍ前後を測る。弥生時代の住居跡12軒、方形周溝墓が７基、溝（環濠）２条、土坑２基、ピット23基が検出されている。１号住居址と３・４号方形周溝墓は調査区北側の緩斜面に位置する。１号住居址内土壙は住居北西壁際に位置する。土坑内には頸部以上を欠損した正位の壺に、逆位の甕が被さった状態で設置されていた。土壙は平面楕円形を呈し、長軸73cm、短軸60cm、１号住居址床面からの深さは20cmを測る。覆土は甕の底部付近までマウンド上に盛土され、住居壁溝が土坑部分で途切れることが確認されている。棺身となる壺は肩部および胴部に縄文が施され、外面が赤彩される。現存高は37.7cm、胴部最大径は38.5cmである。甕は口縁部下に補修孔のような穿孔があり、底部に木葉痕がみられる。弥生時代中期後葉に比定される。

27．石名坂遺跡第５地点　３号方形周溝墓　南溝（第２図）

３号方形周溝墓の規模は周溝外縁で長軸12.8ｍ、短軸10.2ｍであり、主体部が確認されている。土器棺は南溝東端のテラスで、正位の壺に逆位の甕が被さった状態で出土している。土器棺はテラス底面を長軸33cm、短軸28cmの円形に掘り込み、底部を２cm埋め込んで設置されていた。甕は無文で上部はもともと欠損しており、底部は削平による欠損である。壺は無文で、口縁部～肩部を欠損しており、現存高は22.2cm、胴部最大径は27.5cmである。外側の甕が北西側の壁面を抉るように設置されていることから、テラス構築時より後に壁面を掘削し、土器を設置している可能性が考えられている。弥生時代中期後葉に比定される。

28．石名坂遺跡第５地点　４号方形周溝墓　西溝（第３図）

３号方形周溝墓に切られる。南溝は検出されていない。規模は周溝外縁で長軸14.8ｍ、短軸10.5ｍである。西溝内に平面楕円形を呈する長軸75cm、短軸56cm、溝底からの深さ12cmの土壙が検出された。この土壙内から、大小の甕を合わせ口にし、横に臥せた状態の土器棺が出土している。なお、土壙は周溝覆土を切って構築されていることが確認されている。１・２の甕は共に口縁部にキザミがみられる。棺身となる２の甕は器高36.2cm、胴部最大径は26.4cmである。弥生時代中期後葉に比定される。

29．大庭城址公園内遺跡　方計周溝墓ＳＤ10　東溝(第５図)

藤沢市に所在し、引地川と小糸川に挟まれた南北に細長い城山台地の南端部に立地する。標高は50ｍを測る。弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居址16軒、竪穴状遺構１基、方形周溝墓５基、溝１条が検出されている。方形周溝墓SD10は調査区北側の斜面地に位置する。西側部分の周溝および主体部は検出されておらず、竪穴住居跡SI20を切って構築されている。検出範囲での規模は遺存部分で長軸10.7ｍ、短軸10ｍである。東溝の平面不整円形を呈し、長軸1.1ｍ、短軸1.0ｍ、周溝からの深さ54cmのくぼみ部分から壺が倒立した状態で出土した。壺は完形で、無文である。土器の高さは39.9cm、胴部最大径は36.4cmである。弥生時代後期に比定される。

30．高倉枯藪遺跡　第１号方形周溝墓　西溝(第８図)

藤沢市高倉字枯藪に所在し、境川中流右岸の台地上に立地する。標高は23ｍを測る。方形周溝墓が２基確認されている。第１号方形周溝墓西溝内のピットから壺が正位の状態で出土した。ピットは平面不整円形を呈する長軸52cm、短軸40cm、深さ22cmの測り、北側部分を後世のピットによって切られている。西溝は北側半分が削平によって失われているが、壺の検出状況から方形周溝墓の一部を成すものと考えられている。壺は無文で、器高28.4cm、胴部最大径31.8cmを測る。古墳時代前期に比定される。

31．社家宇治山遺跡　ＹＫ3号方形周溝墓　東溝(第６図)

海老名市社家に所在し、相模川左岸の沖積微高地に立地している遺跡である。本遺構があるＹＫ３号方形周溝墓はＰＤ３地区に所在し、調査対象地のほぼ全面に展開している弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓群の中の、やや北寄りの西端に位置している。本方形周溝墓の規模は方台部長約11.0ｍを測り、本遺跡の方形周溝墓群の中では小型の部類に属する。土器棺と推定した土器は、ＹＫ３号方形周溝墓の東溝南端付近の周溝壁に掘り込まれた0.9ｍ×0.5ｍの土坑の中に、口縁部と底部～胴下半を欠いた壺が口縁部をやや下に向けた斜位の状態で横たえられていた。土坑内から出土した土器はこの壺のみである。土器の出土状態から、この土坑は周溝の覆土中から掘り込まれていたと推測される。土坑内に埋置された土器が底部が欠失している壺だけである点は、土器棺とするにはやや根拠が薄いのであるが、方形周溝墓周溝内の土坑出土という出土状況から土器棺と推定した。壺の残存高は35.2cm、胴部最大径は約34cmである。頸部および胴部上位にＳ字状結節文区画による縄文帯が２帯施文されている。器形から弥生時代後期後半に比定される。

32．中野桜野遺跡　11号方形周溝墓　北溝(第３図)

海老名市中野に所在し、相模川左岸の沖積微高地に立地している遺跡である。北方約１kmに社家宇治山遺跡がある。本遺跡は弥生時代中期後葉および弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓群が調査地の南半分に展開している。本遺構は、方形周溝墓群のほぼ中央にある11号方形周溝墓の北溝中層の外側壁際から出土した壺と甕の組合せをもって土器棺と推定したものである。11号方形周溝墓は本遺跡の方形周溝墓群の中では中程度の規模である。土器の出土状態は、口縁部を欠失している壺が周溝覆土中から横倒しの状態で出土し、壺の口縁部側の開口部は甕の破片で蓋をするように塞がれていたものである。壺および甕を納めた掘り込みは検出されていないが、組み合わせるようにして出土した土器の出土状況から、土器棺と推定して集成対象とした。壺は無文であるが、壺および甕ともに弥生時代中期後葉に比定される。壺の残存高は48.6cm、

胴部最大径は約40cmである。

33．本郷中谷津遺跡　１号方形周溝墓　東溝（第３図）

海老名市本郷に所在し、相模川左岸の台地上に立地する遺跡である。同一台地上南隣に本郷遺跡がある。第９次調査で弥生時代中期後葉の方形周溝墓８基が調査され、その中の１号方形周溝墓東溝の北端の溝底に掘り込まれた土坑状の落ち込みから、甕の中に壺が入れ子状に入れられた状態で、逆位で出土している。合わせ口ではなく入れ子状である出土状態は土器棺としてそぐわないかも知れないが、土器を据えるためと考えられる落ち込みを伴っていることから、土器棺の候補として取り上げる。甕は高さ22.2cm、胴部径20.6cmを測り、壺は胴部上半を欠失し、現存高17.7cm、胴部径15.4cmである。弥生時代中期後葉に比定される。

34．本郷遺跡　25号方形周溝墓　北溝（第６図）

海老名市本郷に所在し、相模川左岸の台地上に立地する遺跡である。遺跡の標高は21～22m前後を測る。弥生時代後期から古墳時代前期の環濠、居住域、方形周溝墓群が発見されている。６群に分けられる方形周溝墓群のうちのＡ１群にある25号方形周溝墓の北溝西端（周溝北西角）の溝中に、３個の土器を組み合わせた土器棺が立てられた状態で埋置されていた。この土器棺は一番下に底部を打ち欠いた甕を正位で置き、その上に胴部下位と口縁部を打ち欠いた壺を正位で覆うように被せ、更に一番上に壺の底部片を逆位に被せて蓋をしている。土器棺の下端はほぼ周溝溝底に着いていて、溝壁にもたれかかるように設置されていた。土器棺に伴う掘り込みは確認されていない。３個の土器を組み合わせた土器棺全体の高さは約56cmに復元されている。棺身下の甕は高さ30.6cm、胴部径30.1cm、棺身上の壺は高さ28.8cm、胴部径34.0cm、蓋の壺底部片は高さ5.7cmである。棺身上の壺はＳ字状結節文区画の縄文帯を無文帯を挟んで３帯施文される。弥生時代後期前半に比定される。

35．本郷遺跡　34号方形周溝墓　西溝（第６図）

方形周溝墓群のＡ１群にある34号方形周溝墓の西溝北端（周溝北西角）の溝底部に、大型の壺が正位で埋置されていた。周溝が途切れる隅切れ部に隣接した周溝底部に置かれた状態で出土し、土器の上半は削平されて失われていた。残存高は46.6cm、胴部径は62.4cmを測る。胴部には縄文を充填したヘラ描き鋸歯文が施文されるが上位の文様は不明である。弥生時代後期に比定される。

36．本郷遺跡　環濠　覆土上層（第６図）

本郷遺跡のＲＣ地区で発見された環濠の17区の覆土上層から出土した。正位で置かれた広口壺に頸部以上を欠いた壺を逆位で重ねている合わせ口の土器棺である。上位の壺の方が重なり部分が内側になる関係にある。土器棺に伴う掘り込みは確認されていない。周囲からは他にも多数の土器が出土している。土器棺内部から人骨や副葬品は出土していない。棺身になる広口壺の器高は26.0cm、胴部最大径は31.3cm、上位になる壺は残存高20.8cm、胴部径23.5cmである。広口壺は折り返し口縁で肩部に縄文帯が施文されている。上位の壺は無文である。弥生時代後期に比定される。

37．大蔵東原遺跡　６号方形周溝墓　東溝（１）（第５図）

寒川町大蔵に所在し、相模川左岸の台地縁辺部の平坦地に立地する。遺跡の標高は約18m。弥生時代後期の方形周溝墓群（13基以上）の中で最大級の方形周溝墓である６号方形周溝墓の東溝の南端（陸橋際）に２基の壺棺が埋設されていた。本遺構（No.37）はそのうちの南側の１基である。周溝の途切れる陸橋際の周溝内に、覆土中から溝底まで掘り込まれた土坑の中に頸部以上を欠いた壺２が正位で据えられ、その上に壺１が逆位で重ね合わせられていた。壺同士を用いた合わせ口の土器棺である。１の壺は無文、２の壺は口唇部に櫛刺突文が施文される東海系の壺で、２の壺は胴部上位以上を欠く。棺身となる２の壺は、現存高29.1cm、胴部最大径34.0cm、逆位で被せられていた１の壺は、器高33.8cm、胴部径約29.5cmである。弥生時代後期前半に比定される。

38．大蔵東原遺跡　６号方形周溝墓　東溝（２）（第５図）

本遺構（No.38）は、前出のNo.37と並んで、大蔵東原遺跡６号方形周溝墓の東溝周溝内のに埋設されていた。周溝内の覆土中から溝底まで掘り込まれた土坑の中に、頸部以上を欠失した壺４を正位で据え、その上に壺３の胴部破片が重なるようにして出土した。遺構上部は削平されているため、壺３が元々胴部破片だけであったかどうか不詳である。棺身の壺４は櫛描文施文の東海系土器、上位になる壺３は縄文を充填した沈線区画山形文の東京湾沿岸系の土器で、系譜の異なる土器の組み合わせである。棺身となる４の壺は、現存高44.3cm、胴部径53.7cmである。弥生時代後期前半に比定される。

39．寒川町No.14遺跡　採集資料（第７図）

寒川町史に採録されている採集資料で、壺棺と推定されている。この資料は、相模川左岸の台地上に立地している寒川町No.14遺跡の範囲内である寒川町宮山1,315番地の畑地から出土したと伝えられている。頸部以上を欠失している壺に、他の壺の胴部下半を利用して蓋がされていたという。棺身となる壺は、肩部に櫛描文が施文されている大型の土器で、胴部最大径は58.3cm、現存高は56.6cmである。寒川町史での記録によれば、蓋として使われていた資料は現存しておらず実測図のみ残されているという。出土状況が不詳の資料であるが、本稿では参考資料として掲載した。弥生時代後期に比定される。

40．坪ノ内遺跡（第３地区）　ＳＤＨ01（１号方形周溝墓）（第３図）

平塚市真土に所在し、相模川右岸の市域南部に展開する砂丘上に立地する。標高は7.5mほどである。遺跡の最も高いところに立地しているＳＤＨ01（１号方形周溝墓）の周溝南西角より、壺１点が逆位で出土した。この壺は頸部を欠いた状態で埋置したものと考えられる。大きさは残存高52.5cm、胴部径43.2cmを測り、所謂長頸壺の器形で、文様構成上の特徴から弥生時代中期後葉の宮ノ台式土器のうち、前半の様相に含まれる。

41．真田・北金目遺跡群　57Ａ・Ｇ１区SK049（第７図）

平塚市真田に所在し、金目川左岸の河岸段丘上に立地する。57Ａ・Ｇ１区のSK049より、完形の壺・鉢を含む土器８点が出土した。内訳は壺６点、小形壺１点、鉢１点である。SK049は不整な楕円形を呈する土坑で、土器はいずれも底面より若干浮いた状態で出土している。土器の特徴から弥生時代後期に比定される。

本稿で取り扱っている他の事例と異なり、単棺の墓址ではない。

42．原口遺跡　第37号方形周溝墓　西溝周溝内土坑（第７図）

平塚市上吉沢に所在し、金目川右岸の河岸段丘上に立地する。先述の真田・北金目遺跡群とは、金目川を挟んだ対岸に位置している。本遺構は弥生時代後期墓域の南端中央に位置する本遺跡最大規模である第37号方形周溝墓の、西溝周溝内土坑の底面付近から甕１点が圧壊して出土したものである。この甕は頸部以上を欠損している。残存高24.7cm、胴部径22.6cmを測る。弥生時代後期に比定される。

43．原口遺跡　ＹＨ22号土坑（第３図）

この事例は、ＹＨ22号土坑の底面に一段深く掘り込まれた60cm×50cmの楕円形のピット内に、壺が斜位に置かれていたものである。壺は口縁部を欠損しているが、削平による欠失と考えられている。残存高は34.9cm、胴部径28.2cmを測る。弥生時代中期後葉の宮ノ台式土器のうち、後半の様相に含まれる。

44．向原遺跡　219号住居址内土壙（第８図）

平塚市上吉沢に所在し、原口遺跡と同じく金目川右岸の河岸段丘上に立地する。219号住居内土壙より胴部上半以上を打ち欠いた壺１点がやや傾いた状態で出土した。土壙の形状は78cm ×56cmの楕円形を呈し、住居址床面から82cmの深さであるが、住居址覆土中から掘り込まれていたと推定されている。壺は無文で胴部径約44cmである。土壙覆土中には他に甕口縁部破片が２点含まれていた。古墳時代前期に比定される。

45．砂田台遺跡　16号住居址Ｐ７（第３図）

秦野市南矢名に所在し、北金目台地の北側、大根川に面した北側平坦面上に立地する。環濠集落の一画にある16号住居址のＰ７より壺１点が正位で出土した。この壺は頸部以上と底部を打ち欠き、その底部片を蓋のように被せてあった。残存高27.4cm、胴部径31.2cmを測る。文様構成上の特徴から、弥生時代中期後葉の宮ノ台式土器のうち、後半の様相に含まれる。

46．千代南原遺跡第ⅩⅥ地点　９号遺構（第７図）

小田原市千代字南原に所在し、足柄平野の東縁、酒匂川左岸の千代台地平坦面に立地する。標高は29ｍを測る。弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居址12軒、土坑２基、焼土３箇所、ピット１基が検出されている。９号遺構は土坑であり、周辺には住居址が展開するが、切り合いは見られない。遺構東側が調査区外へ伸びるため全容は明らかではないが、平面形は推定で円形を呈し、東西25cm以上、南北50cm、深さ30cmを測る。覆土中から完形の壺が倒立した状態で出土した。報告では土器棺墓の可能性をも考慮しているが、壺の口縁部～頸部を欠損していない等の理由から、土器棺ではなく、貯蔵穴と判断している。壺は無文で、折り返し口縁を有する。器高は27.3cm、胴部最大径は17.5cm である。弥生時代後期前半に比定される。

以上、本稿では弥生時代中期中葉から古墳時代前期の事例について概要を掲載した。

補遺　弥生時代中期中葉までの土器棺関連資料の新たな事例

遺跡名の番号は研究紀要17(弥生時代研究プロジェクトチーム2012)における弥生時代前期～弥生時代中期中葉の事例集成の続き番号として付した。

文献：『新羽浅間神社遺跡』かながわ考古学財団調査報告293　2013　公益財団法人かながわ考古学財団

（９）新羽浅間神社遺跡

横浜市港北区新羽町に所在し、下末吉台地の中央部、鶴見川へ突き出した半島状の丘陵上に立地する。標高は13～22m前後を測る。弥生時代前期から中期の土器棺墓３基、土坑１基が発見されている。これらの遺構は直径３ｍの範囲に収まる形で検出されている。１号土器棺墓の平面形は楕円形を呈し、長軸72cm、短軸66cm、深さ25cmを測る。甕が逆位の状態で出土している。甕は口縁部から頸部に縄文および工字文、胴部以下に条痕文を有し、高さ35.7cm、胴部最大径は26.6cmである。また、石材がホルンフェルスの打製石斧が１点共伴している。２号土器棺墓は３号土坑墓を切って作られている。平面形は楕円形を呈し、長軸66cm、短軸58cm、深さ約30cmを測る。覆土上層から甕、坑底から小型壺が横に倒れた状態で出土している。甕は口縁部から頸部に縄文および沈線、胴部以下は条痕文が施される。小型壺は条痕文が施されており、欠損した口縁部を部分的に研磨している。現存高は18.7cm、胴部最大径は12.2cmである。３号土坑墓は２号土坑墓に切られる。平面形は円形または楕円形と推定され、残存する範囲で直径約30cm、深さ10cmを測る。小型甕が逆斜位の状態で出土している。小型甕は完形、無文で、高さ18.7cm、胴部最大径は10.2cmである。出土土器から１号土器棺墓は中期前葉、２号・３号は前期末に比定される。また、これらの土器棺墓に近接して発見された11号土坑は、遺物は出土していないが、前述の土器棺墓との位置関係から、関連した遺構である可能性が指摘されている。

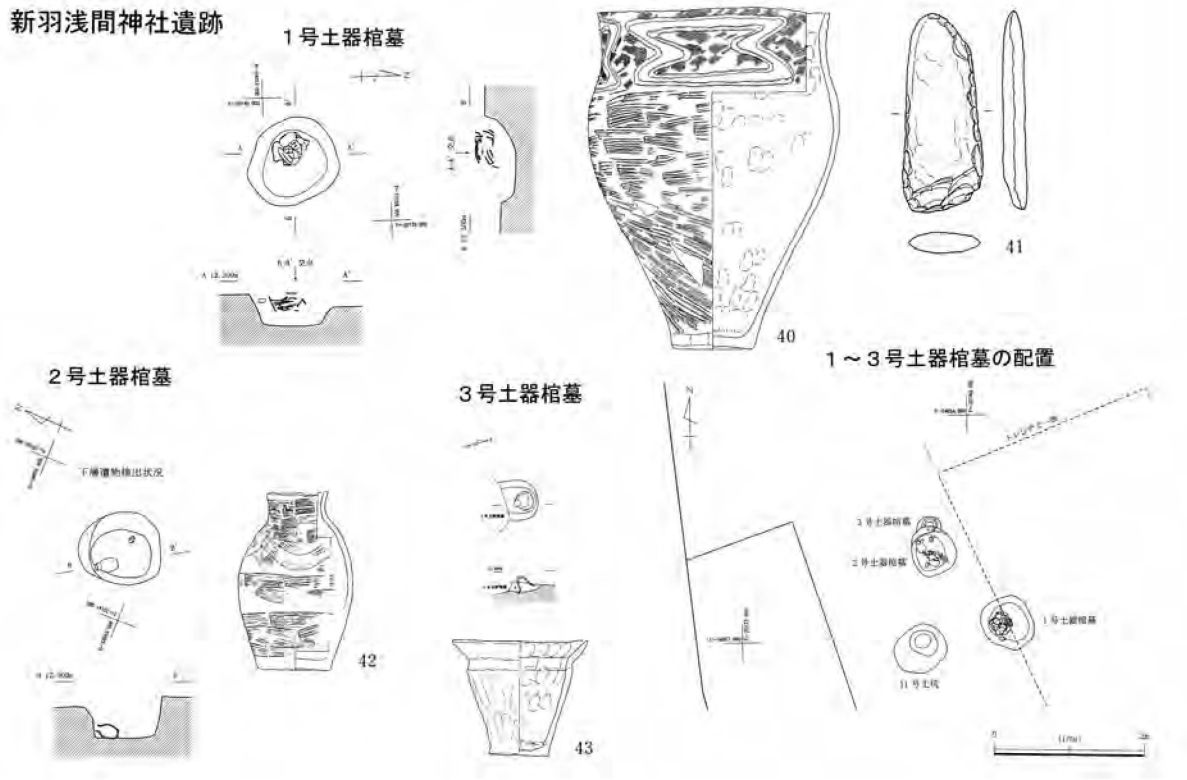


図１　神奈川県域の土器棺関連資料(新羽浅間神社遺跡)[遺構図1/60、土器1/8、石器1/4]

神奈川県における古代の鉄（４）

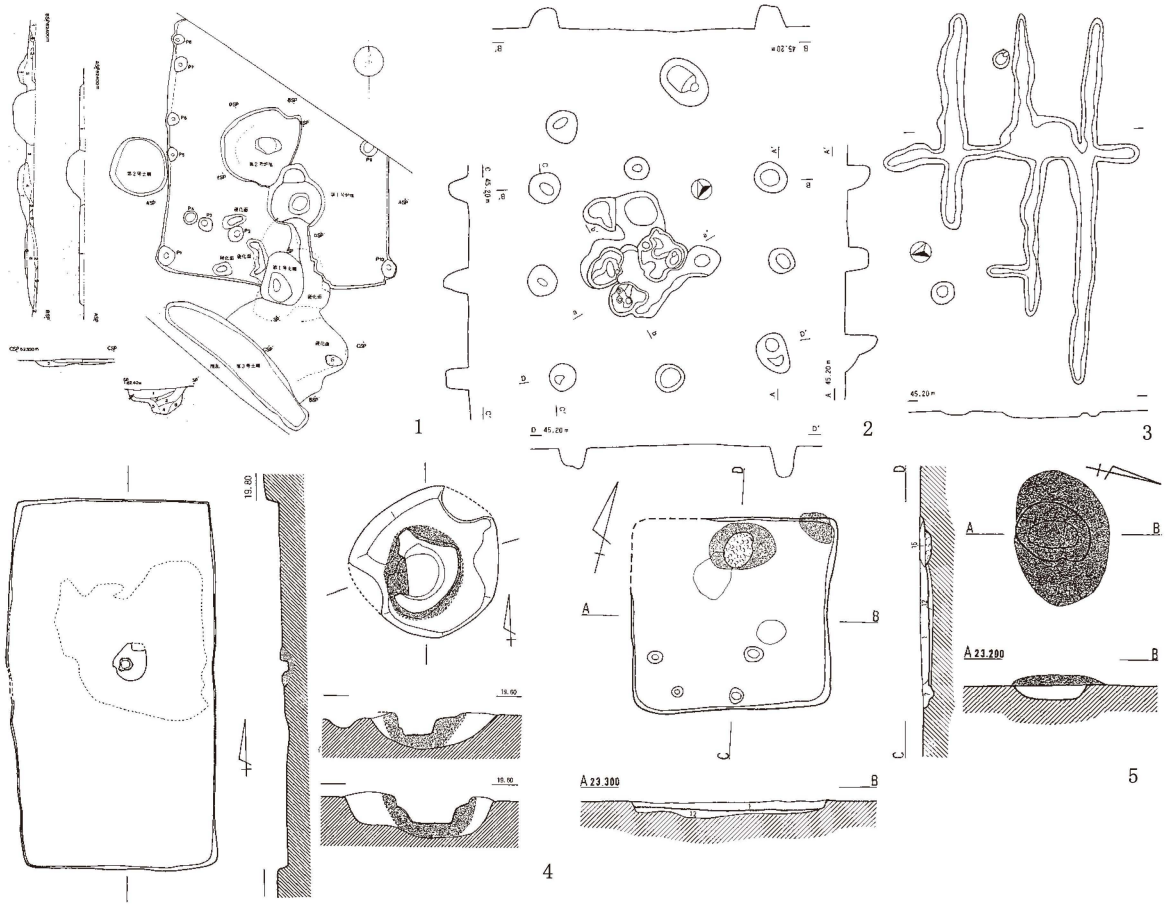
― 生産関連遺構の集成 ―

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

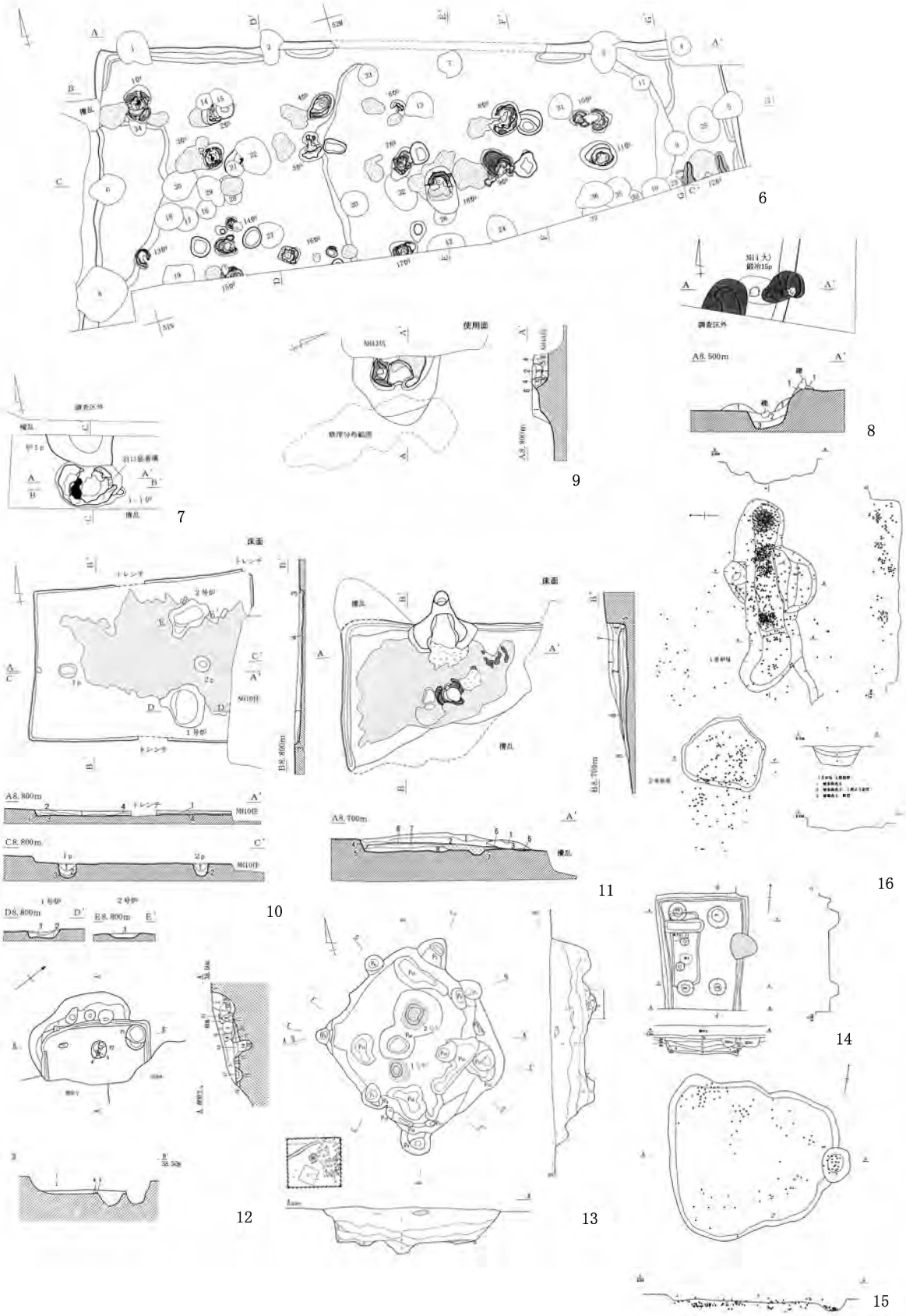
はじめに

奈良・平安時代研究プロジェクトチームでは2010年から県内各地で出土した鉄生産に関連する遺物の集成を開始した。その目的はどのような規模、施設で生産行為が行われていたのか、地域差があるのかを明らかにすることである。昨年度までは関連遺物についての集成を行ってきたが、今年度は遺物から離れ、鉄生産関連遺構を掲載している。紙面の都合上、補遺を掲載することが出来なかったが、昨年度で遺物集成の大半は終了した。次年度は補遺の掲載と、ここで得られたデータを元にした分析に着手したいと考えている。

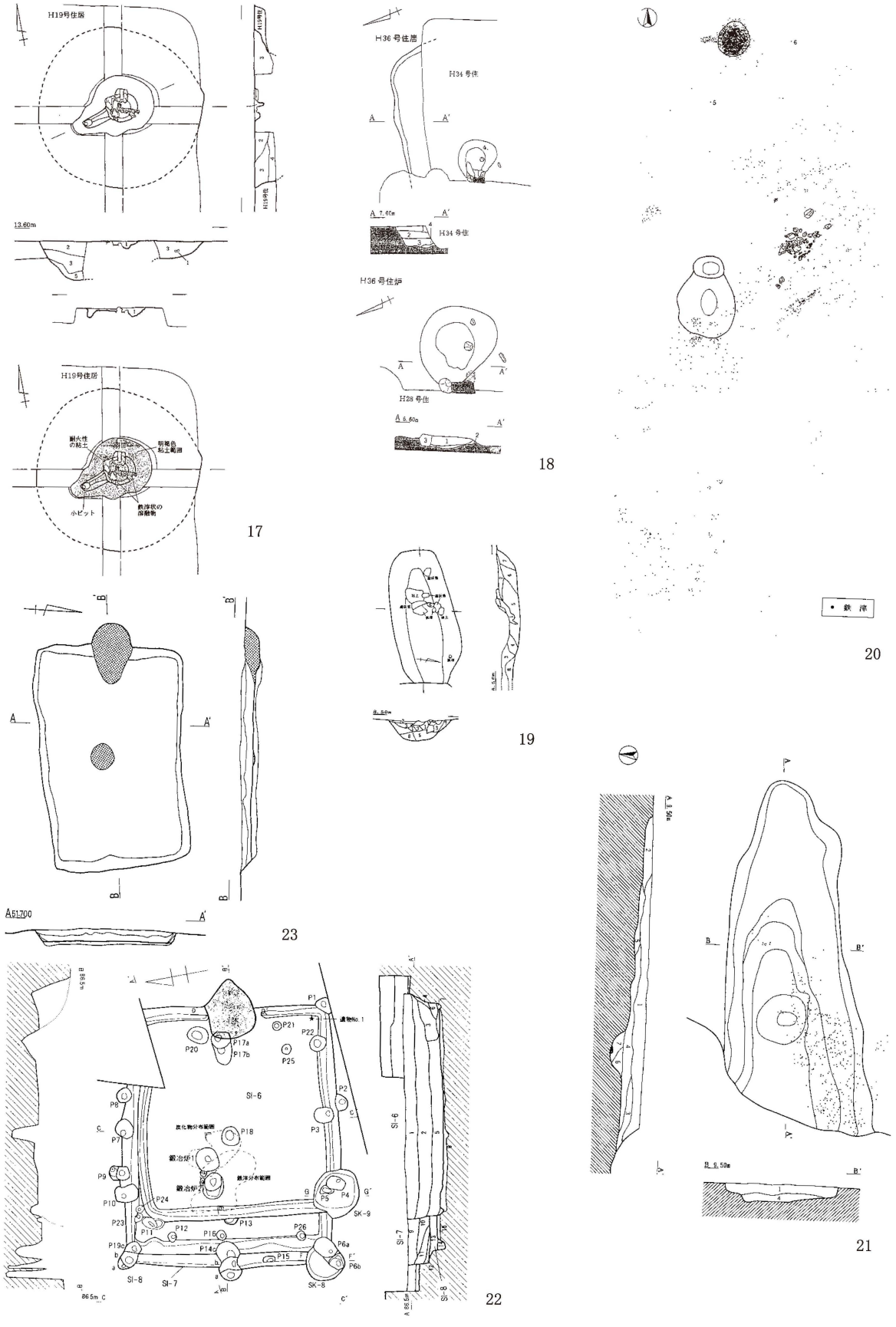
鉄生産関連遺構は、県内29遺跡を集成している。遺構は炉址と鍛治炉・鍛冶址・鍛冶工房などとそれらを持つ住居址に大別される。図面が掲載されていない報告もあるが、紙面が許す限り図を掲載した。紙面の都合上鍛治址や工房址（住居址）内に炉址が書き込まれている場合は、個別図面を省略している。図版は鍛冶工房等を1/120、炉址は1/60で掲載したが、炉址の場合でも大型のものは1/120で掲載している。



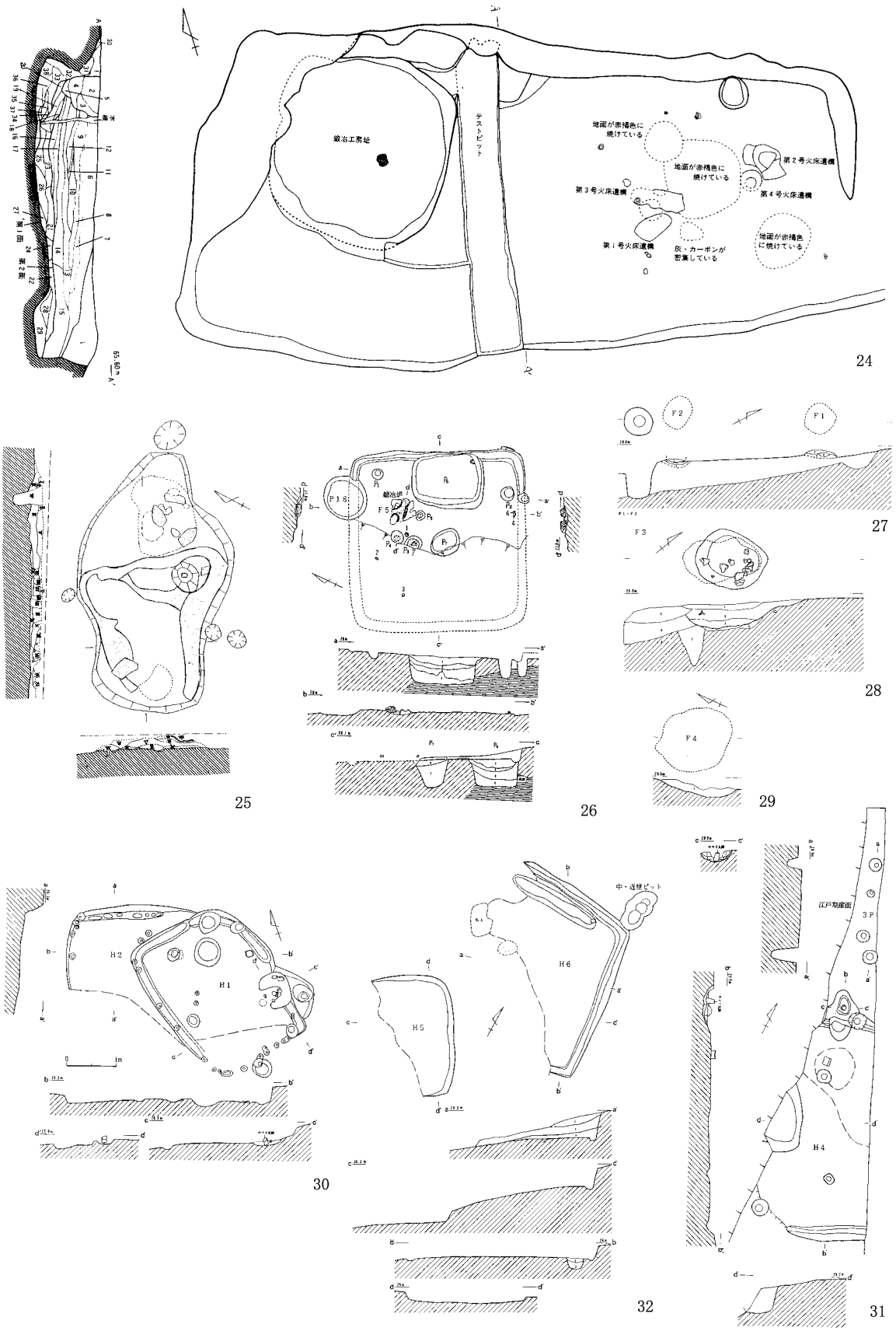
第１図　鉄生産関連遺構１



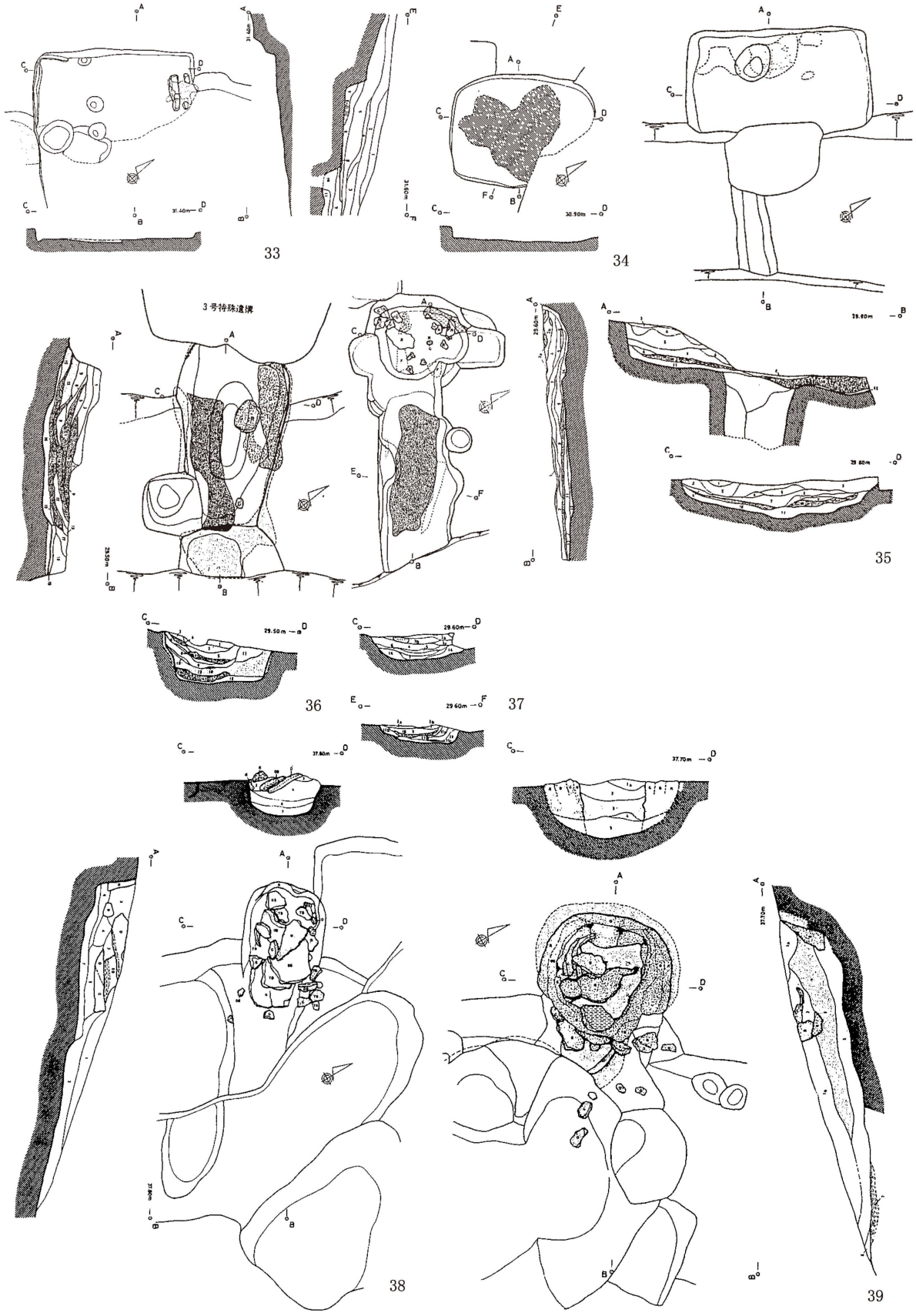
第２図　鉄生産関連遺構２



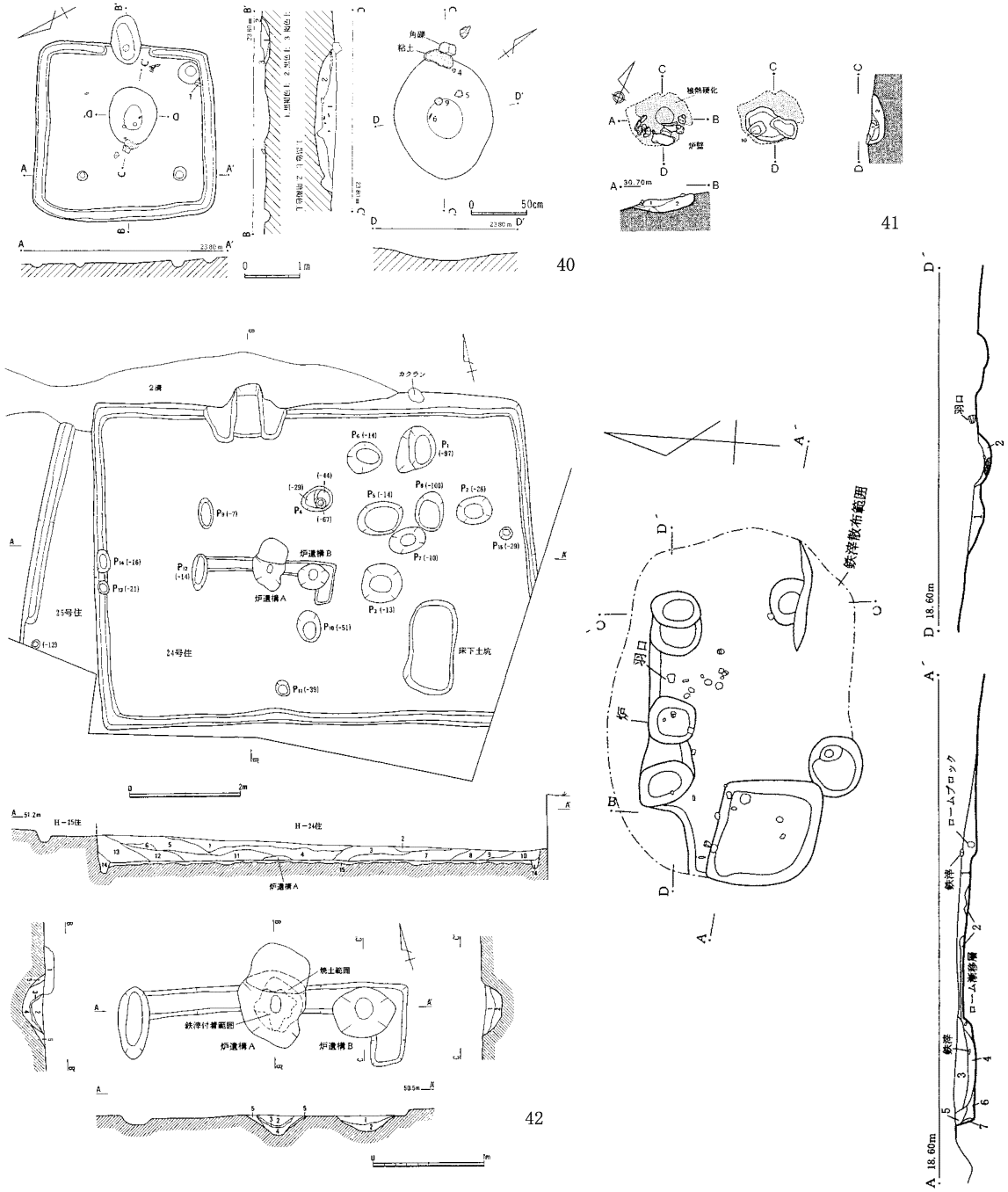
第３図　鉄生産関連遺構３



第4図　鉄生産関連遺構4



第５図　鉄生産関連遺構５



第６図　鉄生産関連遺構６

【鍛冶遺構】

伊勢原市

図版	遺跡名	遺構	規模	出土遺物	時期	概要	文献名
	板戸・宮の前遺跡	鍛冶炉	平安時代の製鉄遺構が確認 竪穴状の掘り込みを伴う	鞴、鉄滓、須恵器、土師器	平安時代	報文のみ	神奈川県教育委員会1999『神奈川県　埋蔵文化財調査報告41』　平成９年度神奈川県内埋蔵文化財発掘調査一覧
	田中・酒林遺跡	鍛冶炉	１号鍛冶炉　ピット９基、炉址４基 ２号鍛冶炉　長軸径約3.8m×短軸約2.8m、壁高約５cm　長方形の竪穴状の掘り込み	１号鍛冶炉:鉄滓、鍛冶剥片、湯玉、熔変した土師器 ２号鍛冶炉:鉄滓、鍛冶剥片、湯玉、熔変した土師器	平安時代	１号鍛冶炉：炉址はかなり赤く焼けて赤化している ２号鍛冶炉：掘り込み中央は硬化面、粘土の焼け跡あり	伊勢原市教育委員会1994「田中・酒林（Ⅰ）・（Ⅱ）遺跡」『文化財ノート』第３集

厚木市

図版	遺跡名	遺構	規模	出土遺物	時期	概要	文献名
1	中荻野稲荷木遺跡	第１号竪穴住居址	第１号炉　長径91×短径90cm　不整円形第２号炉長径142×短径120cm	土師器、鉄滓、羽口片、礫		第１号炉：三重円状を呈し、中央部に直径25cm程度の青黒褐色の鉄滓が集中、中円部は幅10cm程度の赤褐色の焼土が観察できる。外周部には幅35cm程度の黄白色の粘土がドーナツ状に取り囲む 第２号炉：三重円状を呈し、中央部には直径30cm程度の青黒褐色の鉄滓が少量集中、中円部には幅５cm程度の赤褐色の粘土。外周部には幅35cm程度の黄色の粘土がドーナツ状に取り囲む	北川吉明1999『中荻野稲荷木遺跡』国道412号線遺跡発掘調査団
3	及川天台遺跡	第１号鍛冶址	幅30cm、深さ数cmの３条の溝状の掘り込み。長さは3.5m、4.8m、5.8mとまちまち	埚型滓、土師器、羽口片、須恵器、石器			香村紘一他1997『及川天台遺跡』国道412号線遺跡発掘調査団
2		第２号鍛冶址	２×２間　３基の炉址	土師器、羽口片、須恵器、石器、鉄滓、縄文土器		粘土が円形に３ヶ所確認される　焼土の下に硬化した面あり　硬化面は不整円形を呈し、中央のくぼみ部分も不揃いな凹凸で、凹み部分には薄く粘土を敷く　硬化面の規模は直径50cmと70cmの円形状が２基、他の１基は45×70cm　床面にロームで形を設け、簡単に粘土を貼り付けて炉としている	
－	鳶尾遺跡	40号竪穴住居址	一次床面址	瓦、台石、鉄釘、鉄製品、鉄滓、炭化種子、木炭片		床面下に一次床面が検出された	神奈川県教育委員会1975『鳶尾遺跡』神奈川県埋蔵文化財報告書７

海老名市

図版	遺跡名	遺構	規模	出土遺物	時期	概要	文献名
4	海老名本郷遺跡	20号住居址	直径110cm内外、深さ25cmの不整円形の掘り方の中に粘土を充填、その中央部に上径約40cm、底径約30cm、深さ13cmの炉	鉄滓、湯玉状含む	11世紀代	炉の内面は、灰色で飴状に溶融した鉄滓様の硬質面	合田芳正他1987『海老名本郷』Ⅲ　本郷遺跡調査団

5	本郷中谷津遺跡	第４号住居内炉址	3.0×3.1m　方形、住居内	鉄滓、羽口	10世紀		相武考古学研究所1993『本郷中谷津遺跡－第８次調査－』

平塚市

図版	遺跡名	遺構	規模	出土遺物	時期	概要	文献名
6	六ノ域遺跡	NH １鍛冶工房	18基　２基対として２列に並列 鍛冶炉の内径は40cm程度	鉄滓、羽口、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、土師器、金属製品、石製品、瓦	９世紀後半以降～10世紀末	東西13m、南北5.7m、深さ25cmの規模　浅い皿状の印象で、東西方向には掻き出し口があり、南北方向には羽口の装着に関すると考えられる幅狭な浅い溝が存在。内面は粘土が堅く焼き締まり、９号炉等は一部鉄滓及び銅小片が付着　８号～10号は重複して同じ場所に作り直し　北列の鍛冶炉は西側のくぼみで炭化物が多く存在し、南列の鍛冶炉は東のくぼみで炭化物が多く存在	柏木善治他2007『湘南新道関連遺跡』Ⅲ(六ノ域第14地点)かながわ考古学財団調査報告210　財団法人かながわ考古学財団
7・8	六ノ域遺跡	NH １大型鍛冶工房	１号炉　使用面　長径68cm　短径47cm　内径38cm 掘り方　長径62cm　短径41cm　中央がくびれた楕円形 ２号炉　使用面　長径66cm　短径56cm　内径38cm 掘り方　長径66cm　短径57cm　中央がくびれた楕円形 ３号炉 掘り方　長径(119)cm 深さ　使用面　18cm　掘り方10cm　中央がくびれた楕円形	羽口、鉄滓、粒状滓、鍛造剥片、砥石、鉄鏃、金床石、土師器、須恵器	９世紀後半以降～10世紀末	東西約17m、南北３m以上の竪穴状遺構南北方向に掻き出し口があり、東西方向に羽口の装着に関係すると考えられるやや幅狭な浅い溝が存在。内面は粘土が堅く焼き締まり、３回の造り直した痕跡が観察される鍛冶炉の北には掻き出し炭の集中がみられ、ピット状の浅い凹みが存在	柏木善治他2009『湘南新道関連遺跡』Ⅳ(六ノ域第14地点)かながわ考古学財団調査報告243　財団法人　かながわ考古学財団
9	六ノ域遺跡	NH １鍛冶炉	使用面　長径62cm　短径35cm　内径25cm 掘り方　長径57cm　短径35cm 深さ　使用面　18cm　掘り方７cm　中央がくびれた楕円形	鉄滓、羽口		浅い皿状で、炉の下半は燃焼による還元の状況がみられる。掘り方は不整形な方形で、覆土中には炭化物や焼土粒が認められる。西側はNH43号土抗に壊されるが、東方向に掻き出し口があり、NH26・28号の方向に鉄滓に混ざり掻き出した炭の集中が伺える	
10	六ノ域遺跡	NH ９号住居	竪穴住居内の東西に炉が２基			炉を中心に床が非常に硬化。覆土中から鉄滓が確認されている	
11	六ノ域遺跡	NH27号住居	竪穴住居中央に炉が配置	粒状滓			
	坪ノ内遺跡	Ｂ区鍛冶工房址	70基　２基対として２列に並列	鉄塊系遺物、造剥片、鉄製、釘	８世紀末～９世紀初頭	東西約12m以上、南北５m以上の長屋状竪穴内に２列に並んだ径40cm前後の円形鍛冶炉	林原利明1996「平塚市坪ノ内遺跡」『第20回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』神奈川県考古学会
12	真田北金目遺跡群	29Ｂ区 SI057	SK2　長径97×短径63cm 深さ46cm	鉄滓、羽口、土師器・甕	９世紀中～後葉以前	住居内のＰ２・ＳＫ２から土器と共に鉄滓が出土　他に羽口も出土している事から鉄に関連する工房と想定	若林勝司他2008『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書』６　平塚市真田・北金目遺跡調査会　独立行政法人都市再生機構

	真田北金目遺跡群	48区 SI010	0.38×0.35mの土抗状	坩堝、土師器・坏・甕、	９世後半～10世紀前葉	覆土中から鉄滓出土→鍛冶炉の可能性	若林勝司他2011『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書』８　平塚市真田・北金目遺跡調査会　独立行政法人都市再生機構
13	向原遺跡	39号住居址	3.0×3.3mの不整方形	大量の鉄滓、土師器、須恵器、灰釉陶器、金属製品、羽口、石製品	９世紀中～後半	覆土は９層に分層。全層にわたって鉄滓・スケール混入　火葬墓から金床石出土	中田英他1982『向原遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告１　神奈川県教育委員会
14	天神前遺跡第７地点	１号竪穴住居址	南北2.3m、東西1.2m、壁高約10cm南北方向の長方形の落ち込み 南北1.6m、東西0.5m、壁高約20cm東西方向の長方形の落ち込み	土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・壺・甕、鉄製品、羽口、鉄滓、砥石等	８世紀前後	燃焼部中央に羽口が垂直に立った状態で検出。支脚の転用か床面から多量の鉄滓、羽口→鍛冶工房址か	明石新1992『天神前遺跡－第７地点－』平塚市埋蔵文化財調査報告書第９集　平塚市教育委員会
	天神前遺跡第７地点	２号竪穴住居址	－	土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・壺・甕、鉄製品、羽口、鉄滓、瓦、砥石等	９世紀後半	覆土中層から多量の羽口、鉄滓	
15	天神前遺跡第７地点	１号不明遺構	長径3.4×短径3.0m、不整円形 深さ10～19cm	土師器坏・甕、須恵器坏、羽口、鉄製品	９世紀後半	床面から多くの遺物出土。鉄滓は東側の径60×70cm、深さ25cmの円形のピットを含み、128点、総重量2540gが出土、羽口16本出土	
	天神前遺跡第10地点	６号竪穴住居址	床の中央に焼土	多量の羽口、鉄滓出土	９世紀後半	天神前第７地点同様、官衙関連の鍛冶工房集落の可能性大	栗山雄揮他1997『天神前遺跡第10地点発掘調査概要』平塚市教育委員会
	天神前遺跡第10地点	７号竪穴住居址	床の中央に焼土	多量の羽口、鉄滓出土	９世紀後半	天神前第７地点同様、官衙関連の鍛冶工房集落の可能性大	
	天神前遺跡第10地点	８号竪穴住居址	床の中央に焼土	多量の羽口、鉄滓出土	９世紀後半	天神前第７地点同様、官衙関連の鍛冶工房集落の可能性大	
16	高林寺遺跡第７地点	SX01鍛冶工房址	１号炉:長さ3.9×幅1.0m、深さ４５～60cm　舟形 ２号炉：長さ1.65×幅1.45m、深さ25cm　不整円形　浅い台形	土師器坏・甕、須恵器坏・甕・瓶	９世紀後半	１号炉：西側は円形の炉址と重複しているかもしれない。断面はU字型を呈している。覆土内は粘土・焼土混じりの暗褐色砂質土	小島弘義他1998『諏訪前Ｂ・高林寺』平塚市埋蔵文化財シリーズ６　平塚市教育委員会

茅ヶ崎市

図版	遺跡名	遺構	規模	出土遺物	時期	概要	文献名
17	西方Ａ遺跡	Ｈ１号鍛冶炉	長軸約32cm、短軸約29cm、深さ約６cmの浅い落ち込みがあり、そこから南東方向に向かった長さ約28cm、幅約11cm、深さ約８cmの浅い溝が伸びる	羽口、耐火性粘土、鉄滓、湯玉、剥片	７世紀第Ⅳ四半期	炉の底面には明褐色粘土が薄く敷かれれている。粘土範囲の規模は長軸約87cm、短軸約59cmを測り、形状はイチジク形を呈している。炉中央部の落ち込み内には、北側には羽口が認められた他、耐火性粘土や鉄滓状の融解物が存在している。	村上吉正他2003『下寺尾西方Ａ遺跡』かながわ考古学財団調査報告157　財団法人かながわ考古学財団

18	七堂伽藍址	H36号竪穴住居址	長径90×短径80、 深さ15㎝	土師器、刀子、 埦形滓	８世紀前半	H34号竪穴住居址の掘り方下面に確認。掘り込みの一部に被熱し硬化した土が残り、鉄滓、炭化物が散っている。掘り込み西側に周囲が著しく硬化し、鉄滓が貼り付いたくぼみあり。位置と形態から鞴の羽口の受け口の可能性大	小川岳人他2010『小出川河川改修事業関連遺跡群茅ヶ崎市七堂伽藍跡（２）』Ⅲ　かながわ考古学財団調査報告251　財団法人かながわ考古学財団

藤沢市

図版	遺跡名	遺構	規模	出土遺物	時期	概要	文献名
19	片瀬大源太遺跡	タタラ遺構	長径約1.36m×短径約0.65m 深さ約20㎝	鉄滓	10世紀以前	断面形は船底型、横断面形は鍋底状を呈す。焼土粒子を含有しており、火熱をうけた凝灰岩ブロックや火熱を受けていない凝灰岩ブロック・粘土をはじめ、175ｇの鉄滓が出土した	寺田兼方他1997『片瀬大源太遺跡発掘調査報告書』大源太遺跡発掘調査団

逗子市

図版	遺跡名	遺構	規模	出土遺物	時期	概要	文献名
20	池子遺跡群 №５地点	１号野鍛冶址	約1.1×0.8m　楕円形の炉床	土師器坏・甕、須恵器坏　紡錘車、不明鉄製品	９世紀代	東西約４m、南北約９m、標高約8.9 ～ 9.1mの約20㎝のレベル差の範囲内で多量の鉄滓が集中して出土。炉床と考えられる部分と北約３mにピット様の掘り込みを確認。本体の上層及び小ピット部分には炭化物と焼土が多量につまっており、その下面は著しく赤色硬化	桝渕規彰他1998『池子遺跡群』Ⅵ　かながわ考古学財団調査報告36　財団法人かながわ考古学財団
21	池子遺跡群 №５地点	２号野鍛冶址	船底状の掘り込み	土師器坏・甕、須恵器坏・椀、灰釉陶器椀、鞴の羽口	９世紀後半	長さ約4.6m、幅約1.9mの掘り込みを確認、底面までは東端部から約1.5mの位置で緩やかな段が形成され、それ以西が底面となっており、底面は長さ約2.2m、幅約0.9mを測るこの底面には東側端部よりの部分に、径約0.7m、深さ約20㎝の断面弧状の掘り込みが穿たれている。覆土には少量の焼土並びに炭化物が含まれる	

相模原市

図版	遺跡名	遺構		規模	出土遺物	時期	概要	文献名
22	上鶴間下原遺跡 第３地点	ＳＩ６・ ７・８		鍛冶炉Ⅰ：長径48㎝×短径43㎝　深さ22㎝ 楕円形 鍛冶炉Ⅱ：長径50㎝×短径40㎝　深さ17㎝ 楕円形	土師器坏・甕、須恵器坏・甕、長頸瓶、灰釉陶器陶器椀、鉄滓、鉄製品、羽口、砥石、埦形滓、粒状滓、鍛造剥片	10世紀前半頃	ＳＩ－６床面の西側、中央よりやや北側に東西方向に２基並んで検出された 鍛冶炉１鍛冶炉２の覆土は黒色土･黒褐色土･暗褐色土等の４層に分層された　鍛冶炉１同様、鉄滓を多く含むが、炭化材はほんと混じらない	八重畑ちか子2005『上鶴間下原遺跡第３地点（相模原市№14）発掘調査報告書』　東国歴史考古学研究所調査研究報告　第36集

座間市

図版	遺跡名	遺構	規模	出土遺物	時期	概要	文献名
23	平和坂遺跡	第２号住居址	直径0.43～0.5m、深さ３㎝の炉	須恵器･坏、坩堝、瓦、釘	宮久保編年Ⅳ期		平和坂遺跡発掘調査団1993『平和坂遺跡』

横浜市

図版	遺跡名	遺構		規模	出土遺物	時期	概要	文献名
24	受地だいやま遺跡	Ｊ区テラス状遺構		北壁約12ｍ、西壁約５ｍ、東壁2.3m	須恵器・坏　高台坏皿 土師器・坏、甕、鉄滓	９世紀末葉～10世紀中葉	台地南東縁辺部の傾斜地に造成。上屋を有する鍛冶関連の作業場か	奈良遺跡調査団1986『奈良地区遺跡群Ⅰ　№11地点　受地だいやま遺跡 下巻』
－			Ｊ区竪穴鍛冶工房址	床面積約10.6㎡	須恵器・坏、土師器坏、鞴の羽口・鉄滓	９世紀末葉～10世紀中葉	床面上に火床一基、炭化物集中箇所が５ヶ所	
－			Ｊ区第１号火床遺構	約26×20㎝、深さ３㎝		９世紀末葉～10世紀中葉	新旧柱穴群の時期に共通。竪穴鍛冶工房とセット	
－			Ｊ区第２号火床遺構	約110×40㎝、深さ６㎝		９世紀末葉～10世紀中葉	３号火床に先行するか	
－			Ｊ区第３号火床遺構	約75×40㎝、深さ５㎝		９世紀末葉～10世紀中葉	２号火床より後出するか	
－			Ｊ区第４号火床遺構	約60×40㎝、深さ６㎝		９世紀末葉～10世紀中葉	６・７号火床より先行	
－			Ｊ区第５号火床遺構	約60×50㎝、深さ４㎝		９世紀末葉～10世紀中葉	６・７号火床より先行	
－			Ｊ区第６号火床遺構	南東辺約50㎝、北西約47㎝、深さ８㎝	炭化物	９世紀末葉～10世紀中葉	最終期か	
－			Ｊ区第７号火床遺構	推定径45㎝、深さ６～７㎝	炭化物	９世紀末葉～10世紀中葉	６・７号火床に先行するか	
－			Ｊ区炭化物・灰集中箇所			９世紀末葉～10世紀中葉	１～５は鍛冶工房及び１号火床に、６～11は２～７号火床に付随するものか	
－		Ｄ区鍛冶関連第１号土抗				９世紀末葉～10世紀中葉	縄文土器は本址が縄文土器包含層を掘りこむ為（１～３号土抗）	
－		Ｄ区鍛冶関連第２号土抗				９世紀末葉～10世紀中葉	焼土集中部分あり　また小動物の焼けた骨片出土	
－		Ｄ区鍛冶関連第３号土抗				９世紀末葉～10世紀中葉	覆土下層に鉄滓・上層に砂鉄・炭化物が混入	

25	上谷本第二遺跡	B-1地区１号遺跡	約５×３ｍ	青銅製品・鉄製品・土師器	奈良時代後期～平安時代初期	鉄囲状部は約３ｍ、扇央幅約1.3m、扇端幅３ｍ	中央大学考古学研究会　1971『横浜市緑区上谷本町上谷本第二遺跡A地区・B地区発掘調査概報』
－	熊ヶ谷遺跡	第11号住居址	約6.12×5.10m	土師器・土師質土器・須恵器・鉄滓・鉄鏃・砥石・炭化物・(桃の種)	平安G25窯式期	ピットが６ヶ所あり、竈が２ヶ所検出	奈良遺跡調査団1986『奈良地区遺跡群発掘調査報告　Ⅲ』熊ヶ谷遺跡
－	矢崎山西遺跡	第55号住居址	南隅角のみの調査の為不明	鞴羽口・鉄刀子・鉄滓・土師器、坏・土師器、甕	６世紀後半	矢崎山遺跡の古墳時代集落の北西端部	山武考古学研究所2004『横浜市都築区矢崎山西遺跡発掘調査報告書』
26	西ノ谷遺跡	Ｒ竪穴	一辺3.3mの方形	灰釉陶器・須恵器・坩堝・羽口・鉄滓	10世紀後半	青銅滓の付着した坩堝あり	横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団1997『西ノ谷遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告２３
27		鍛冶炉Ｆ１	開口部径約30cm	微細剥片・鉄滓	８世紀後半～11世紀代		
27		鍛冶炉Ｆ２	開口部径約30cm	微細剥片・鉄滓	８世紀後半～11世紀代		
28		鍛冶炉Ｆ３	開口部径90×60cm	微細剥片・鉄滓・泥岩ブロック・錐状製品・土器	11世紀代		
29		鍛冶炉Ｆ４	開口部径60×80cm	鉄滓	８世紀後半～11世紀代		
－		鍛冶炉Ｆ５	南に長さ40cm、北東に30cm、北西に25cm	鉄滓・微細剥片	10世紀後半	泥岩切石による炉。内部50×25cmの範囲が真っ赤に焼ける	
－		Ｐ20	開口部径約１ｍ	鉄滓	12世紀代	９×２間の大型掘立柱建物址の南隅	
－		Ｐ21	開口部径約１ｍ	鉄滓	12世紀代	９×２間の大型掘立柱建物址の南隅	
30		Ｈ１住	3.2×2.6m	土師器・甕、・須恵器・甕、鉄滓	８世紀後半		
30		Ｈ２住	一辺2.5m前後の方形	土師器・甕、・須恵器・甕、鉄滓	８世紀後半		
31		Ｈ４住	南北長4.6m	土師器・甕、・須恵器・甕、鉄滓			
32		Ｈ５住	一辺2.2mの前後の隅丸方形竪穴	土師小片・鉄滓			
32		Ｈ６住	一辺3.6mの前後の隅丸方形竪穴	土師器小甕・灰釉椀・須恵器小甕・炭・鉄滓	10世紀後半		
33	上郷深田遺跡	１号竪穴	－	土師器・坏、鋳型片、不明鉄製品	９世紀前半代	泥炭を伴う焼土面。鍛冶炉か	横浜市教育委員会1988『横浜市栄区上郷町　上郷深田遺跡発掘調査概報』
34		２号竪穴	3.0×2.2m	鋳型片	９世紀前半代	床面直上より多量の砂鉄が検出	
－		１号炉		釘	９世紀前半代		

－	上郷深田遺跡	２号炉	開口部径50～60㎝ 断面鍋底状の炉底	－	９世紀前半代	小さな掘り込み中に粉末状の炭を敷き、その上にスサ入り粘土によって製作された炉壁を固定。周囲ピットが検出されているが、本炉の付帯施設か不明 銅の生産　精錬か鋳銅炉かは不明	横浜市教育委員会1988『横浜市栄区上郷町　上郷深田遺跡発掘調査概報』
－		３号炉	－	－	９世紀前半代		
－		４号炉	－	－	９世紀前半代		
－		５号炉	－	－	９世紀前半代	製銅炉か	
－		６号炉	－	－	９世紀前半代	製銅炉か	
－		７号炉	－	－	７世紀末～ ９世紀前半代		
－		８号炉	－	－	７世紀末～８世紀		
－		９号炉	－	－	７世紀末～８世紀		
35		10号炉	1.9×1.0m 長方形	－	７世紀末～８世紀	鉄精錬炉か長方形の形を呈する幅30㎝程度の溝が下方に続いている。炉壁のブロックが遺存し、下位には炉壁片や炭を交える土、焼土が層をなしている	
36		11号炉	－	－	７世紀末～８世紀	上部に青灰色の炉壁が少量遺存し、下部構造としては、４枚の炭の層と、これにはさまれるように赤化焼土層が顕著	
37		12号炉	調査可能部分で、5.2×2m	－	７世紀中葉以降、 ７世紀末～８世紀	北側の炉の本体が存在。炉壁が集中して検出されている　それより南側はU字状の溝炭と焼土の層あり	
－		13号炉	－	－	８世紀～９世紀代		
－		14号炉	－	－	８世紀～９世紀代		
－		15号炉	－	－	８世紀～９世紀代		
38		16号炉	小判形	－	８世紀～９世紀代	製錬炉か　大量の炉壁が遺存	
39		17号炉	－	－	８世紀～９世紀代	土抗の上に黄褐色砂質粘土により貼床	
－		18号炉	－	－	８世紀～９世紀代		
－		19号炉	－	－	８世紀～９世紀代		
40	北川貝塚	Ｈ２号住居	長径110×短径90㎝、 深さ15㎝の楕円径の土坑	鉄滓、鉄片	９～10世紀	竪穴住居址の床中央に楕円径の土坑　抗内面は被熱して焼土で満たされ、鉄鍋片や鉄器、椀型滓、羽口が出土	坂本彰他2007『北川貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告　39　座師団法人横浜市ふるさと歴史財団　埋蔵文化財センター
41	笠間中央公園遺跡	１号鍛冶遺構	0.61×0.48m	炉壁片・鉄滓塊・鉄塊	８世紀代	大鍛治に使用した鍛冶遺構か　周辺には鉄滓塊が散布　炉壁も出土	横浜市緑政局・財団法人横浜市ふるさと歴史財団　2003 『笠間中央公園遺跡発掘調査報告』
－	笠間中央公園遺跡	17号住居址	6.3×6.04m	土器・支脚・袖石・刀子・鉄滓	７世紀末～ ８世紀初頭	北側の壁際に焼土が堆積	
－		26号住居址	5.95×5.95m	土器・石器・鉄鏃・刀子・鉄滓・釘	７世紀末～ ８世紀初頭	一括投棄遺物群	
－		39号住居址	6.18×6.15m	土器・打製石斧・鉄鏃か・鉄滓・	古墳時代後期	精錬操作で生成した破片か	
－		43号住居址	3.92×3.28m	甕型土器・坏類・支脚・刀子・鉄滓	平安時代		

43	権田原遺跡	小鍛治関連遺跡遺構	東西幅3.3m、南北幅2.2m（鉄滓分布範囲）	土師器、須恵器、鉄滓他	９～10世紀	掘り込みがないため遺構規模は不明　中央部分は方形に近い形で浅く掘りこまれている西端に１ｍ四方で深さ約20㎝の方形の掘り込みがあるほか、北辺にそってピットが４基、南側に２基検出されている　北辺ピットの西側から２基目のピットによく焼成された炉壁状の硬化面を確認、炉としての機能が考えられる　精錬滓がみられる事から、銑鉄塊を持ち込んでの精錬が行われていた可能性が高い	鈴木重信他2013 『権田原遺跡』Ⅳ　港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告46　公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団　埋蔵文化財センター

川崎市

図版	遺跡名	遺構	規模	出土遺物	時期	概要	文献名
42	岡上－４遺跡第２点	H24号住居址	８×６ｍ　長方形	鉄滓、羽口、土器類	８世紀中頃	２基　一つは約径35㎝不整円形　擂鉢型、もう一つは掘り方のみ	河合英夫2001『岡上－４遺跡第２地点』 岡上－４遺跡発掘調査団

近世民家の集成（９）

近世研究プロジェクトチーム

はじめに

本プロジェクトチームでは、県内で調査された近世建物址の集成を行い、これまでに2010年３月までに刊行された報告書から271棟分のデータを蓄積してきた。その後も近世建物址について記載されている報告書が相次いで刊行されているが、2010年３月末時点での資料を一覧表にまとめてそれをもとに県内の近世建物址について検討していきたい。なお、表題は近世民家となっているが、民家以外の建物についても集成をしてきたので、それらも含めて検討する。

柱穴

報告書に記載されている掘立柱建物の柱穴の形状は、円形、不整円形、略円形、楕円形、不整楕円形、方形、隅丸方形、長方形、隅丸長方形、不整形がある。最も多く認められるのは、方形または方形主体で全体約27％を占める。次いで、円形・楕円形主体約19％、円形約９％、不整円形約６％の順となる。大まかには方形を基調とする建物址と円形・楕円形を基調とする建物址に分類できるが、方形と円形、方形と楕円形、方形と不整形、円形と不整形、長方形と楕円形など形状の異なる柱穴が同じ建物で確認されている事例も少なくない。

建物の年代との関係は、年代が判明している事例がそれほど多くないため、明確なことはわからないが、方形、円形とも江戸時代を通して認められるものの、方形主体の建物址は江戸時代後期になるとあまり見られなくなるようである。また、地域による違いもほとんど認められないが、同じ遺跡群や遺跡で検出された建物については同様の形状を呈する柱穴で構成されている場合が多く、池子遺跡群（№.１－Ｃ地点、№.７東地点、№.５地点）では円形・楕円形、宮ヶ瀬遺跡群（北原№.９遺跡、北原№.10・11北遺跡、表の屋敷№.８遺跡、馬場№.６遺跡、馬場№.７遺跡）では方形の柱穴が主体を占めている。

柱間距離

梁間距離は、0.7mから2.5mまでは0.1m間隔で認められる。また、0.6m以下や2.6m以上もわずかながら確認されている。梁間距離は同じ建物内において等間隔を測る事例よりも等間隔でない事例のほうが多く認められる。0.1m間隔で認められる0.7mから2.5mのうち、等間隔を測る事例を抜き出して１間あたりの寸法を見ると、1.8mが29％、2.0mが14％、1.9mが13％、2.1mと2.4mが７％、1.1mと2.2mが５％、1.5m、1.6m、1.7m、2.3mが４％を占める。梁間寸法は1.8mを基準とすることが多いがその割合は30％弱にとどまり、70％以上は1.8m以外の寸法が用いられている。

桁間距離は、0.7mから2.7mまで0.1m間隔で認められ、3.0m以上もわずかに確認されている。梁間距離と同様に桁間距離も同一建物内において等間隔を測る事例よりも等間隔でない事例のほうが多く認められる。0.1m間隔で認められる0.7mから2.7mのうち、等間隔を測る事例で１間あたりの寸法を見ると、1.8mが28％、1.9mと2.0mが11％、2.1mが８％、1.5m、1.7m、2.2m、2.3m、2.6mが４％を占める。桁間寸法も1.8mを基準とすることが多いがやはり全体に占める割合は30％弱で、70％以上は1.8m以外の寸法が用いられている。

梁間と桁行

全体の規模が明らかとなっている建物225例について検討する。梁間は１～６間が認められる。内訳は１間39例、２間138例、３間32例、４間10例、５間２例、６間１例で、その他に3.5間が２例、3.9間が１例あり、梁間２間の建物が全体の約60％を占めている。桁行との関係を見ると、梁間が１間の場合、桁行は１間～４間が認められる。最も多いのは１間×２間で51％を占める。以下１間×３間が26％、１間×１間が15％、１間×４間が５％、１間×1.5間が３％となり、梁間が１間の建物は桁行が２間または３間であることが多い。梁間が２間になると桁行は１～６間及び10間が認められる。内訳は多いほうから２間×３間42％、２間×４間22％、２間×２間21.5％、２間×５間６％、２間×６間４％、２間×１間1.5％、その他３％となり、梁間が２間の場合、桁行は２間～４間であることが多い。梁間が３間の場合、桁行は２間～７間が認められる。内訳は多いほうから３間×３間25％、３間×４間25％、３間×５間22％、３間×６間13％、３間×3.5間６％で、３間×７間、３間×２間、３間×5.5間がそれぞれ３％を占める。梁間が３間の場合、桁行は３間～５間であることが多い。梁間が3.5間以上の建物は15例報告されている。内訳は４間×５間が６例、3.5間×５間、3.5間×6.4間、3.9間×8.5間、４間×４間、４間×６間、４間×７間、５間×６間、５間×７間、６間×３間が各１例ある。

全体で見ると２間×３間が26％、２間×４間が14％、２間×２間が13％、１間×２間が９％、１間×３間と３間×３間が４％、２間×５間と３間×４間が３％となり、２間×２～４間が半数を占めている。

面積

面積が明らかな建物229例について検討する。最小は宮ヶ瀬遺跡群北原№.９遺跡のＫ９号掘立柱建物址（資料№.173）の1.6㎡、最大は四ノ谷遺跡建物址２（資料№.16）の132.0㎡であるが、３㎡以下や70㎡を超える事例はそれほど多くはない。面積を3.9㎡以下、4.0～9.9㎡、10.0～19.9㎡、20.0～29.9㎡、30.0～39.9㎡、40.0～49.9㎡、50.0～59.9㎡、60.0～69.9㎡、70.0㎡以上で分類すると、20.0～29.9㎡が28％、10.0～19.9㎡が23％、4.0～9.9㎡が14％、30.0～39.9㎡が11％、40.0～49.9㎡が９％、60.0～69.9㎡が５％、50.0～59.9㎡と70.0㎡以上が４％、3.9㎡以下２％となり、10.0～29.9㎡が半数を占める。建物の機能は20㎡以上は主屋（母屋）、15㎡以下は付属建物（副屋）とされている例が多いが、15～20㎡はどちらも認められる。面積が20.0㎡以上を測る建物は139例報告されている。そのうちの80％弱が20.0～49.9㎡に収まることから、県内の近世建物の主屋（母屋）の規模は50㎡以下（６坪～12坪）が主体であったと思われる。構築年代と建物の規模について見ると、60㎡を超えるような大型の建物は17世紀後半以降に建てられたものが多いようである。

まとめ

柱穴の形状は、円形、楕円形、方形、長方形、不整形などが認められるが方形または円形が主体である。柱間距離は同じ建物内において等間隔を測る事例よりも等間隔でない事例のほうが多く認められる。１間当たりの寸法は、等間隔を測る事例で見ると1.8ｍを基準としているのは30％弱で、70％強はそれ以外の数値が用いられている。建物の規模は、梁間２間が最も多く見られ、桁行２間～４間が主体を占める。面積は70％が10.0～49.9㎡に収まる。面積が20.0㎡以上を測る建物は主屋（母屋）の可能性が高く、６坪～12坪が主体を占めている。

間取り、建物の機能、建物の変遷等については次回検討したいと思う。

（木村吉行）

資料No.	遺跡名	遺構名	規模			面積（㎡）	坪数	柱間距離		柱穴の形状	建物の機能	構築時期	備　考
			梁間（m）	桁行（m）	梁×桁（間）			梁間距離（m）	桁間距離（m）				
1	東耕地遺跡上面	近世建築遺構								方形・不整形	神社創建に関わる工房か	宝永火山灰降下以前	隅円長方形の竪穴内に構築。
2	東耕地遺跡上面	近世建築遺構	4.2	6.2	2×3	26.0	7.9	2.1	2.0～2.5	方形・不整形		16世紀代？	南面に庇。
3	熊ヶ谷遺跡	掘立柱建物址	3.7	8.4	2×4	31.3	9.4	1.6～2.0	2.1～2.2	円形・楕円形	母屋		報告書は2.5×5間（4.7×10.6m）。
4	受地だいやま遺跡	第25号掘立柱建物址	3.85	3.85	2×2	14.8	4.5	1.8～2.0	1.9～2.1	楕円形	納倉庫施設もしくは堂舎	17世紀前半	総柱式建物。
5	受地だいやま遺跡	第26号掘立柱建物址	4.55	4.8	2×2	21.8	6.6	2.1～2.4	2.2～2.6	楕円形	母屋もしくは庫裏	17世紀前半	
6	長津田遺跡群 宮之前南遺跡	１号段切 掘立柱建物址Ｋ１	2.2	2.7	1×2	5.9	1.8	2.2	1.3～1.6	円形・楕円形	付属建物		北面に庇。報告書は1×2間（1.5×2.7m）。
7	長津田遺跡群 宮之前南遺跡	１号段切 掘立柱建物址Ｋ２	3.6	3.7	2×2	13.3	4.0	1.8	1.6～2.1	円形・楕円形	付属建物		総柱式建物。
8	長津田遺跡群 宮之前南遺跡	１号段切 掘立柱建物址Ｋ３	4.8	5.1	2×3	24.5	7.4	2.4	1.7～1.9	円形・楕円形			北面に庇。
9	長津田遺跡群 宮之前南遺跡	１号段切 掘立柱建物址Ｋ４	4.5	10.7	2×5	48.2	14.6	2.2～2.3	1.8～2.6	楕円形	母屋		報告書は5×7間（6.0×10.4m）の総柱。
10	長津田遺跡群 宮之前南遺跡	１号段切 掘立柱建物址Ｋ５	5.0	5.0	3×3	25.0	7.6	1.5～2.2	1.6	円形・楕円形	付属建物		北面に庇。2×3間が本体で、北側に1間の庇か。
11	長津田遺跡群 宮之前南遺跡	２号段切 掘立柱建物址Ｋ６	3.7	4.1	2×2	15.2	4.6	1.7～2.0	2.0～2.1	円形・楕円形	付属建物	宝永火山灰降下前後	
12	長津田遺跡群 宮之前南遺跡	２号段切 掘立柱建物址Ｋ９	3.6	5.5	2×3	19.8	6.0	1.6･2.0	1.8～2.0	円形・楕円形	母屋	宝永火山灰降下前後	北寄りに炉。報告書は4×6間。
13	長津田遺跡群 宮之前南遺跡	３号段切 掘立柱建物址Ｋ10	3.2	5.1	2×3	16.3	4.9	1.6	1.5～1.9	円形・楕円形	母屋か		報告書は4×4間もしくは4×5間。2×2間からの建替えか。
14	長津田遺跡群 宮之前南遺跡	３号段切 掘立柱建物址Ｋ11	2.4	3.8	1×1.5	9.1	2.8	2.4	2.5	円形・楕円形	付属建物		西面2間に庇。
15	四ノ谷遺跡	建物址１	8.0	11.5	4×5	92.0	27.9	2.0～2.4	2.0～2.3	円形	母屋	17世紀中葉～後葉	南寄りに焼土。報告書は5×5間。
16	四ノ谷遺跡	建物址２	8.0	16.5	4×7	132.0	40.0	2.1～2.4	2.1	円形	母屋	18世紀前葉～後葉	建物1を新築。18世紀末からは礎石建物に転換。
17	市ノ沢団地遺跡	第１号掘立柱建物址	4.8	9.5	2×5	44.7	13.5	2.4	1.8～2.0	円形・楕円形	母屋	17世紀後半～18世紀	2×4間（4.5×8.5m）の建替えか。
18	白幡浦島丘遺跡	２号ピット群内 建物址	5.4	10.8	3×7	58.3	17.7	1.8	1.7～1.9	円形・楕円形	母屋		内部に焼土址3。
19	黒川地区遺跡群 宮添遺跡	１号建物址	3.6	12.6	2×6	45.4	13.7	1.8	1.8～2.25	円形・不整形	母屋	18世紀頃	東・南・北面の半間外側に庇。
20	黒川地区遺跡群 宮添遺跡	２号建物址	3.6	6.0	2×3	21.6	6.5	1.8	2.0	円形・不整形	納屋等の付属施設	18世紀頃	
21	黒川地区遺跡群 宮添遺跡	３号建物址	4.3	6.4	3×5	20.8	6.3	1.3～1.6	1.0～1.6	円形・不整形	納屋等の付属施設	18世紀頃	
22	黒川地区遺跡群 宮添遺跡	４号建物址	2.7	4.9	2×3	13.2	4.0	1.3～1.4	1.5～1.7	円形・不整形	作業小屋等の付属施設	18世紀頃	南側に竈。
23	黒川地区遺跡群 宮添遺跡No.10遺跡	１号建物址	1.8	5.9	1×3	10.6	3.2	1.8～2.2	1.8	円形・不整形		江戸時代後期～幕末	東側に直列する2穴の柱穴列。1回の建替えが行われている。
24	芝下遺跡	ＳＢ０１Ａ	4.0	8.2	2×4	32.8	9.9	2.0	2.0	円形	母屋		中央部に焼土址2。報告では3～4回程度の建替えを想定。

資料No.	遺跡名	遺構名	規模			面積（㎡）	坪数	柱間距離		柱穴の形状	建物の機能	構築時期	備　考
			梁間（m）	桁行（m）	梁×桁（間）			梁間距離（m）	桁間距離（m）				
25	芝下遺跡	ＳＢ０１Ｂ	3.7	7.5	2×4	27.8	8.4	1.85	1.6～1.9	長方形	母屋		東端と西寄りに焼土址。
26	米町遺跡 大町二丁目391-1	建物基礎群	3.6	6.3	2×3.5	22.7	7.0	1.8	1.8	(正方形)			礎石建物。約50㎝の正方形を呈するピット内に礎石。
27	池子遺跡群 No.１－Ｃ地点	Ｋ－５号建物址	3.4	3.5	1×2	11.9	0.6	3.4	1.7～1.8	円形・楕円形			
28	池子遺跡群 No.１－Ｃ地点	Ｋ－６号建物址	4.4	4.7	2×2	20.7	6.3	2.0～2.3	1.3～3.0	円形・楕円形		近世末	
29	池子遺跡群 No.１－Ｃ地点	Ｋ－７号建物址	6.3	6.4	3×2	40.3	12.2	2.0	2.9	円形・楕円形	母屋		
30	池子遺跡群 No.１－Ｃ地点	Ｋ－８号建物址	4.4	7.0	2×3	30.8	9.3	1.4	2.1～2.7	円形・楕円形	母屋		
31	池子遺跡群 No.１－Ｃ地点	Ｋ－９号建物址	2.6	5.2	1×3	13.5	4.1	2.4･2.6	1.2～2.1	円形・楕円形	付属建物		K-11号または12号建物址の付属建物。
32	池子遺跡群 No.１－Ｃ地点	Ｋ-10号建物址	3.9	4.6	2×2	17.9	5.4	1.9･2.0	2.3	円形・楕円形	付属建物		K-7号または8号建物址の付属建物。
33	池子遺跡群 No.１－Ｃ地点	Ｋ-11号建物址	3.9	3.9	1×2	15.2	4.6	3.9	1.9･2.0	円形・楕円形	母屋		
34	池子遺跡群 No.１－Ｃ地点	Ｋ-12号建物址	4.3	4.3	1×2	18.5	5.6	4.3	2.0･2.3	円形・楕円形	母屋		
35	池子遺跡群 No.１－Ｃ地点	Ｋ-13号建物址	6.9	9.9	3×5	68.3	20.7	1.9～2.0	1.8～3.0	円形・楕円形		17ｃ～18ｃ前	総柱式。
36	池子遺跡群 No.１－Ｃ地点	Ｋ-14号建物址	6.2	6.2	3×3	38.4	11.7	2.2～2.5	2.0～2.1	円形・楕円形		中世末～近世初頭	総柱式？
37	池子遺跡群 No.１－Ｃ地点	Ｋ-15号建物址	2.9	4.2	2×3	12.2	3.7	1.8･2.0	1.1～1.7	円形・楕円形		初現は17ｃ初頭か	総柱式？同じ場所で建替えか。
38	池子遺跡群 No.７地点東地区	第19号掘立柱建物址	2.0	3.6	1×2	7.2	2.2	2.0	1.6～1.9	円形・楕円形		戦国末～江戸時代前半	
39	池子遺跡群 No.７地点東地区	第３号掘立柱建物址	3.6	6.0	2×3	21.6	6.5	1.8	1.8～2.7	円形・楕円形	母屋		近代の第1号建物址(礎石建て)の前身建物。
40	池子遺跡群 No.７地点東地区	第５号掘立柱建物址	4.0	4.2	2×2	16.8	5.1	1.4･2.6	1.8･2.4	円形・楕円形	付属建物		第3号掘立柱建物址の付属建物。第6号掘立柱建物に先行か。
41	池子遺跡群 No.７地点東地区	第６号掘立柱建物址	2.4	3.6	1×2	8.6	2.6	2.4	1.6･2.0	円形・楕円形	付属建物	18世紀後半以前	第3号掘立柱建物址の付属建物。第5号掘立柱建物址の建替え。
42	池子遺跡群 No.７地点東地区	第８号掘立柱建物址	2.3	4.3	1×2	9.9	3.0	2.3	2.1	円形・楕円形	小屋的な施設		
43	池子遺跡群 No.７地点東地区	第９号掘立柱建物址	2.0	3.7	1×2	7.4	2.2	2.0	1.9	円形・楕円形			
44	池子遺跡群 No.７地点東地区	第12号掘立柱建物址	3.6	3.9	2×2	14.0	4.3	1.6･2.0	1.9～2.1	円形・楕円形			柱穴2穴底面に土丹塊。石場建ての建物か。
45	池子遺跡群 No.７地点東地区	第13号掘立柱建物址	1.9	2.4	1×2	4.6	1.4	2.0	1.9	円形・楕円形	小屋的な建物		
46	池子遺跡群 No.５地点	Ｋ-10号建物址	4.3	6.2	1×3	26.7	8.1	4.3	1.5～2.7	円形・楕円形			
47	池子遺跡群 No.５地点	Ｋ-11号建物址	6.0	5.5	3×3	33.0	10.0	0.9～1.0	0.9～1.0	円形・楕円形			

資料No.	遺跡名	遺構名	規模			面積（㎡）	坪数	柱間距離		柱穴の形状	建物の機能	構築時期	備　考
			梁間（m）	桁行（m）	梁×桁（間）			梁間距離（m）	桁間距離（m）				
48	池子遺跡群 No.５地点	K-14号建物址	3.9	4.4	2×3	17.1	5.2	1.9･2.0	1.3～1.6	円形・楕円形		18ｃ末～19ｃ後半	北(東)及び西に庇ないしは縁側。K-16号建物址へ改築。
49	池子遺跡群 No.５地点	K-15号建物址	4.4	5.6	2×3	24.6	7.5	1.9	1.9	円形・楕円形		18ｃ末～19ｃ後半	南及び東に庇ないしは縁側、北東隅に張り出し。
50	池子遺跡群 No.５地点	K-４号建物址	4.7	5.6	2×3	26.3	8.0	2.2～2.4	1.8～1.9	円形・楕円形			K-8号建物址の上面で検出。
51	池子遺跡群 No.５地点	K-５号建物址	4.2	6.2	1×3	26.0	7.9	4.0･4.2	1.6	円形・楕円形		宝永山噴火前	
52	池子遺跡群 No.５地点	K-６号建物址	2.7	3.7	2×2	10.0	3.0	1.3･1.4	1.8	円形・楕円形			
53	池子遺跡群 No.５地点	K-８号建物址	5.6	7.0	1×4	39.2	11.9	5.6	1.5～2.0	円形・楕円形		宝永山噴火前	K-4号建物址の下面で検出。
54	池子遺跡群 No.５地点	K-12号建物址	3.7	3.5	2×1	13.0	3.9	1.3･1.9	3.5	円形・楕円形			
55	池子遺跡群 No.５地点	K-18号建物址	3.0	4.2	2×2	12.6	3.8	1.9･2.4	1.5～2.7	円形・楕円形			
56	池子遺跡群 No.５地点	K-19号建物址	4.3	6.9	2×3	29.7	9.0	1.9･2.4	1.5～2.7	円形・楕円形			東及び南側に縁側ないしは庇。
57	池子遺跡群 No.５地点	K-20号建物址	5.7	6.5	2×2	37.1	11.2	2.6･3.0	2.9･3.6	円形・楕円形			西及び南に縁側ないしは庇。
58	池子遺跡群 No.５地点	K-13号建物址	4.5	6.2	2×3	27.9	8.5	1.9～2.5	1.9～2.1	円形・楕円形			
59	地蔵山熊野神社遺跡	K-20号建物址	8.0	7.3	4×4	58.4	17.7	1.9～2.1	1.7～1.9	円形・楕円形		16ｃ後半～17ｃ前半	総柱式。神社か?
60	御組長屋遺跡 第Ⅱ地点	１号掘立柱建物址	4.5	6.6	3×4	29.7	9.0	1.1～1.6	1.5～1.9	隅丸方形・長方形		18世紀～19世紀	南側に庇。弓矢・鉄砲方足軽の居住区。
61	御組長屋遺跡 第Ⅱ地点	２号掘立柱建物址	3.5	5.0	2～×3	17.5	5.3	1.6･1.9	1.2～1.9	円形・楕円形主体		18世紀～19世紀	調査区外に続いている可能性あり。弓矢・鉄砲方足軽の居住区。
62	御組長屋遺跡 第Ⅱ地点	３号掘立柱建物址	3.3	6.0	1.5×3	19.8	6.0	1.3･2.0	1.7～2.7	方形・長方形		18世紀後半～19世紀前半	弓矢・鉄砲方足軽の居住区。
63	小田原城三の丸 藩校集成館第Ⅲ地点	１号礎石建物址	3.9	6.6	2×3	19.4	5.9	1.7･1.9	1.6･2.0			19世紀前半以降	集成館に関連した礎石建物址。礎石は20㎝前後の扁平な河原石からなる。北と東に張り出し部分を持つ?
64	中村遺跡	１号掘立柱建物址	3.5	6.7	1.5×3	23.5	7.1	1.2･2.2	2.1～2.4	円形・楕円形	母屋	中世末～近世前半	西側及び南側に庇。3×4間の建物址と報告されているが、北側と東側は付属施設と判断。
65	中村遺跡	３号掘立柱建物址	3.9	6.6	2×3	25.7	7.8	1.7･2.2	2.2	円形主体	母屋	江戸時代前期頃	江戸時代中期頃に廃絶。
66	中村遺跡	４号掘立柱建物址	4.2	5.1	2～×3	21.4	6.5	2.1	1.5～2.0	円形主体	物置または小屋		調査区外に延びており全体は不明。
67	五社神社遺跡	１号掘立柱建物址	4.9	3.0～	2×1～			2.5	2.6	円形主体		18世紀代	北・南・東側に庇。間仕切り用の柱穴1穴。
68	宮久保遺跡	ＳＢ０１	5.5	6.3	2×3～			2.6･2.9	2.1	不整形	母屋		東側に庇。遺存部は土間か。
69	宮久保遺跡	ＳＢ０２	5.1	9.9	3×6	50.5	15.3	2.3･2.8	1.6～2.0	楕円形主体	母屋	17世紀後半	内部に竈、流し、西側に庇。
70	宮久保遺跡	ＳＢ０４	4.15	10.1	2×5	41.9	12.7	2.1	1.5～2.4	円形・楕円形	母屋	17世紀後半	間仕切り用の柱穴3穴。ヒロマ型の間取り。
71	宮久保遺跡	ＳＢ０５	5.5	9.8	3×5	53.9	16.3	1.5～2.1	1.0～2.9	楕円形主体	母屋	18世紀前半	

資料No.	遺跡名	遺構名	規模			面積（㎡）	坪数	柱間距離		柱穴の形状	建物の機能	構築時期	備　考
			梁間（m）	桁行（m）	梁×桁（間）			梁間距離（m）	桁間距離（m）				
72	宮久保遺跡	ＳＢ０６	6.8	11.3	3×5.5	76.9	23.3	2.3～2.6	1.8～2.1	楕円形・長方形	母屋	18世紀後半	西側に庇。間仕切り用の柱穴4穴。南北半間部分は下屋造り、整形四つ間取り型式。
73	宮久保遺跡	ＳＢ０７	4.6	9.9	2×5	45.5	13.8	1.8～2.6	1.7～2.3	円形主体	母屋		南・西側と北側一部に庇。
74	宮久保遺跡	ＳＢ０８	5.3・5.9	11.9	3×6	69.5	21.2	1.8	1.6～2.4	楕円形主体	母屋	19世紀前半	南・東側に庇。北側の張り出しは建物に付属。SB07を改築か。主柱穴の間に補助柱穴　。喰違い四つ間取り型式。
75	宮久保遺跡	ＳＢ０９	2.8	4.85	2×3	13.6	4.1	2.8	1.35～1.9	不整円形	ナヤ		主軸方向が直交するSB07に付属。
76	宮久保遺跡	ＳＢ１０	2.95	5.1	2×3	15.0	4.6	1.35・1.55	1.4～1.9	円・楕円形	ナヤ		建物の配置からSB08に付属。
77	宮久保遺跡	ＳＢ１１	4.6	8.15	2×4	37.5	11.4	1.4～2.7	1.9～2.2	円形・楕円形	母屋	17世紀中半	西側と南側一部に庇。　間仕切り用の柱穴3穴。
78	宮久保遺跡	ＳＢ１２	8.25	11.3	3.5×5	93.2	28.3	2.1～2.4	1.4～3.0	楕円形主体	母屋		竈あり。西側は一部調査区外。
79	宮久保遺跡	ＳＢ１４	8.2	4.4～	4×5			1.75～2.4	1.55～2.2	楕円形主体	母屋		建物は東側が正面の南北棟と推定。
80	宮久保遺跡	ＳＢ１５	8.5	4.5～	4×5			1.4～2.0	1.8	円形・長楕円形	母屋		SB14より新しい。建替えか。
81	宮久保遺跡	ＳＢ１６	7.9	3.4～	4×5			0.7～1.5	1.5	円形・不整形	母屋		南側に庇。SB15の建替えか。
82	宮久保遺跡	ＳＢ１７	3.1	2.9・3.1	2×2	9.3	2.8	3.1	1.5～1.6	円形・楕円形	ナヤ		梁行は2間吹き放ち。
83	宮久保遺跡	ＳＢ１８	3.1	6.6	2×4	20.5	6.2	1.5	1.5	円形・楕円形	ナヤ		西側に1間の庇。梁に平行して長方形の溝2本。SB17の建替え・拡張。
84	宮久保遺跡	ＳＢ１９	4.8	9.4	3×5	45.1	13.7	1.4～2.0	1.8・1.9	円形主体	母屋		間仕切り用柱穴1穴。北側が正面。
85	宮久保遺跡	ＳＢ２０	3.1	5.5	2×3	17.1	5.2	1.7～1.9	1.7～1.9	円形・楕円形	ナヤ		総柱式建物。
86	宮久保遺跡	ＳＢ２１	2.0	3.5・3.6	1×2	7.1	2.2	2.0	1.75・1.8	楕円形主体	ナヤ		梁間は2間吹き放ち。
87	恩名沖原遺跡	４号掘立柱建物址	2.9	4.9	2×2	14.2	4.3	1.4・1.5	2.4・2.5	方形・円形	作業場小屋的な施設		
88	恩名沖原遺跡	５号掘立柱建物址	3.5	4.0	1×1	14.0	4.2	3.5	4.0	略円形	作業場小屋的な施設		
89	恩名沖原遺跡	６号掘立柱建物址	3.7	4.2	1×2	15.5	4.7	3.7	2.0・2.2	略円形	作業場小屋的な施設		
90	恩名沖原遺跡	７号掘立柱建物址	2.8	4.4	1×2	12.3	3.7	2.8・3.0	1.7・2.7	方形	作業場小屋的な施設		
91	愛名宮地遺跡	第１号掘立柱建物址	2.2	3.6	2×3	7.9	2.4	1.1	1.1～1.2	不整円形		17世紀後半～18世紀初頭	内部に土坑。
92	愛名宮地遺跡	第２号掘立柱建物址	2.7	3.0	1×3	8.0	2.4	2.5・2.65	0.8～1.2	不整円形		17世紀後半～18世紀初頭	
93	愛名宮地遺跡	第３号掘立柱建物址	3.7	5.0	3×4	16.9	5.1	1.1～1.3	1.2～1.3	不整円形		17世紀後半～18世紀初頭	
94	愛名宮地遺跡	第４号掘立柱建物址	4.2	6.2	4×5	26.0	7.9	1.1	0.9～1.7	不整円形			
95	愛名宮地遺跡	第５号掘立柱建物址	7.0	12.5	2×4	87.5	26.5	3.5	3.3～3.5	方形		17世紀後半～18世紀初頭	
96	愛名宮地遺跡	第６号掘立柱建物址	6.0	15.5	3×4	93.0	28.2	1.8	3.8	不整円形		17世紀後半～18世紀初頭	
97	愛名宮地遺跡	第７号掘立柱建物址	3.6	18.0	2×10	64.8	19.6	1.8	1.8	不整円形		17世紀後半～18世紀初頭	

資料No.	遺跡名	遺構名	規模			面積（㎡）	坪数	柱間距離		柱穴の形状	建物の機能	構築時期	備　考
			梁間（m）	桁行（m）	梁×桁（間）			梁間距離（m）	桁間距離（m）				
98	東町二番	Ａ３号建物址	6.4	10.4	3.5×6.4	66.6	20.2				店蔵？	18世紀後半～幕末	店部分と通り土間を有する建物。1867年に罹災。2mほど東側に礎石(同一の建物か?)。
99	東町二番	Ａ４号建物址	4.5～	12.5～								18世紀後半～幕末	A3号建物址に切られ詳細は不明。西側に10～20㎝の玉石が二列敷き並べられている。
100	東町二番	Ｂ１号掘立柱建物址	7.6	9.0	4×4.6	68.4	20.7	1.8～1.9	2.1～2.4	円形・楕円形	一時的な建物？	幕末～明治前期	ピットに玉石を据えている。
101	東町二番	Ｂ４号建物址	9.0	8.0～	4×				2.0		店蔵？	18世紀後半～幕末	タタキ遺存。規模は4×5.5間程度か。
102	東町二番	Ｂ５号建物址	10.0	10.4								18世紀後半	B4号建物址の下層。拳大の礫が幅40～80㎝に渡って敷き詰められている。
103	東町二番	Ｂ６号建物址	7.5	11.0	2×3 ？				3.6			18世紀前半	礫が充填された1m角の土坑を基礎とする。B2～4号建物址に切られており全容不明。
104	東町二番	Ｄ１号建物址	3.6	7.6	2×4.2	27.3	8.3				土蔵跡	19世紀後半	東側に石垣。南側に雨落ち石。
105	東町二番	Ｅ４号建物址	4.5	14.5	2.5×8	65.3	19.8					18世紀後半～幕末	間仕切りの基礎残存。北側に石垣。
106	東町二番	Ａ５号建物址	3.7～	7.4～	2～×4～			3.6	1.8			幕末～明治前期	礎石建物址。規模不明。
107	上粕屋・川上遺跡（No.６）	５号掘立柱建物址	4.0	3.2～	2×1～			2.0	1.7･2.0	不整形・長方形			
108	上粕屋・川上遺跡（No.６）	６号掘立柱建物址	2.2	2.2	2×2	4.8	1.5	1.1･1.2	1.1	不整楕円形			
109	上粕屋・川上遺跡（No.６）	７号掘立柱建物址	2.1	2.5	2×2	5.3	1.6	0.9･1.2	1.2～1.4	円形・楕円形			
110	上粕屋・川上遺跡（No.６）	８号掘立柱建物址	2.7	3.1	2×2	8.4	2.5	1.3･1.4	1.5～1.7	不整楕円形			
111	上粕屋・川上遺跡（No.６）	９号掘立柱建物址	5.0	3.5～	2×2～			2.3･2.7	1.2～1.9	楕円形・方形			
112	上粕屋・〆引北遺跡（No.11）	10号掘立柱建物址	4.7	6.2	2×2	29.1	8.8	1.7･2.1	2.1･3.0	円形・楕円形		幕末	
113	坪ノ内・宮ノ前遺跡（No.17）	17号掘立柱建物址（新）	2.4	2.8	2×2	6.7	2.0	1.0～1.5	1.3～1.5	方形・隅丸長方形			新旧2棟あり。
114	坪ノ内・宮ノ前遺跡（No.17）	17号掘立柱建物址（古）	1.8	2.3	2×2	4.1	1.3	0.8･1.0	1.0～1.4	楕円形・隅丸長方形			新旧2棟あり。
115	坪ノ内・宮ノ前遺跡（No.17）	18号掘立柱建物址（新）	4.0	4.8	2×1	19.2	5.8	1.5･2.5	4.8	楕円形・隅丸方形			新旧2棟あり。
116	坪ノ内・宮ノ前遺跡（No.17）	18号掘立柱建物址（古）	3.2	5.0	1×3	16.0	4.8	3.2･3.3	1.5～1.8	楕円形・方形			新旧2棟あり。
117	神明若宮地区内遺跡	第４号掘立柱建物址	7.5	9.2	4×5	69.0	21.0	4.2･4.3	1.5～2.2	円形・楕円形			北側と西側に張り出し。
118	根小屋根本遺跡	１号土蔵跡	7.7	16.5		127.1	38.5				酒造に関連する蔵	19世紀後半	布基礎部分は礫と土が交互に突き固められている。
119	根小屋根本遺跡	１号礎石建物跡	7.2	0.8								19世紀後半	石の間隔のあいている箇所は出入り口部分か。北側約4mに1号土蔵跡。
120	根小屋根本遺跡	１号掘立柱建物跡（A）	6.0～	11～	2～×4～			1.8～2.1	1.8～2.8	不整円形		17世紀もしくはそれ以前	北側に庇。

資料No.	遺跡名	遺構名	規模			面積（㎡）	坪数	柱間距離		柱穴の形状	建物の機能	構築時期	備　考
			梁間（m）	桁行（m）	梁×桁（間）			梁間距離（m）	桁間距離（m）				
121	根小屋根本遺跡	１号掘立柱建物跡（B）	4.2～	5.7～	2～×3～			2.0･2.2	1.5～1.8	円形		17世紀もしくはそれ以前	1号掘立柱建物跡(A)建替え。
122	根小屋根本遺跡	２号掘立柱建物跡（A）	5.9～	8.0～	2～×3～			1.8～2.1	1.6～2.3	円形		17世紀もしくはそれ以前	
123	根小屋根本遺跡	２号掘立柱建物跡（B）	3.2～	8.2～	3～×4～			1.7･1.75	1.8～2.4	円形		17世紀もしくはそれ以前	2号掘立柱建物跡(A)建替え。
124	根小屋根本遺跡	３号掘立柱建物跡	2.9	6.4	１×3	18.6	5.6	2.8･2.9	1.3～3.4	円形		17世紀もしくはそれ以前	
125	根小屋根本遺跡	４号掘立柱建物跡	3.8	4.8	2×4	18.2	5.6	1.1～2.5	1.95～2.15	円形		17世紀もしくはそれ以前	
126	代官守屋左太夫陣屋跡	１号掘立柱建物跡	7.5	8.0	3×4	60.0	18.2	1.86～2.1	1.7～1.98	円形		17世紀前半	
127	代官守屋左太夫陣屋跡	２号掘立柱建物址	5.3	7.8～	2×4			2.7	1.55×2.35	円形		17世紀前半	
128	代官守屋左太夫陣屋跡	３号掘立柱建物址	3.6	6.3	2×3	22.7	6.9	1.7～1.9	1.85～2.3	円形		17世紀前半	
129	代官守屋左太夫陣屋跡	４号掘立柱建物址	2.0～	0.6	1～×4			18･20	1.5～2.1	円形		17世紀前半	
130	代官守屋左太夫陣屋跡	５号掘立柱建物址	5.0	5.9	2×3	29.3	8.9	1.72～3.26	1.8～2.04	円形		17世紀前半	
131	代官守屋左太夫陣屋跡	１号礎石建物跡	9.2	11.5	5×6	102.9	31.2	1.8	1.8～2.0		代官陣屋または屋敷？		北側及び南側に庇。礎石は40cmほどの河原石。3×3間が2部屋、2×2間が3部屋。17世紀中頃廃絶。
132	津久井城跡	１号礎石建物跡	3.3～	7.0	1～×5				0.8～1.0		母屋	16世紀末～17世紀前半	方形の掘り込みと礎石列からなる。礎石間の距離は0.9m前後。
133	津久井城跡	１号掘立柱建物址	2.5	2.9	2×3	7.1	2.2	1.15･1.2	0.85～1.1	円形		16世紀末～17世紀前半	柱間距離より特殊な建物の可能性が指摘されている。
134	青根馬渡No.2遺跡	Ｋ１号掘立柱建物址	1.5～	2.2～	2～×2～			1.5	2.0･2.2	不整形			
135	青根馬渡No.2遺跡	Ｋ２号掘立柱建物址	2.1～	2.6～	2～×2～			2.1	2.6	方形			
136	青根馬渡No.2遺跡	Ｋ３号掘立柱建物址	2.4～	2.7～	2～×2～			2.4	2.7	方形			
137	青根馬渡No.4遺跡	Ｋ１号掘立柱建物址	1.8	2.3～	1×2～			1.8	1.05～1.2	円形			
138	青根馬渡No.4遺跡	Ｋ２号掘立柱建物址	1.7	2.3～	1×2～			1.7	0.9～1.05	方形			
139	青根馬渡No.4遺跡	Ｋ３号掘立柱建物址			×4～				1.05～1.1	方形			
140	青根引山遺跡	Ｋ１号掘立柱建物址	1.1～	7.8	1～×4			1.1	1.9～2.0	円形			
141	青根引山遺跡	Ｋ２号掘立柱建物址	1.1～	7.8	1～×4			1.8	1.75～2.1	不整円形			
142	大地開戸遺跡	Ｋ１号掘立柱建物址	4.7	8.0	2×4	37.6	11.4	2.0･2.7	2.0	方形			
143	大地開戸遺跡	Ｋ２号掘立柱建物址	3.9	6.3	2×3	24.6	7.4	1.9･2.0	1.9～2.5	方形・円形			北側及び西側に廂。
144	半原向原遺跡	Ｋ１号掘立柱建物址	6.2	6.7	3×3.5	40.9	12.4	1.55～2.1	1.75～2.15	円形	ウマヤ		内部に竪穴状遺構。K2号掘立柱建物址の建替え。土間状で固く踏み固められた掘り込みや間仕切を有する。
145	半原向原遺跡	Ｋ２号掘立柱建物址	6.2	6.7	3×3.5	36.3	11.0	1.55～2.1	1.8～2.05	円形	ウマヤ		内部に竪穴状遺構。土間状で固く踏む固められた掘り込みや間仕切を有する。
146	半原向原遺跡	Ｋ３号掘立柱建物址	2.05～	5.1	2～×4			1.0･1.05	0.9～1.65	円形			

資料No.	遺跡名	遺構名	規模			面積（㎡）	坪数	柱間距離		柱穴の形状	建物の機能	構築時期	備　考
			梁間（m）	桁行（m）	梁×桁（間）			梁間距離（m）	桁間距離（m）				
147	半原向原遺跡	K４号掘立柱建物址	2.1	2.15～	1×2～			2.1	0.7～1.35	円形			
148	上村遺跡	K１号掘立柱建物址	6.8	7.2	3×3	49.0	14.8	1.8～2.1	1.8～2.6	方形			北側に半間の廂。中央西側に粘土・焼土が分布。
149	上村遺跡	K３号掘立柱建物址	5.2	6.3	2×3	32.8	9.9	2.45・2.75	1.4～2.65	方形			北面に半間の廂。
150	上村遺跡	K４号掘立柱建物址	5.7	6.65	3×3	37.9	11.5	1.75～2.05	2.1～2.35	方形・不整形			
151	上村遺跡	K５号掘立柱建物址	3.6	6.0	2×2	21.6	6.5	1.25・1.9	1.8	方形・楕円形			
152	上村遺跡	K６号掘立柱建物址	1.8	5.1	1×3	9.2	2.8	1.8	1.4～2.2	方形・楕円形			
153	上村遺跡	K７号掘立柱建物址	2.1	5.9	1×4	12.4	3.8	2.1	1.1～1.65	方形			
154	上村遺跡	K８号掘立柱建物址	3.7	5.3	2×3	19.6	5.9	1.8・1.9	1.65～1.95	方形・円形			
155	上村遺跡	K９号掘立柱建物址	4.6	6.6	2×3	30.4	9.2	2.05・2.55	2.1～2.3	方形・円形			
156	上村遺跡	K10号掘立柱建物址	4.0	6.4	2×3	25.6	7.8	4.0	2.0～2.2	方形			梁行は中間1間の吹放ち。
157	上村遺跡	K11号掘立柱建物址	5.0	6.0	2×3	30.0	9.1	2.5	1.8～2.2	方形			
158	上村遺跡	K12号掘立柱建物址	4.8	7.2	2×4	34.2	10.4	4.8	1.6～1.9	方形			
159	上村遺跡	K13号掘立柱建物址	5.3～	9.8	2～×4			3.1	2.1～2.75	方形			
160	上村遺跡	K14号掘立柱建物址	2.3～	4.8	1～×3			2.3～	1.45～1.75	方形			2穴に河原石充填。
161	上村遺跡	K15号掘立柱建物址	3.6	4.6	2×2	16.6	5.0	1.7・1.9	2.2・2.4	方形・円形			
162	上村遺跡	K16号掘立柱建物址	1.5～	3.6	1～×3				1.1～1.35	方形・円形			
163	上村遺跡	K17号掘立柱建物址	3.55	5.15	2×3	18.3	5.5	1.7・1.85	1.2・2.8	円形・不整形			
164	上村遺跡	K１号礎石建物址	1.8～	4.6～	2～×3～			1.85	0.9～1.9				直径40cm前後の偏平な河原石利用。
165	宮ヶ瀬遺跡群 北原（No.９）遺跡	K１号掘立柱建物址	6.1	8.0	2×4	45.0	13.6	2.6・2.8	1.6～2.2	円形			南側に廂。
166	宮ヶ瀬遺跡群 北原（No.９）遺跡	K２号掘立柱建物址	5.1	7.9	2×4	40.0	12.1	2.5・2.6	2.0	方形			
167	宮ヶ瀬遺跡群 北原（No.９）遺跡	K３号掘立柱建物址	3.7	7.4	2×4	27.0	8.2	1.8・1.9	0.8～2.9	方形			東列の南端に半間の廂。
168	宮ヶ瀬遺跡群 北原（No.９）遺跡	K４号掘立柱建物址	2.4	3.65	1×2	9.0	2.7	1.8	1.8	円形			
169	宮ヶ瀬遺跡群 北原（No.９）遺跡	K５号掘立柱建物址	5.5	5.2	3×4	29.0	8.8	1.8・3.7	1.7～1.8	円形			
170	宮ヶ瀬遺跡群 北原（No.９）遺跡	K６号掘立柱建物址	3.6	5.45	2×3	20.0	6.1	1.85・2.0	1.8	円形			北・東列に半間の廂。
171	宮ヶ瀬遺跡群 北原（No.９）遺跡	K７号掘立柱建物址	3.8	7.2	2×4	27.0	8.2	1.8	1.8	円形			東面の0.5間の廂。南側の2間×2間分はK6号掘立柱建物址の柱穴を利用。
172	宮ヶ瀬遺跡群 北原（No.９）遺跡	K８号掘立柱建物址	3.7	7.3	2×4	27.0	8.2	1.8	3.6	円形			柱穴底面に偏平な河原石。一部地表に礎石を置いて柱を立てた建物。
173	宮ヶ瀬遺跡群 北原（No.９）遺跡	K９号掘立柱建物址	0.9	1.8	0.5×1.0	1.6	0.5			方形			K7土坑は厠として機能。K6号掘立柱建物址と同時並存。深さ20cm弱の溝を持つ布堀り。
174	宮ヶ瀬遺跡群 北原（No.９）遺跡	K10号掘立柱建物址	5.4	5.6	3×3	30.0	9.1	0.9～2.9	2.3～3.3	方形			内部にK9号土坑。建物址北寄りには長軸40cm・短軸30cmの範囲に焼土・灰の堆積。
175	宮ヶ瀬遺跡群 北原（No.９）遺跡	K11号掘立柱建物址	4.0	5.15	2×3	21.0	6.4	1.9・2.1	2.0	方形			東面を除く3面に半間の廂。

資料No.	遺跡名	遺構名	規模			面積（㎡）	坪数	柱間距離		柱穴の形状	建物の機能	構築時期	備　考
			梁間（m）	桁行（m）	梁×桁（間）			梁間距離（m）	桁間距離（m）				
176	宮ヶ瀬遺跡群 北原(No.９)遺跡	K12号掘立柱建物址	4.3	4.3	2×2	18.0	5.5	2.15	2.15	楕円形・方形			内部にK43土坑。5穴の柱穴底面は硬化面。
177	宮ヶ瀬遺跡群 北原(No.９)遺跡	K13号掘立柱建物址	3.8	5.8	2×2	22.0	6.7	1.9	3.3･2.5	方形			柱穴底面に硬化面。
178	宮ヶ瀬遺跡群 北原(No.９)遺跡	K14号掘立柱建物址	2.0	4.15	1×2	8.3	2.5	2.0	2.15	方形			
179	宮ヶ瀬遺跡群 北原(No.９)遺跡	K15号掘立柱建物址	1.9	4.05	1×2	7.7	2.3	1.45	2.6	方形			
180	宮ヶ瀬遺跡群 北原(No.９)遺跡	K16号掘立柱建物址	1.8	3.8	1×2	6.8	2.1	1.9	1.9	方形			底面に柱を据えた硬化面を持つものが4穴。梁行南列に0.5間の補助柱穴。
181	宮ヶ瀬遺跡群 北原(No.９)遺跡	１号礎石建物址	10.7	6.3	6×3	67.4	20.4	1.4～2.0	1.6～2.4		観音堂		三間堂。周囲には雨落ちの石組溝が巡っていたと推定。
182	宮ヶ瀬遺跡群 北原(No.9)遺跡内 長福寺址	１号掘立柱建物址	3.8	5.4	2×3	20.5	6.2	1.8	1.8	隅丸長方形			底面には硬化面。石臼片を根固石と利用。
183	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No.10･11北)遺跡	K１号掘立柱建物址	3.65	7.75	2×4	28.0	8.5	1.8･1.85	1.85～2.0	方形			内部にK1竪穴状遺構、K1･8･9土坑。
184	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No.10･11北)遺跡	K２号掘立柱建物址	2.4～	5.5	2×3			2.0	1.7	方形			
185	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No.10･11北)遺跡	K３号掘立柱建物址	3.7	7.8	2×4.1	11.0	3.3	1.3･1.4	0.75～2.0	方形			K2土坑を伴う可能性あり。
186	宮ヶ瀬遺跡群 南(No.２)遺跡	K１号掘立柱建物跡	4.8	11.5	2×6	53.9	16.3	2.4	2.1	不整円形	母屋		
187	宮ヶ瀬遺跡群 表の屋敷(No.８)遺跡	K４号掘立柱建物址	4.3	6.1	2×3	26.2	7.9	2.2	1.6～2.2	方形	主屋	17世紀中葉以降	南側に張出し。
188	宮ヶ瀬遺跡群 表の屋敷(No.８)遺跡	K５号掘立柱建物址	4.0	5.9	2×3	23.6	7.1	1.5･2.5	1.8～2.3	方形	主屋	17世紀中葉以降	東側及び南側に庇。
189	宮ヶ瀬遺跡群 表の屋敷(No.８)遺跡	K９号掘立柱建物址	3.9	6.2	2×4	24.2	7.3	1.8～2.1	1.1～1.8	方形	主屋	17世紀後半以前	
190	宮ヶ瀬遺跡群 表の屋敷(No.８)遺跡	K28号掘立柱建物址	4.3	8.1	2×4	34.7	10.5	4.3	2.0～2.1	方形	主屋		西側及び南側に庇。
191	宮ヶ瀬遺跡群 表の屋敷(No.８)遺跡	K29号掘立柱建物址	6.2	9.5	3×4	58.9	17.8	2.1	2.4	方形	主屋	17世紀後半以前	東西及び北側中央・北側西寄りに張出し。
192	宮ヶ瀬遺跡群 表の屋敷(No.８)遺跡	K30号掘立柱建物址	3.7	6.0	2×3	22.2	6.7	1.7･2.0	1.8～2.3	方形	主屋	17世紀後半以前	西側及び南側に庇。
193	宮ヶ瀬遺跡群 表の屋敷(No.８)遺跡	K31号掘立柱建物址	4.3	6.5	2×3	28.0	8.5	2.1･2.2	2.1～2.3	方形	主屋		西側に張出し。
194	宮ヶ瀬遺跡群 表の屋敷(No.８)遺跡	K43号掘立柱建物址	3.6	4.3	2×2	15.5	4.3	1.9･1.7	2.1･2.2	方形	副屋	17世紀後半以前	
195	宮ヶ瀬遺跡群 表の屋敷(No.８)遺跡	K44号掘立柱建物址	6.3	10.6	3×5	66.8	20.2	1.8～2.4	2.2～2.7	方形	主屋	17世紀後半以前	東側に庇。
196	宮ヶ瀬遺跡群 表の屋敷(No.８)遺跡	K45号掘立柱建物址	3.8	6.7	2×3	25.5	7.7	1.9	2.1･2.2	方形	主屋	17世紀後半以前	北側及び西側に庇、東側南寄りに張出し。
197	宮ヶ瀬遺跡群 表の屋敷(No.８)遺跡	K２号礎石建物			４？×４？								礎石は川原石。礎石の間隔は0.8～1.8m。19世紀代に火災によって廃絶か。

資料No.	遺跡名	遺構名	規模			面積（㎡）	坪数	柱間距離		柱穴の形状	建物の機能	構築時期	備　考
			梁間（m）	桁行（m）	梁×桁（間）			梁間距離（m）	桁間距離（m）				
198	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.６)遺跡	K19号掘立柱建物跡				39.3	11.9	1.6～2.1	1.6～2.0	方形主体	主屋	17世紀中葉以降	北西及び南側に張出し、西側に庇。主屋はＬ字形を呈する。規模は南側が2(4.2m)×4(6.2m)間、北側が2(3.6m)×2(3.7)間、付属施設の床面積は22.7㎡。
199	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.６)遺跡	K30号掘立柱建物址	3.8	5.3	2×2	20.1	6.1	1.8･2.0	2.6･2.7	方形	主屋		東側に張り出し。K7号竪穴状遺構は本遺構に伴う可能性あり。
200	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.６)遺跡	K31号掘立柱建物址	4.3	6.2	2×3	26.7	8.1	2.2	1.5～2.5	方形	主屋		西側及び南側に庇。
201	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.６)遺跡	K35号掘立柱建物址	1.6	2.9	1×2	4.6	1.4	1.6	1.4･1.5	方形主体	副屋		建物内に位置するK70号土坑は同時期に存在していた可能性あり。
202	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	Ｋ１号掘立柱建物址	3.8	12.8	2×5	48.6	14.7	1.9	1.8～3.3	方形主体	主屋	17世紀代	南東側に付属屋(K8号掘立)。約4m西側にあるK1号柱穴列は同時期に機能していた可能性あり。
203	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	Ｋ２号掘立柱建物址	3.8	8.8	2×4	33.4	10.1	1.8～2.0	2.1～2.3	方形	副屋	17世紀代	
204	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	Ｋ６号掘立柱建物址	3.4	6.5	2×4	22.1	6.7	3.4	1.6～1.8	方形	主屋	18世紀代	
205	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	Ｋ７号掘立柱建物址	4.8	12.0	2×6	57.6	17.5	2.4	2.0	方形主体	主屋	17世紀代	
206	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	Ｋ８号掘立柱建物址	4.2	10.6	2×5	44.5	13.5	4.2	2.1	方形	副屋	17世紀代	
207	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	Ｋ９号掘立柱建物址	3.8	7.0	2×4	26.6	8.0	3.8	1.7～1.8	方形・円形	主屋	18世紀代	北側に位置するK6号掘立は同時併存の可能性あり。
208	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K16号掘立柱建物址	4.7	8.6	2×4	40.4	12.2	2.3～2.4	2.1～2.2	方形	主屋	17世紀代	
209	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K17号掘立柱建物址	4.8	8.9	3×4	42.7	12.9	1.5～1.8	1.9～2.4	方形主体	主屋	17世紀代	
210	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K18号掘立柱建物址	4.6	8.1	2×4	37.2	11.3	2.3	2.0～2.1	方形	主屋	17世紀代	
211	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K19号掘立柱建物跡	2.5	3.4	2×2	8.5	2.6	1.2～1.6	1.5～1.9	方形	副屋	18世紀中葉以後	主屋は石場建て。削平により消滅した可能性あり。
212	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K20号掘立柱建物址	4.1	5.6	2×3	23.0	7.0	1.9～2.2	1.9･3.7	方形・円形	主屋	19世紀代	
213	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K21号掘立柱建物址	4.3	8.2	2×4	35.2	10.7	2.0･2.3	2.0～2.1	方形	主屋	18世紀中以降	西側に庇。K21～23号掘立は建替えの可能性あり(22号→23号→21号)。
214	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K22号掘立柱建物址	4.2	6.1	2×3	25.6	7.8	1.5･2.7	2.0～2.1	方形	主屋	17世紀代	西側に庇。内部にK47・52号土坑。K21～K23号掘立は建替えの可能性あり(22号→23号→21号)。
215	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K23号掘立柱建物址	4.1	6.5	2×3	26.7	8.1	2.0･2.3	2.1～2.2	方形	主屋	17世紀代	西側に庇。内部にK46・48・50・51号土坑。K21～23号掘立は建替えの可能性あり(22号→23号→21号)。
216	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K26号掘立柱建物址	1.1	1.9	1×1	2.1	0.6	1.1	1.9	方形		18世紀中以降	
217	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K27号掘立柱建物址	3.5	5.6	2×3	19.6	5.9	1.6･1.9	1.6～2.1	方形	厩	17世紀代	内部にK2号竪穴状遺構。K27・K28号掘立は建替え(28号→27号)。

資料No.	遺跡名	遺構名	規模			面積（㎡）	坪数	柱間距離		柱穴の形状	建物の機能	構築時期	備　考
			梁間（m）	桁行（m）	梁×桁（間）			梁間距離（m）	桁間距離（m）				
218	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K28号掘立柱建物址	3.3	3.4	2×2	11.2	3.4	1.6・1.7	1.6～1.8	方形	厩	17世紀代	内部にK3号竪穴状遺構。K27・K28号掘立は建替え(28号→27号)。
219	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K31号掘立柱建物址	1.9	3.4	1×2	6.5	2.0	1.9	1.7	方形	副屋	17世紀代	
220	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K32号掘立柱建物址	4.5	6.6	2×3	29.7	9.0	2.0・2.5	2.1～2.4	方形	主屋	17世紀代	内部にK3号竪穴状遺構。
221	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K33号掘立柱建物址	4.3	5.5	2×3	23.7	7.2	2.1・2.2	1.7～1.9	方形	主屋	17世紀代	約2m西側にあるK2号柱穴列は同時期に機能していた可能性あり。
222	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K35号掘立柱建物址	4.0	5.3	2×3	21.2	6.4	1.6～2.2	1.8～3.1	方形	主屋	18世紀中葉以降	南側と西側に庇。
223	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K36号掘立柱建物址	3.5	4.0	2×2	14.0	4.2	1.7～1.8	2.0	方形	厩	17世紀代	K36・37号掘立は建替え(36号→37号)。
224	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K37号掘立柱建物址	3.4	5.0	2×3	17.0	5.2	1.5・1.9	1.5～1.8	方形	厩	18世紀中葉以降	K36・37号掘立は建替え(36号→37号)。
225	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K38号掘立柱建物址	4.6	9.0	2×5	41.4	12.5	2.3	1.8	方形	主屋	17世紀代	
226	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K40号掘立柱建物址	3.6	7.1	2×4	25.6	7.7	1.4～1.8	1.6～2.0	方形	主屋	18世紀中葉以降	
227	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K41号掘立柱建物址	3.9	8.5	3.9×8.5	33.2	10.0	1.7～2.2	0.8～2.3	方形	主屋	17世紀代	
228	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K42号掘立柱建物址	1.4	3.1	1×2	4.3	1.3	1.4	1.4・1.7	方形	副屋	18世紀中葉以降	
229	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.７)遺跡	K１号蔵址	3.6	5.3	2×3	19.1	5.8	1.8	1.8	不整形	蔵	19世紀中頃	柱穴内に礎石残存。竪穴は4.1m×2.3m、壁高52cm。壁際には幅30cmの溝が掘られ、石垣が組まれている。
230	真田・北金目遺跡群	SB6001	1.8	3.45	2×3	6.2	1.9	0.8	1.1～1.2	方形・長方形主体			
231	真田・北金目遺跡群	SB6002	3.8	4.6	2×2	17.5	5.3	1.9	2.3	方形・長方形主体	倉庫？		
232	真田・北金目遺跡群	SB6003	4.6	6.2	3×3	28.5	8.6	1.8～1.9	2.3	方形・長方形主体			
233	真田・北金目遺跡群	SB0001	4.35	12.9	2×6	56.1	17.0	1.8～2.3	1.8～2.2	円形・楕円形主体			
234	真田・北金目遺跡群	SB0002	4.5	8.7	2×4	39.2	11.9	2.2～2.3	2.1～2.3	円形・楕円形主体			
235	真田・北金目遺跡群	SB0003	1.9	4.55	1×3	8.6	2.6	1.9	1.5	楕円形・円形			
236	真田・北金目遺跡群	SB0005	1.8	5.45	1×3	9.8	3.0	2.0	1.7	楕円形・円形			
237	真田・北金目遺跡群	SB0007	3.75	5.95	2×3	22.3	6.8	1.55～2.2	1.9～2.1	楕円形・隅丸方形			
238	真田・北金目遺跡群	SB0009	4.6	7.3	2×4	33.6	10.2	2.15～2.3	1.25～2.05	円形・楕円形主体			
239	真田・北金目遺跡群	SB0010	1.4	2.4	1×1	3.4	1.0	1.2・1.4	2.35・2.4	円形・楕円形主体			
240	はじめ沢下遺跡	K１号掘立柱建物址a	5.4	10.8	3×6	58.3	17.7	1.8	1.5～2.1	円形主体	母屋	江戸中～後期	西側に張り出し、南北および東側に庇。炉址・竪穴状遺構を伴う。

資料No.	遺跡名	遺構名	規模			面積（㎡）	坪数	柱間距離		柱穴の形状	建物の機能	構築時期	備　考
			梁間（m）	桁行（m）	梁×桁（間）			梁間距離（m）	桁間距離（m）				
241	はじめ沢下遺跡	Ｋ１号掘立柱建物址ｂ	5.4	10.8	3×6	58.3	17.7	1.8	1.5～2.1	円形主体	母屋	江戸中～後期	西側と南側に庇。炉址・竪穴状遺構を伴う。
242	はじめ沢下遺跡	Ｋ２号掘立柱建物址	4.5	9.0	3×5	40.5	12.3	0.9～1.8	0.8～1.8	円形主体	母屋	江戸中～後期	東側に張り出し、南側に庇。炉址を伴う。
243	はじめ沢下遺跡	Ｋ３号掘立柱建物址	5.4	9.0	3×5	48.6	14.7	1.8	1.8	円形主体	母屋	江戸中～後期	南側に庇。炉址を伴う。
244	はじめ沢下遺跡	Ｋ４号掘立柱建物址	3.6	5.4	2×3	19.5	5.9	1.8	1.8	円形主体	母屋	江戸中～後期	西側に庇。
245	はじめ沢下遺跡	Ｋ５号掘立柱建物址	1.7	2.1	1×1	3.6	1.1	1.7	2.1	円形主体	付属	江戸中～後期	K4掘立の付属。
246	津久井城跡馬込地区	Ｋ１号掘建柱建物址	3.8	5.7	2×3	21.7	6.6	3.8	1.9	円形主体	副屋	17世紀代	
247	津久井城跡馬込地区	Ｋ２号掘建柱建物址	6.6	10.5	4×6	69.3	21.0	2.1～2.3	2.0･4.6	不整円形	主屋		北側と西側に半間の庇、南側に張り出し。
248	津久井城跡馬込地区	Ｋ３号掘建柱建物址ａ	3.8	11.0	2×6	41.8	12.7	1.8～2.0	1.8～2.0	不整円形	主屋		東側に塀。浅い掘り込みを伴う。内部にXT3号竪穴状遺構。K25号溝。建替えの可能性あり。
249	津久井城跡馬込地区	Ｋ３号掘建柱建物址ｂ	5.4	9.2	3×5	49.7	15.0	1.8	1.8～1.9	不整円形			東側にピット列。K3号掘立ａの建替えの可能性あり。
250	津久井城跡馬込地区	Ｋ４号掘建柱建物址	5.0	7.3	3×4	36.5	11.1	1.5～1.8	1.5～2.2	円形主体	主屋	17世紀以降	内部にKT2号竪穴状遺構。中央部に炉穴。
251	津久井城跡馬込地区	Ｋ５号掘建柱建物址	3.6	5.6	2×3	20.2	6.1	1.8～2.0	1.8	円形主体	主屋	17世紀以降	竪穴状施設。
252	津久井城跡馬込地区	Ｋ６号掘建柱建物址	9.2	13.4	5×7	123.3	37.4	1.8～1.9	1.8～2.0	円形	主屋		西側に張り出し、南側に庇。南東側に硬化面。
253	真田・北金目遺跡群	41Ｂ区ＳＢ001	3.6	6.0	2×4	21.6	6.5	1.7～2.0	1.45～1.55	楕円・隅丸方形主体	母屋		束柱を伴う。
254	真田・北金目遺跡群	41Ｂ区ＳＢ002	3.8	4.4	2×3	16.7	5.1	1.8～2.0	1.2～1.6	楕円・長方形主体			木材(柱材)・根石出土。北東ないしは南西側へ延びる可能性あり。
255	真田・北金目遺跡群	51Ｃ区ＳＢ001	3.8	4.6	3×3	17.5	5.3	0.9～1.9	0.7～1.85	楕円・長方形主体			南側ないしは南西側に延びる可能性あり。
256	城際遺跡	20号掘建柱建物址	4.5	6.1	2×4	27.5	8.3	1.8～2.3	1.8～2.2	円形・楕円形主体			北側に庇？
257	中依知遺跡	Ｂ１号(礎石)建物址	3.5	7.2	2×4	25.2	7.6	1.75	1.8				基礎の石は長径30～50cmの河原石が主体。東側に径5cm以下の小礫を主体とする礫敷き。
258	原宿町遺跡	１次 ２号掘立柱建物址	1.1～	5.7～	1～×3～			0.9～1.1	1.9	楕円形・不整円形			北側及び東側に延びる可能性あり。南側は庇か。
259	原宿町遺跡	１次 ５号掘立柱建物址	2.0	2.5	1×2	5.0	1.5	2.0	1.2･1.3	方形・円形	付属建物		土坑が伴う可能性あり。
260	原宿町遺跡	１次 ６号掘立柱建物址	2.4～	3.6～	1～×2～			2.2･2.4	1.8～1.85	不整円形	母屋		北側及び東側に庇。南側及び西側に延びる可能性あり。
261	原宿町遺跡	１次 10号掘立柱建物址	2～	3.55	1～×2			2.0	1.75･1.8	長方形・不整円形主体			東側に庇。北側に延びる可能性あり。
262	原宿町遺跡	１次 13号掘立柱建物址	2.6～	4～	1～×2～			1.3	2.0～2.2	長方形・不整円形主体			西側及び北側に延びる可能性あり。
263	原宿町遺跡	１次 18号掘立柱建物址	1.9	1.9	1×1	3.6	1.1	1.9	1.9	円形			
264	原宿町遺跡	１次 20号掘立柱建物址	2.8	7.6	2×4	21.28	6.4	1.5～1.7	1.8～2.0	不整円形・方形			

資料No.	遺跡名	遺構名	規模			面積（㎡）	坪数	柱間距離		柱穴の形状	建物の機能	構築時期	備　考
			梁間（m）	桁行（m）	梁×桁（間）			梁間距離（m）	桁間距離（m）				
265	原宿町遺跡	１次 21号掘立柱建物址	3.6	4.8	2×3	17.2	5.2	1.5～2.0	1.5～1.8	円形・不整円形			西側及び東側に庇？
266	原宿町遺跡	１次 23号掘立柱建物址	2.4	5.4	2×3	13.0	3.9	0.8	1.8	方形・楕円形主体			東側及び北側に延びる可能性あり。
267	原宿町遺跡	１次 25号掘立柱建物址	3.3	7.7	2×5	25.4	7.7	0.9・2.4	1.3～1.8	方形・不整円形	母屋		西側及び南側に庇。
268	原宿町遺跡	２次 １号掘立柱建物址		5.5～	×3～				1.7～2.0	円形・楕円形			北側に庇。南側及び西側に延びる可能性あり。
269	原宿町遺跡	２次 ２号掘立柱建物址	1.6	1.8	1×1	2.9	0.9	1.6	1.8	円形・隅丸方形			
270	原宿町遺跡	４次 １号掘立柱建物址	2.7	3.6	2×2	9.7	3.0	1.3～1.4	1.8	円形・楕円形			
271	原宿町遺跡	４次 １号土蔵跡	3.7	5.6	2×3	20.7	6.3				蔵	19世紀後半以降	根石は60×33×15cm程度の切石を使用。布基礎は上部幅70cm・深さ80cmで径20cm以下の礫多量含む。出入り口は西側。

相模における国分寺造営以降の瓦生産体制について

― 国分寺・国府・国内諸寺間における瓦工人の動向について ―

髙橋　香

・はじめに

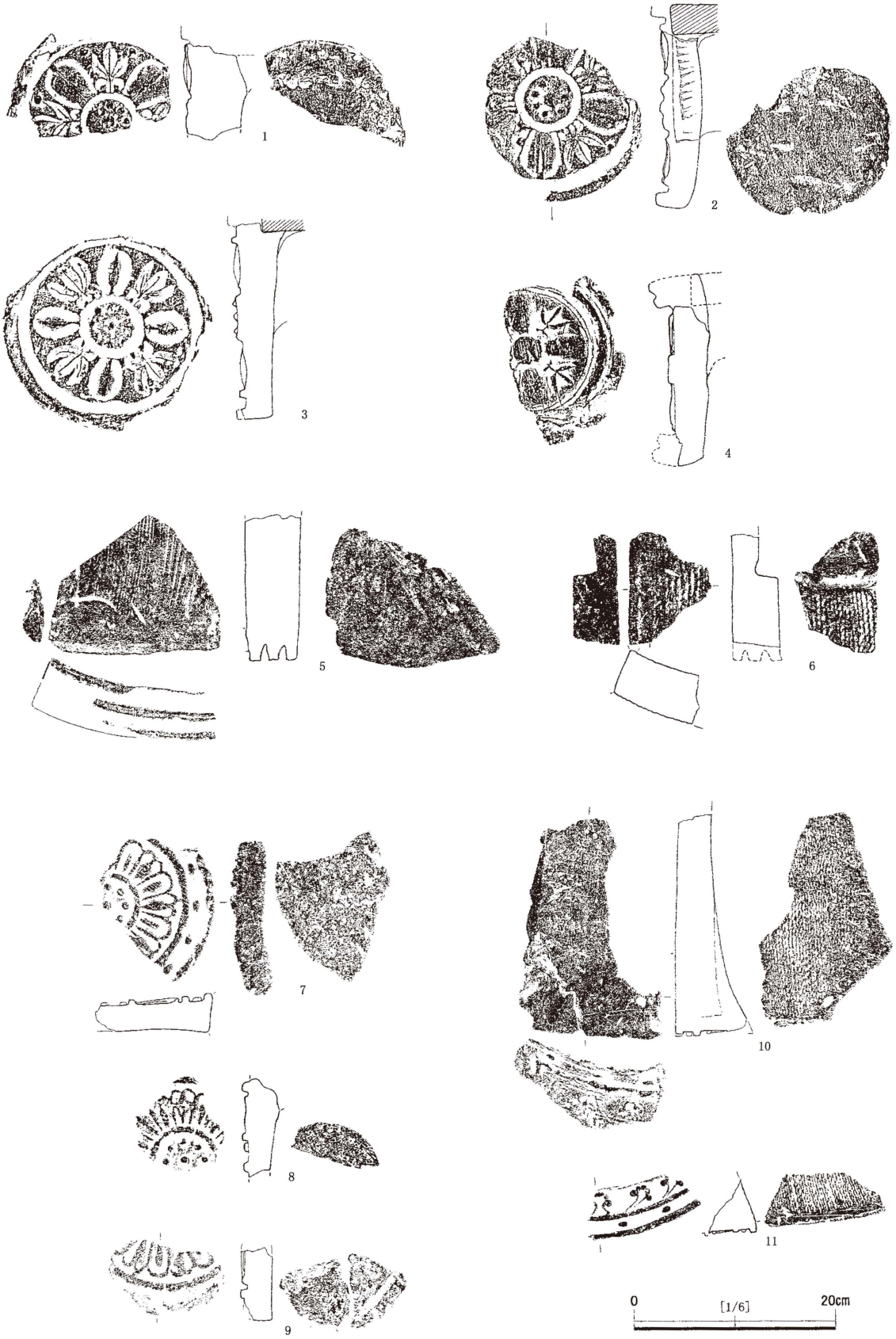
相模国内で初めて古代寺院の造寺活動が行われたのは諸説あるが、一般的には横須賀市に所在する宗元寺とされている。その創建瓦の瓦当文様は、忍冬唐草紋と呼ばれる奈良県王寺町に所在する西安寺と同笵瓦で、古代政治の中心であった畿内で使用されていた瓦当文様をとりいれたものである。初期寺院の古代瓦は、比較的その地域に最初に導入された瓦当文様意匠や製作技法が周辺古代寺院に伝播していく様相がみられ、文様意匠や瓦の制作技法から同一の工人集団によるものとし、「拠点窯」から周辺寺院に瓦工が派遣されるという形で地方の造瓦が展開していく事が考えられている(菱田 1988・梶原 1999ほか)。しかしながら、相模国内では軒瓦の出土事例が少なく、特に初期寺院の軒瓦の同笵関係が希薄であるため、軒瓦から様相を追求するのではなく、平・丸瓦の様相から工人の動向を見いだすことなど、他国の様相とは異なる点が特徴であった。ところが、国分寺造営以降、こうした様相が一転、軒瓦の同笵関係がみられるようになる。この変化には、相模国内の造瓦体制に変化があったと考えられるが、その背景にあるのは一体何であろうか。諸事例を踏まえ、言及していく事とする。

１：研究史－研究史―国分寺造営以前の瓦の様相について―

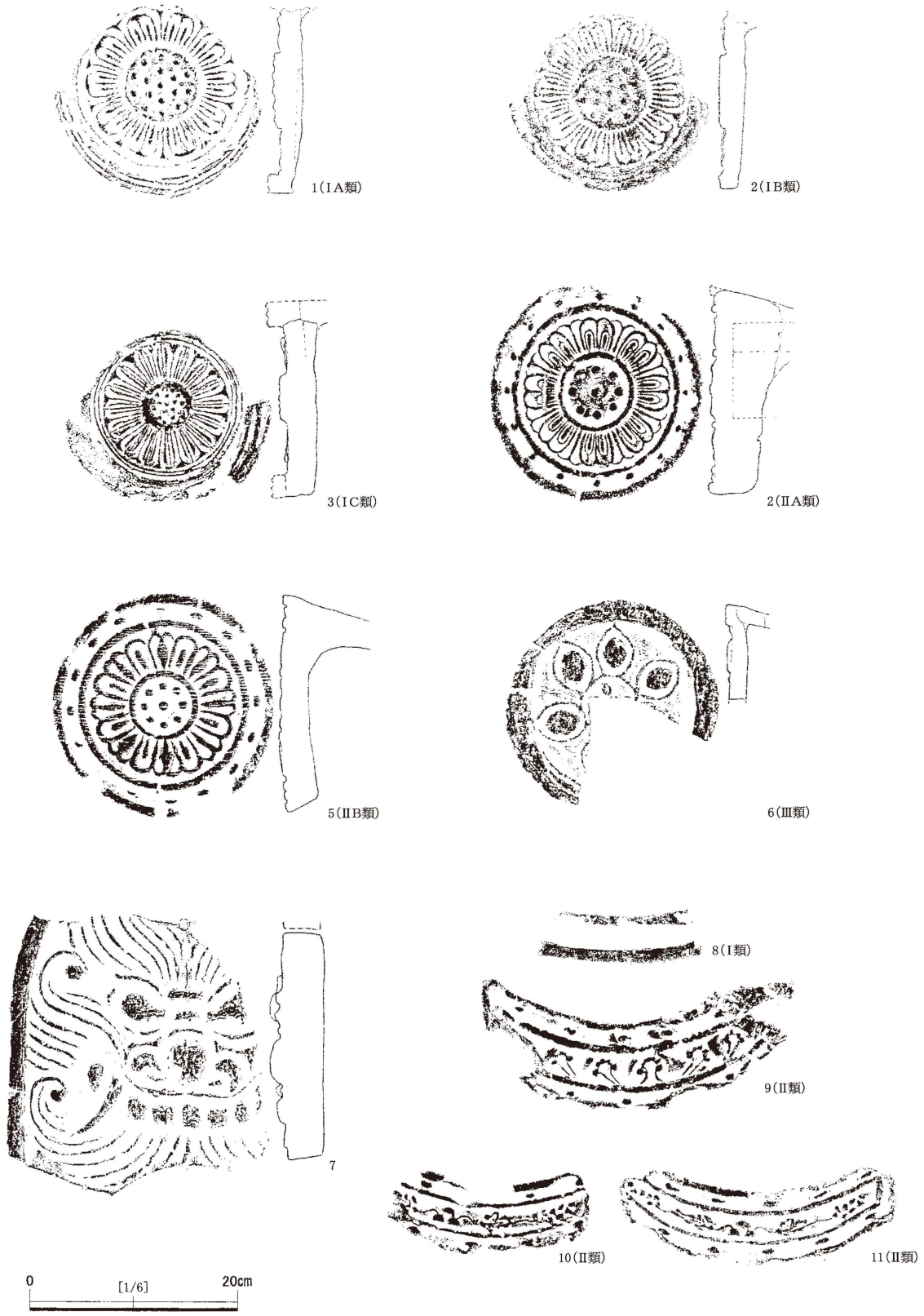
相模国内の瓦については、河野氏・國平氏の両氏による研究成果が大きい(國平・河野　1998ほか)。相模国内に所在する古代寺院は、横須賀市に所在する宗元寺、深田廃寺、鎌倉市に所在する千葉地廃寺(千葉地遺跡)、茅ヶ崎市に所在する下寺尾廃寺(註１)、小田原市に所在する千代廃寺の他、瓦が出土する地点として厚木市に所在する鐘ヶ嶽遺跡、大磯町に所在する祇園塚遺跡等がある。生産窯は、松田町に所在するからさわ瓦窯、横須賀市に所在する公郷瓦窯、乗越遺跡等があり、発掘調査によって確認はされてはいないが、石井瓦窯、法塔瓦窯等が想定されている(第１図)。相模国は八郡成立していたが、いわゆる「一郡一寺」ではなく、関東地方の中でも、どちらかといえば古代寺院は少ない国になるのかもしれない。

第１図　相模国内の古代寺院・生産窯址位置図

現在、相模の中で最初に建立した寺院として宗元寺があげられる(河野1990・國平　2010他)。御浦郡に所在し、現在

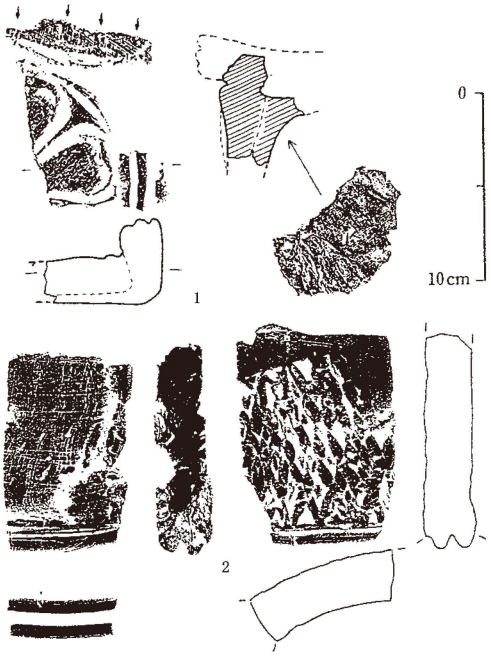


第２図　宗元寺軒瓦



第3図　千代廃寺軒瓦・鬼瓦

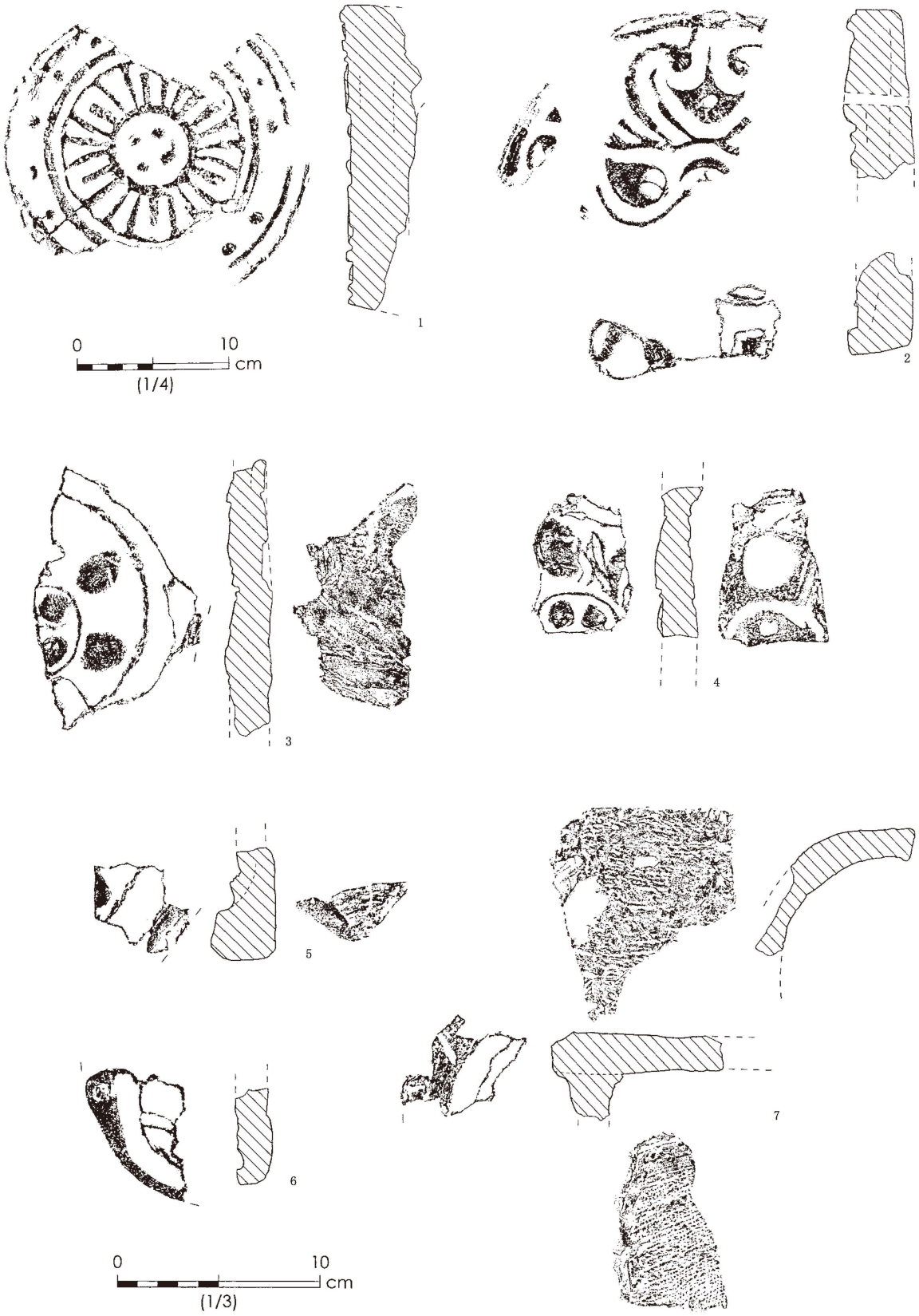
でも法灯が続く寺院である。創建瓦は忍冬唐草紋といういわゆるパルメットの意匠である(第２図)。この瓦は、西安寺と同笵であり、製作技法についても、畿内からの技術が導入されている事が明らかにされている。この文様意匠とよく似た意匠が高句麗から出土しており、この意匠のモチーフを西安寺で使用、宗元寺にも伝わったとされる。この文様意匠は相模国内では宗元寺のみに使用され、創建期から再建瓦まで、改笵されながら継承されていったようである。鬼瓦はパルメットを使用した蓮華紋鬼板を採用しており、忍冬唐草紋に対する思いが強く感じられる。西安寺におけるこの瓦の年代観が７世紀中頃と考えられており、笵傷があまり進行していない事から時間があまり経過せず瓦笵が移動してきた事が想定されている。製作技法や文様意匠から導き出される創建瓦の年代は、７世紀後半の早い時期ごろ、として考えられている。宗元寺の創建瓦を焼成した生産窯は、現在確認されていない。再建期に使用されたと考えられる飛雲紋軒平瓦は、宗元寺に近接する公郷瓦窯から出土事例があり、ここが再建期の生産窯と想定されている。平・丸瓦については、乗越遺跡や石井瓦窯、法塔瓦窯などが想定されており、三浦半島内での生産体制のもと造瓦活動が行われていた事がわかる。



第４図　千葉地遺跡軒瓦

次に、軒瓦が確認される古代寺院として千代廃寺があげられる(河野他 1993・山路 2009)。千代廃寺は足下郡に所在する寺院で、伽藍配置等は現在発掘調査によって明らかにされつつある古代寺院である。軒丸瓦は３種に分類され、創建瓦はⅠ類と呼ばれる複弁十弁蓮華文軒丸瓦である(第３図)。この瓦は、外縁は三重圏、外区に鋸歯紋を配するもので、外縁に重圏紋を配しなくなるのがⅠＢ類としたものである。千代廃寺はこの文様意匠が基本となるが、その他にⅠＣ類とした細弁の軒丸瓦がみられる。このⅠＣ類の軒瓦の側面に「大伴五十戸」のヘラ書きが記銘されている(山路 2009)。Ⅱ類とした瓦はⅠ類より後出的な瓦で、外区に珠紋を配する複弁蓮華文軒丸瓦をⅡＡとし、単弁のものをⅡＢとしている。その後に、武蔵国分寺の再建期と同笵瓦であるⅢ類が存在している。一方、これに対応する軒平瓦であるが、Ⅰ類には重弧紋が、Ⅱ類には飛雲紋軒平瓦や萄唐草紋軒平瓦が、Ⅲ類については不明である。これらの年代観について、ⅠＣ類の瓦の年代観を８世紀前葉としている。ⅠＡ類の瓦は、からさわ瓦窯が生産窯である事が明らかにされており、かわらさわ瓦窯の年代観が、出土している土器の様相から８世紀初頭という時期を導きだしている。文様意匠の系統について、東海系で確認されている石川廃寺系の系譜にあたるとし、駿河国になるが富士市の三日市廃寺にこの系統の瓦は伝播していく。国を超えて伝播していく背景に、旧国造である師長国造の勢力範囲内においてのネットワークによるものではないか、と田尾氏が指摘している(田尾 2011)。生産窯については、Ⅰ類の時期についてはからさわ瓦窯があてられ、Ⅱ類、Ⅲ類については不明である。三浦半島で確認されるような瓦は確認されず、御殿山瓦窯で確認される瓦に近い胎土の瓦が確認されている。

軒瓦のある初期寺院として最後にあげられるのが千葉地廃寺である。鎌倉郡に所在し、寺院の遺構は確認されてはいないが、素弁軒丸瓦と重孤紋軒平瓦が出土している(河野 1990ほか)。近接して、鎌倉郡衙と推定される今小路西遺跡がある事から、隣接する郡衙付属寺院として想定されているが、詳細は不明である。



第５図　下寺尾廃寺軒瓦・鬼瓦

外区に重圏をもつ素弁の軒丸瓦が出土しており、これとセットになるのは、貼り付け段顎の重弧紋軒平瓦である(第４図)。出土点数が少なく全体像がつかみにくいが、外縁に三重圏を施す素弁瓦、というモチーフは周辺寺院にはみられない文様意匠である。

最後に、初期寺院の一つである下寺尾廃寺についてとりあげてみよう。高座郡に所在し、近年の発掘調査によって明らかにされつつある寺院である(大村他　2013他)。北に高座郡衙があり、郡衙付属寺院としての評価がされており、周辺集落からは津も確認されるなど、郡衙・郡寺・港湾施設などセットで確認される遺跡の稀有な事例として著名である。下寺尾廃寺には創建期の軒丸瓦が確認されておらず、現段階では軒瓦は存在していない可能性が高い。ただし、平・丸瓦の様相からみると、宗元寺で使用しているものと同様な、桶巻き造りの平瓦を使用している事から、寺院地整備が７世紀後半頃からはじまり、本格的な建物として建立したのは８世紀初頭頃と想定されている。出土している軒瓦は国分僧寺Ⅱ類・国分尼寺Ⅲ類と同笵の軒丸瓦と素弁の軒丸瓦が出土している(第５図)。生産瓦窯については不明な点が多いが、これについては後述するのでそちらを参照していただきたい。

以上、まとめると、宗元寺にみられる三浦半島を中心とした瓦窯での生産と千代廃寺にみられる足上郡の瓦窯での生産、といういずれも寺院に近接した瓦窯生産体制が相模国内に存在していた事が想定される。これは、国分寺造営以前の在地勢力を基本とする造瓦体制であり、こうした状況は、各地でもみられる。２パターンが存在する背景には、旧国造単位をベースとしたものである事が、出土した瓦の様相からみてとれる事がいえるだろう。

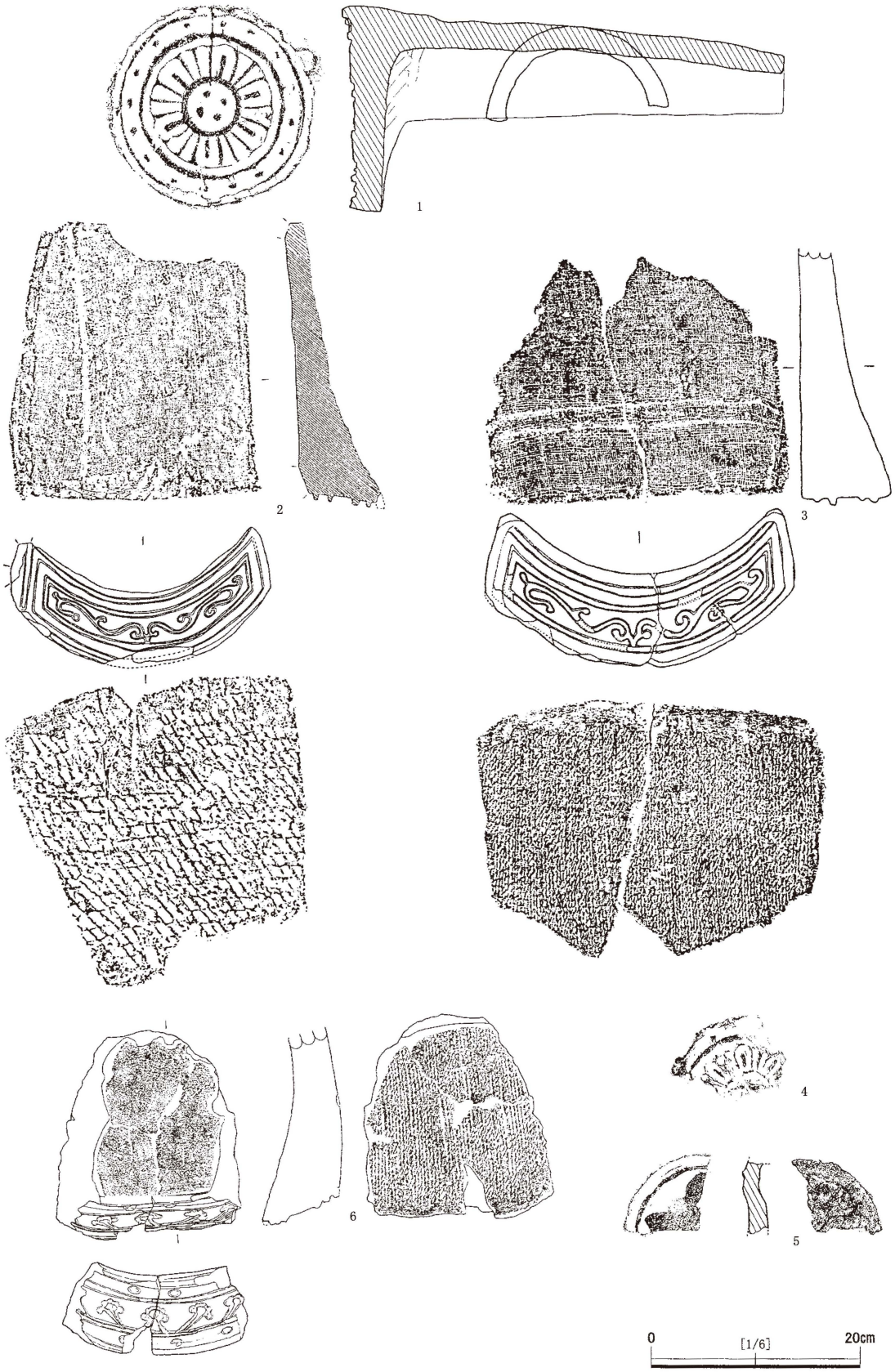
２：国分寺造寺以降の諸国の様相について－国府・国分寺・諸寺－

では、国分寺造営以後と以前ではどのように造瓦体制は変化していったのだろうか。国の事業である国分寺造営であるが、東国での国分寺造営における瓦生産体制については、相模国以外については、各国詳細な検討がなされている。下野の場合は、国分寺出土の瓦の前に郡内にみられる古代寺院の文様意匠・製作技法が共通するいわゆる「郡系瓦」が存在し、この造瓦組織とは別に国分寺瓦屋がつくられるパターンがみられる(栃木県教育委員会　1997)。また、国府所用瓦が存在し、国分寺創建以前の古い瓦が出土すると国府に先行する寺院との関連が想定されてきたが、国府そのものに葺くものとして捉え、その年代は８世紀第一四半期としている。「拠点窯」となる工人の動向が確認し難い相模の場合はどうであろうか、個々の事例について述べていきたい。

１）国府

相模国府の所在地としては、平塚市、海老名市、大磯町と諸説があるが、ここで扱う国府は平塚市に所在している時期を示すこととする。相模国府域として認識されている遺跡は大会原遺跡、六ノ域遺跡、坪ノ内遺跡、高林寺遺跡等があげられる。これらの遺跡から出土している瓦をみると、桶巻き作りの瓦が少量確認されるものの、そのほとんどが一枚作りの瓦である。しかしながら、瓦が出土している平・丸瓦の絶対量は全体的に少なく、総瓦葺ではなく甍棟の建物である可能性が高い。

国府域で確認されている軒瓦は、相模国分寺Ⅰ類とした時期の軒平瓦と、国分僧寺Ⅱ類・尼寺Ⅲ類とした軒丸瓦、軒平瓦が出土している(第６図・註２)。この他、大会原遺跡からは素弁の軒丸瓦が１点、確認されているが、同笵瓦は現在のところみられない(依田他　2009)。尼寺Ⅲ類の唐草紋軒平瓦は、国分寺出土事例



第６図　国府城軒瓦

確認されている。国分寺同笵事例の他、単弁八弁蓮華文軒丸瓦と飛雲紋軒平瓦が出土しており、これらは、後述するが千代廃寺と宗元寺からも同笵瓦が確認されている。

国府域で確認されている単弁六弁蓮華紋軒丸瓦は、高林寺遺跡など含め６点確認されており、中でも六ノ域で確認された軒丸瓦は、カマドの袖に使用されたもので完形品として残っている(第６図１)(依田他2009)。この文様と同じ平瓦部の凸面の叩きが縄叩きの事例と変形格子叩きの事例の２種が確認されており、笵型の移動が想定されるが､国府域の中で少数出土している中で多く確認されている文様意匠である事から、この文様が軒先を飾ったものと推測される。軒平瓦も国分寺で使用されたものと同様の均整唐草紋の退化した文様意匠のものを使用している(第６図２・３)。確認されている出土点数はわずかであるが、ともに曲線顎のものであることが確認されている。注目すべきは同じ瓦当文様ではあるが、顎から平瓦凸面叩きが、縄叩きのものと国府域のみ確認される斜格子叩きの２パターンがあり、後者の斜格子叩きは相模国府以外で確認されない叩きである事からオリジナルのものであり、瓦当笵が移動して造瓦されたものと推察される。

千代廃寺や宗元寺と同紋である飛雲紋軒平瓦も数点確認されており、これは国分寺では確認されていない文様意匠である。曲線顎で、挟み込み技法である。出土している瓦は小片が多く、他寺院との同笵関係が確認し難い。ただ、六ノ域で出土している軒平瓦には、笵傷が外区に確認される事からこの部位と同じところが確認されれば、前後関係のヒントになるかもしれないだろう(柏木　2009)。単弁八弁蓮華紋軒丸瓦は、高林寺遺跡で確認されているが、１点しか確認されていない為、詳細は不明な点も多いが、飛雲紋軒平瓦とセットで確認されている事に意義があるだろう。

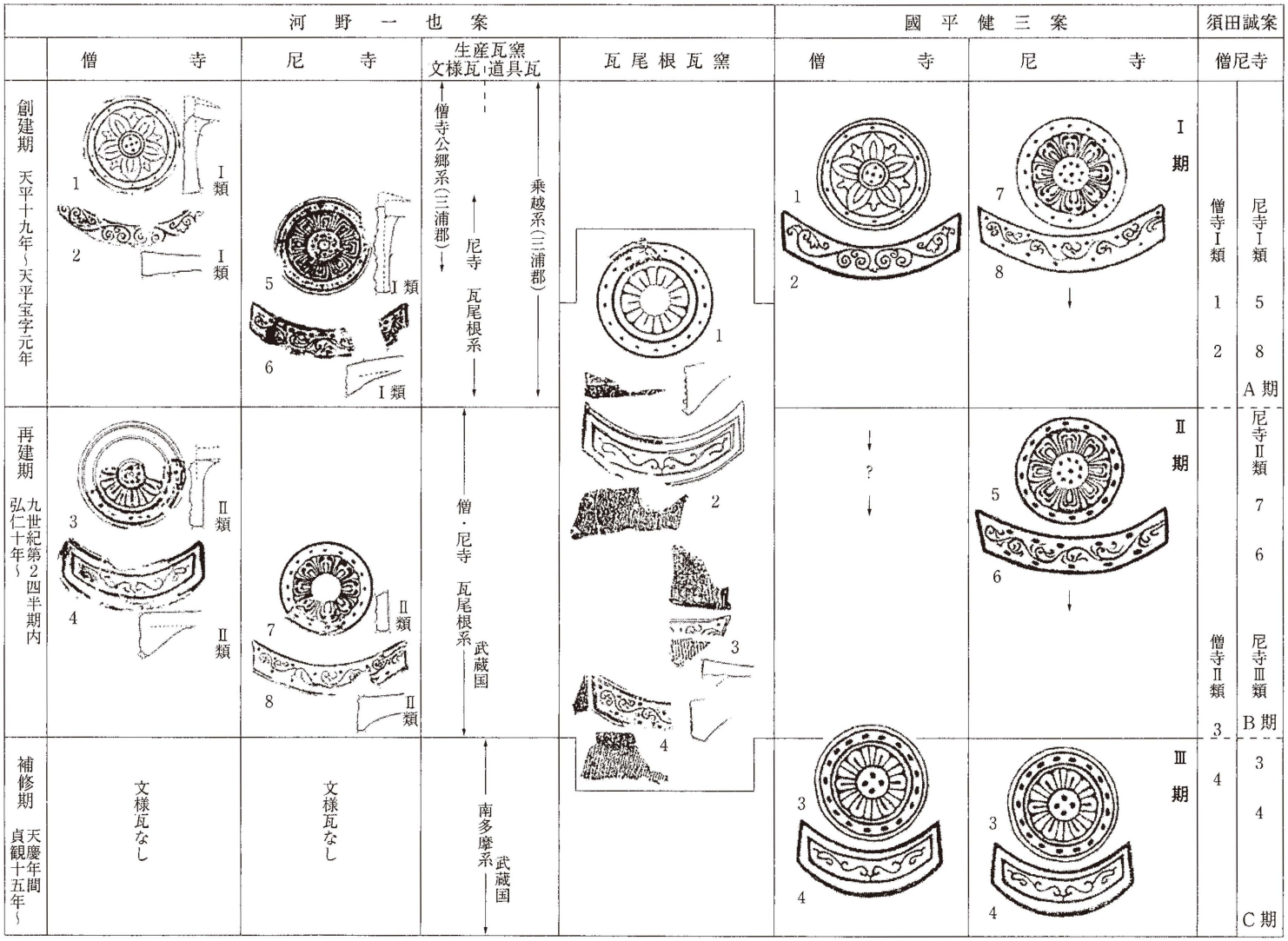
平瓦は、縄叩きが多く縄の種類も粗めから細かいものまで多種多様である。国分寺からも出土している側面側を平行叩きする縄叩きの瓦や、からさわ瓦窯産の格子叩きの瓦も若干みられるが、中でも特徴的な瓦は格子が不規則な形状をしている変形格子叩きの瓦である。この瓦は、国府域のみ見られるもので、他では確認されておらず、先に軒平瓦で述べているが、国府オリジナルの平瓦とみてよいだろう。湘南新道関連遺跡のⅡ分冊を報告する際に、胎土分析をかけたが、胎土からみて３～４ヶ所から供給されていた可能性が指摘されている。この他、特徴的な瓦として凹面側に模骨文字がみられる平瓦が確認されている。これらは、御殿山窯で焼成されている瓦で、現在確認されている模骨文字の平瓦は､「逆さ「上」」と「十」の文字である。模骨文字瓦は相模国分尼寺や下寺尾廃寺、鐘ヶ嶽遺跡、鎌倉市・山崎天神山城遺跡からも出土している（註３)。

したがって、現段階での出土瓦の傾向からみる国府域の生産窯は、からさわ瓦窯、乗越瓦窯(三浦半島系瓦窯)、御殿山瓦窯、不明窯、の４ヶ所が想定されるだろう。

２）相模国分寺・相模国分尼寺

相模国分寺は、軒瓦からⅠ～Ⅲ期の時期区分が想定されている。時期設定については現在三案あり、統一見解はされていない(第７図)。Ⅰ期としている創建期は、単弁五弁蓮華紋軒丸瓦と偏向唐草紋軒平瓦のセット、Ⅱ期・Ⅲ期は単弁六弁蓮華紋軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦のセットである。これらの生産瓦窯は、Ⅰ期は乗越瓦窯などの三浦半島系、Ⅱ・Ⅲ期は瓦尾根瓦窯、御殿山瓦窯などの南多摩瓦窯を生産址、としている。

国分寺瓦に先行する瓦が少量含まれる事例は全国的にもみられるが、これは国分寺創建に先立つ国内諸寺・窯からの搬入品として捉えられ、相模国分寺ではからさわ瓦窯の製品がそれに該当するだろう。軒瓦はないが、平・丸瓦については、桶捲き作りの瓦が含まれている事からも、からさわ窯の製品をストックし、



第7図 国府僧寺・尼寺軒瓦型式一覧

国分僧寺の造営に使用したと想定されている。

相模国分尼寺の軒瓦は、西大寺6733型式や西隆寺6734型式に祖型がもとめられる瓦である。国分尼寺の創建瓦の生産窯は瓦尾根瓦窯であり、再建期段階も瓦尾根瓦窯で尼寺の軒瓦を生産している。瓦尾根瓦窯は南多摩瓦窯址群の一つで、８世紀第２四半期～９世紀前半ごろに操業を開始したと考えられており、その時期は幅広い。相模国分尼寺の造営にかかわる氏族としてあげられる氏族として漆部直伊波の名前がある。伊波は高座郡を本拠地とする在地豪族の一人で、神護景雲二年(768年)、造西隆寺長官伊勢朝老人のもとで相模宿称の姓があたえられて国造となった(須田 2013)。尼寺の造寺活動が、伊波が造西隆寺司次官に就任した後から開始されたと想定されており、自らが関係していた西隆寺と類似した瓦当文様を採用している他、伽藍配置についても同様な配置をとる事から、相模国分尼寺の造営に積極的に伊波が関与していると須田氏は述べている(須田 2013)。

国分寺と国分尼寺の主要瓦の文様意匠が異なるのは相模国と伊勢国のみで、この背景に何があるのかは事例が少ない為検証し難い。ただし、伊勢国は技術面では国府・国分寺・国分尼寺に共通性が確認されており、相模とは異なった様相を呈している(梶原 2006)。

整理すると、国分僧寺の生産窯は、乗越瓦窯、石井瓦窯、からさわ瓦窯、御殿山瓦窯、国分尼寺は瓦尾根瓦窯、御殿山瓦窯等が想定されている。

３）高座郡・下寺尾廃寺

国府・国分寺の同笵瓦が出土している古代寺院として下寺尾廃寺があげられる。出土瓦は、相模国分僧寺Ⅱ類・尼寺Ⅲ類の軒丸瓦と同笵瓦が１点、また再建期としている鬼瓦と同笵の鬼瓦も出土しており、国分寺・国分尼寺との強いつながりを裏付ける資料として考えられている。国分尼寺出土の軒丸瓦は瓦尾根窯の製品とされているが、国分尼寺出土事例のものとは、胎土が異なる事から瓦当笵が移動し別の場所で生産されたものと判断していた。同笵資料が少ない中で、「住田コレクション」に同紋瓦がある事がわかり、早速実見したところ相模国分寺出土の墨書きのある軒瓦の胎土が下寺尾廃寺で出土しているものに類似していた(註５)。国分僧寺から出土しているこのタイプも出土点数が少ない為、検討が必要ではあるが、管見した限りでは、白色針状物質を含む胎土である事から、国分尼寺とは異なる瓦窯で焼成されたものと想定される。下寺尾廃寺や国府域から出土している軒瓦は、白色針状物質が含まれる事から、同一の場所で生産されていた可能性が高い。下寺尾廃寺は現在16回の確認調査を行っているが、周辺の集落を含めてもこの軒瓦の出土事例が２点しかなく、うち１点は小片である事を踏まえると絶対的に数が少ない為、比較が困難ではあるが、国分僧寺・下寺尾廃寺・国府の瓦は、一つの瓦窯から３ヶ所へ供給された可能性も考えられよう。

また、礎石立ち建物周辺から型式崩れの軒丸瓦が数点出土している(第５図)。外縁を一応意識したのだろうか、直立する外縁でその周囲を指ナデにより区画、中に素弁の蓮弁を配している。丸瓦と瓦当が剥離している資料があり、９世紀中～後半頃に素弁系の文様が流行するようで、武蔵国分寺再建瓦としたものを筆頭に、素弁系軒丸瓦がみられるようになる。下寺尾廃寺で確認されている瓦は、瓦当裏面～側面にかけて縄叩きを施すのが特徴的で、こうした制作技法のものは隣接寺院では確認されない。小出川河川改修関連遺跡の調査で瓦当部分が剥離している状態の瓦が出土しており、下寺尾廃寺で出土している瓦当が剥離していない状態と比較すると胎土が同じものであった事を確認している。この剥離しやすい接合方法は、「貼り付け技法」として認識されるもので、埼玉県の高岡寺院跡・大寺廃寺で確認されている「高岡技法」と呼ばれるものと

第８図　国分寺系軒丸瓦同笵出土事例

第９図　国府系軒丸瓦同笵出土事例

第９図　素弁・単弁蓮華文軒丸瓦同笵出土事例

同様な技法である（吉田 2001）。

なお、集落出土の瓦（小出川河川改修関連遺跡Ⅱ）で胎土分析を行っており、そのほとんどが三浦半島の胎土を起源とする結果となっている。放散虫化石や海水種珪藻化石、白色針状物質が含まれており、これは三浦半島から鎌倉にかけて分布する逗子層を起源とするものとの指摘があり、明らかに御殿山産と思判断できる瓦以外はほとんどであり、上記にあげた素弁系の軒丸の胎土も三浦半島を起源とする瓦という結果がでている。以前、指摘した指ナデ文字瓦も、瓦尾根産の特徴としてあげられていたが、この瓦からも放散虫化石や白色針状物質が含まれており、同じ産地を示す可能性が高い結果となっている（小川他 2008）。

下寺尾廃寺の生産窯としては、三浦半島を中心とした少なくとも３ヶ所からの生産瓦窯と御殿山瓦窯からの供給をうけている、と想定される。

３：国分寺以降の同笵事例について

国分寺と同笵瓦がみられる背景として「国分寺造営に協力した郡司階層への報償であり、造寺・造仏活動の奨励の証左」といわれてきたが（森1974）、在地の工人を再編して国分寺瓦屋を編成するとともに、在地での瓦そのものを供給する体制でおこなわれていたことが、指摘されており、中央からの援助という事より在地の生産力を活かして生産されていた事が指摘されている（梶原 2013）。

相模の場合、同笵事例は先ほどから述べている「単弁六弁蓮華紋軒丸瓦」が国分寺・下寺尾廃寺・国府域

(大会原遺跡・高林寺遺跡他)の事例、セットとなる軒平は「均整唐草紋軒平瓦」で国分寺・国府域(大会原遺跡他)から出土している(第８図)。「単弁八弁蓮華紋軒丸瓦」が千代廃寺、宗元寺、国府域(四ノ宮下郷)、セットになるのが「飛雲紋軒平瓦」で千代廃寺、宗元寺、国府域(六ノ域遺跡他)(第９図)で、飛雲紋軒平瓦は、国府域出土資料の右外区に位置する珠紋に笵傷が確認され、今後の前後関係を検討する上での判断材料になる。「素弁六弁蓮華紋軒丸瓦」は、武蔵国分寺再建期瓦・鐘ヶ嶽遺跡、千代廃寺にみられる。その同系として下寺尾廃寺や御殿山瓦窯があげられる。

初期寺院の段階で、三浦半島を中心とした造瓦体制と千代廃寺を中心とした造瓦体制があった事は先にのべたが、千代廃寺の方は他国へ瓦工人が移動していった事が、製作技法や軒瓦の文様意匠から指摘されており、旧国単位の師長国造の支配地域において供給生産体制がみられる事が指摘されている。よって、在地に残るもう一つの造瓦体制は、三浦半島を中心としたエリアの造瓦体制であり、国分寺造営に伴い国分寺瓦屋として再編成され、相模国内全般をカバーする官営工房としての役割を果たしていったのだろう。三浦半島を中心とした瓦窯の瓦工人は、下寺尾廃寺などにみられる古手の瓦を焼成していた瓦窯が確認されていない為はっきりとした事はいえないが、いわゆる下寺尾型の瓦が、宗元寺や千葉地廃寺といった初期寺院にもみられ、胎土分析においても実見においても産地を三浦半島の瓦窯に求められる事が明確となっている。８世紀中頃になると、乗越瓦窯で国分僧寺の創建瓦を生産する他、また別の古代寺院の瓦を生産し、供給、そして、再建期といわれる国分僧寺Ⅱ類・国分尼寺Ⅲ類の軒丸瓦が製作され、尼寺のものは瓦尾根瓦窯で、その同じ笵が別の僧寺専用の瓦窯へ移動し、焼成し、僧寺や国府域へ供給している事が考えられよう。それは、国府域から出土している軒瓦の胎土から白針状物質が確認されている事から、瓦尾根瓦窯とは別の瓦窯で生産された事がまず考えられる事、そして下寺尾廃寺出土の軒丸瓦にも白色針状物質がみられる事から三浦半島周辺の瓦窯が想定されることから､尼寺との共通性より国府域との共通性を見出す方がよいかもしれない。国府との関係は、七堂伽藍跡から「国」の墨書が出土している事、また、初期猿投の緑釉陶器も確認されている事から、国府域との接点を見出す事ができるからである(註６)。その一方で、出土している鬼瓦は尼寺と同笵のもので、少なくとも下寺尾廃寺で３個体が確認されている。平城宮で出土している鬼瓦の意匠に類似しており、東海道沿いでは平城宮系の鬼瓦をモチーフにした鬼瓦がみられる事例と合致している(註７)。

軒丸瓦の笵傷の多さからみると国分僧寺・尼寺→下寺尾廃寺→国府域の順番である事はかわらない為、国分僧寺と尼寺の中での前後関係があるのかを今後は追及していく必要があるだろう。

素弁系の瓦は、千代廃寺と鐘ヶ嶽遺跡から、武蔵国分寺と同笵の瓦が確認されている。素弁系の瓦当文様は、９世紀中頃から多種多様に展開しており、武蔵国分寺で確認されている竪穴住居跡のカマドに使用した素弁五弁蓮華文軒丸瓦も御殿山瓦窯から確認はされていないが、胎土から御殿山を起源とする瓦として把握されている(服部 他 2009)。御殿山瓦窯で使用されている軒瓦の接合技法は、「接合式」と「はめ込み技法」の２種類が確認されており、後者のはめ込み技法は、下寺尾廃寺の項でもふれたが、剥離しやすい特徴があげられる。国分寺造営に伴い、新たな技法として一枚作りの導入と一本造りの軒丸瓦の製作技法が指摘されているが、これは効率化をはかったものとして考えられ、全国の国分寺でもいくつか確認される事例でもある。ただ、この技法は、武蔵国には導入されているが相模にはみられない技法で、武蔵から導入されたのは９世紀中頃を契機とする「はめ込み技法」のようである。

武蔵国分寺で出土している単弁系の瓦の中に瓦当裏面に縄叩きを施すものがある。この技法については、下寺尾廃寺で出土している素弁系の瓦と同様な技法である事が指摘できる。この軒瓦は南比企産で、南比企

窯と東金子窯は、国分寺や国府で使用した瓦を生産していた官窯にあたる。この北武蔵系瓦窯の工人が、御殿山瓦窯へと移動していった事が、模骨文字瓦「山万」が両者の瓦窯で確認される事から、東金子窯→御殿山窯への動向が指摘されている。下寺尾廃寺で出土している軒瓦は、先述の胎土分析や実見から三浦半島系を起源とする瓦と想定され、瓦工人の動向が御殿山→三浦半島、もしくは、北武蔵→三浦半島、という工人の動向が考えられよう。技法の共通性からみれば、乗越遺跡で確認された技法、つまり丸瓦側面にみられる糸切り痕跡や指ナデ文字瓦が御殿山窯で確認され、相模と武蔵国内の瓦窯を瓦工が往来していた事を予測される事例がみられる。相模国の国司が武蔵国の国司へ移動になる等、相互交流は文献上から伺い知れ、それは、出土する土器などからも共通項を見いだす事ができる。こうした共通項からも、国司の管理下のもと、瓦生産が行われていた事がいえるのである。

４：まとめ～瓦工人の動向について～

基本的に初期寺院の工人動向について、拠点寺院を中心にそこから周辺寺院へ工人派遣を行い、瓦造りが行われてきた事がいわれてきているが、相模では軒瓦が少ない事もさながらその経過がみられずそれが相模の特徴でもあった。千代廃寺や宗元寺など、他地域との共通する文様意匠・技法が国内へ導入されるが、国内では伝播していく様相がみられない。７世紀後半から８世紀前半にかけての地方における瓦生産組織は、地方有力者層の建立にあたる在地の拠点寺院を中心に展開するあり方が一般的とされているが、相模の場合は千代廃寺を中心とする旧師長国造範囲と、御浦郡を中心とする王族支配のある地域での瓦生産体制グループの２ルートが中心となっていた事が想定される。高座郡に郡衙、国分寺が建立し、下寺尾型の平瓦が国内に展開するなど、若干の共通要素がみられる部分もある。それが三浦半島を拠点とする瓦窯から生産した可能性が高い平瓦で、郡司層が確立した造瓦体制に国分寺造瓦を契機に国分寺瓦屋へと移行させていく、すなわち乗越瓦窯などが官窯としての役割を担うようになっていったのだろう。国分寺瓦屋を契機に、国司が瓦屋を統括していくようになる。国府域で、単弁六弁蓮華紋との偏向唐草紋の軒平瓦のセット、単弁八弁蓮華紋軒丸と飛雲紋軒平瓦が確認されるのはこうした事が背景にあるからであろう。

９世紀中～10世紀代になると、御殿山瓦窯の瓦が相模国内に導入される。千代廃寺、鐘ヶ嶽遺跡、鎌倉天神山城遺跡、下寺尾廃寺、国府域にみられる模骨文字の瓦や、平・丸瓦が相模をはじめ武蔵国内の古代寺院等にみられる。武蔵国分寺の再建瓦にみられる素弁系の軒丸瓦も共通する要素であるが、拠点となる寺院にこうした新しい要素が共通して見られる背景に定額寺の補修等が想定される。この背景については又、別途考えてゆかねばならず別稿に譲りたい。

このように、瓦の操業が行われない時期に別の瓦窯へ移動してまた瓦生産を行っている様相が各共通する要素からみて判断される。例えば、乗越遺跡でみられる、四隅隅落としの平瓦や指ナデ文字瓦の存在、丸瓦側面にみられる糸切り痕跡は、すべて瓦尾根瓦窯や御殿山瓦窯にも共通する技法であり、これらの行為が同じ工人組織と捉えるならば瓦窯の年代から考えると三浦半島を中心とした瓦窯群→瓦尾根瓦窯→御殿山瓦窯という相模から武蔵への工人移動が想定されるのである。

この造瓦体制が、中世・鎌倉の永福寺へと続くのかはまた別の視点であり、古代末～中世にかけての瓦体制についても今後言及していきたいと思う。

最後に、次の方々に資料の実見等に際してご協力やご教示をいただいた。記して感謝いたします。

大村浩司　押方みはる　岡本孝之　中三川　昇　田尾誠敏　依田亮一　清野孝之　近野正幸　冨永樹之
國平健三　原　廣志　平尾政幸　森　郁夫(敬称略)

平成24年5月30日、日頃より指導いただいていた森郁夫先生の訃報が突然まいこんできた。
まさに青天の霹靂で、連絡をいただいた電話をきった後しばらく呆然としていた。神奈川にもどってきてから、日々の生活を理由にまともに論文をかいていなかった事もあり、一念発起して研究助成を申請、これを献呈しようと思っていた矢先の出来事で、残念ながら先生の目にふれる事ができなかった。お世話になりながら、何一つ恩返しができておらず不徳の致すところではあるが、これを機会にまた瓦研究の方を一層精進し、これからも墓前に届けていきたいと思う。

【註】

１：下寺尾廃寺については、茅ヶ崎市包蔵地台帳による遺跡名は「七堂伽藍跡」であるが、ここでは「下寺尾廃寺」として記す。
２：国分寺の瓦については河野案、國平案、須田案の３者の意見が現在ある。ここでは須田案を引用した呼称を扱う。
３：鎌倉市教育委員会・原廣志氏のご教示による。
４：海老名市教育委員会・押方みはる氏のご好意により実見させていただいた。国分尼寺の軒丸瓦の中に、下寺尾廃寺や国府域で確認されている大きな笵傷がある事が破片資料の中から確認している。その為、
５：「住田正一コレクション」は現在国分寺教育委員会で保管されている。国分寺市教育委員会・依田亮一氏のご好意により実見させていただいた。
６：９世紀後半の相模国司は、嵯峨源氏や仁明源氏に一括される。国府域の緑釉薬の生産について言及した平尾氏によれば、在庁官人的な国師のあり方を指摘される。嵯峨天皇の一族は尾張の緑釉生産に感心をもっており、初期猿投の出土事例をみると、嵯峨離宮など嵯峨に関連した遺跡が多い事も指摘されている。
７：奈良国立博物館岩戸晶子氏のご教示による

【引用・参考文献】

浅井希 2007 「相模国分尼寺の研究－出土瓦の分析を中心に－」『えびなの歴史』海老名市史研究球　第17号
阿部友寿・天野賢一・飯塚美保・池田治・井辺一徳・小川岳人・高橋香・平尾政幸・宮坂淳一・依田亮一・渡辺外 2010 『小出川河川改修関連遺跡群　茅ヶ崎市七堂伽藍址(２)』Ⅲ　かながわ考古学財団調査報告251　財団法人かながわ考古学財団
網伸也 2011「造瓦体制の変革期としての仁明朝」『仁明朝史の研究－承和転換期とその周辺－』財団法人古代學協會
荒井秀規 1986「奈良時代の定額寺制度について」『日本宗教史研究年報』日本宗教史研究会年報編集
荒井秀規 1998「相模国府研究史」『相模国府とその世界』平塚市博物館
荒井秀規・明石新2004「相模国」『日本古代道路辞典』古代交通研究会
荒井秀規 2013「東山道と甲斐の路」『古代山国の交通と社会』 鈴木靖民・吉村武彦・加藤友康編
稲村繁 2009「古墳時代の三浦半島」『三浦半島考古学事典』横須賀考古学会
上原真人 1984「天平12・13年の瓦工房」『研究論集』Ⅶ　奈良国立文化財研究所
上原真人 1987「官窯の条件－律令制下造瓦体制を検討するための作業仮設－」『北陸の古代寺院』北陸古瓦研究会
上原真人 1997『歴史発掘11　瓦を読む』講談社
大岡実 1991「相模」『新修国分寺の研究　』第二巻　畿内と東海道　吉川弘文館
大橋泰夫 2003「下野の瓦生産と行政ブロック」『栃木の考古学』塙静夫先生古希記念論文集「栃木の考古学」刊行会
大橋泰夫 2013「国分寺と官衙」『国分寺の創建　組織・技術編』 須田勉・佐藤信　編
大村浩司・新倉香・田尾誠敏・藤井秀男・岡本孝之 2004『下寺尾七堂伽藍址確認調査概報』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告20　茅ヶ崎市教育委員会
大村浩司・藤井秀男・田尾誠敏 2005『神奈川県茅ヶ崎市　下寺尾七堂伽藍址の調査　第８次確認調査の概要』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告24　茅ヶ崎市教育委員会
大村浩司・田尾誠敏・高橋香・岡本孝之・荒井秀規・斉藤勉・永島正春2013『下寺尾官衙遺跡群の調査～下寺尾七堂伽藍址・高座郡衙の調査～』 茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告40
小川岳人・飯塚美保・高橋香・宮坂淳一・谷口肇・鈴木次郎 2008『小出川河川改修関連遺跡群　茅ヶ崎市七堂伽藍址(１)寒川町大曲五反田遺跡』Ⅱ　かながわ考古学財団調査報告224　財団法人かながわ考古学財団
岡本孝之 1997『下寺尾寺院跡の研究　神奈川県茅ヶ崎市所在の古代寺院』茅ヶ崎市文化財資料集第12集　茅ヶ崎市教育委員会
加藤芳明・冨永樹之 2000「厚木市七沢の鐘ヶ嶽採集の瓦について」『神奈川考古』第36号　神奈川考古同人会
柏木善治 2009『湘南新道関連遺跡　坪ノ内遺跡・六ノ域遺跡』Ⅳ　かながわ考古学財団調査報告243　財団法人かながわ考古学財団
梶原義実 2006「古代伊勢における官営瓦工房」『名古屋大学文学部研究論集155』史学52
梶原義実 2009「国分寺研究における諸問題」『名古屋大学文学部研究論集164』史学55　考古学抜刷第24集
梶原義実 2010『国分寺瓦の研究』 名古屋大学出版会
梶原義実 2013「国分寺と造瓦」『国分寺の創建　組織・技術編』 須田勉・佐藤信　編
神奈川県立歴史博物館 2008『特別展　瓦が語るかながわの古代寺院』
神奈川考古学会 2000『かながわの古代寺院』神奈川県考古学会　考古学講座
神奈川考古学会 2001『かながわの古代寺院』研究の成果と課題　神奈川県考古学会　考古学講座　成果集
河野一也 1990「奈良時代寺院の成立の一端について(Ⅱ)－相模国宗元寺の古瓦について－」『神奈川考古』第26号
河野一也・山下守昭 1991「奈良時代寺院の成立の一端について(Ⅲ)－相模国高座郡下寺尾廃寺の古瓦について－」『神奈川考古』第27号
河野一也・山下守昭 1993「奈良時代寺院の成立の一端について(Ⅳ)－相模国足下郡千代廃寺の古瓦について－」『神奈川

考古』第29号
河野一也 1995「相模国分寺の屋瓦と造営」『王朝の考古学』大川清博士古希記念会編
河野一也 1998「相模国分寺」『聖武天皇と国分寺』関東古瓦研究会編
河野一也 2007「相模国分寺の年代観」『国分寺の創建を考える』相模古代史研究実行委員会
河野一也・須田誠・向原崇英・浅井希 2013 「相模国分寺」『国分寺の創建　組織・技術論』 須田勉・佐藤信編
関東古瓦研究会 1994『シンポジウム　関東の国分寺　－在地からみた国分寺の造営－』資料編
國平健三・河野一也1988「奈良時代寺院成立の一端について(Ⅰ)－相模国鎌倉郡の古瓦を中心として－」『神奈川考古』第24号　神奈川考古同人会
國平健三 1990「初期相模国府の所在について(上)－造瓦技法の比較と分布からみた場合－」『えびなの歴史』創刊号
國平健三 1991「初期相模国府の所在について(上)－造瓦技法の比較と分布からみた場合－」『えびなの歴史』第２号
國平健三 1998「相模国分僧寺跡」「相模国分尼寺跡」『海老名市史一』資料編　原始・古代
國平健三 2004「相模国分寺の研究(上)」『神奈川県立博物館研究報告(人文科学)』第30号　神奈川県立博物館
國平健三 2005「相模国分寺の研究(中)」『神奈川県立博物館研究報告(人文科学)』第31号　神奈川県立博物館
國平健三 2010「相模国における古代寺院の展開－宗元寺跡の忍冬飾蓮華文軒丸瓦の系譜と年代をめぐって－」『神奈川地域史研究』第27号
国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会2009『武蔵国分寺発掘調査概報』34　－東僧坊・僧尼寺区画溝・東山道武蔵路の調査－
国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会2010『武蔵国分寺発掘調査概報』35　－僧寺伽藍地の確認調査－
相模古代史研究会2003『シンポジウム　国分寺の創建を考える～安芸国と相模・遠江・駿河・伊豆国の事例から～』資料
志賀　崇 2005「郡衙周辺寺院」の性格－考古資料を用いた分析への展望－」『地方官衙と寺院-郡衙周辺寺院を中心として』独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所
島根県教育庁古代文化センター 2008『平塚運一古代瓦コレクション資料集(１)－武蔵国分寺関連資料・鐙瓦編－』 島根県古代文化センター調査研究報告書39
島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁枚増文化財調査センター 2011『平塚運一古代瓦コレクション資料集(２)－武蔵国分寺関連宇瓦・鐙瓦補遺　平塚運一コレクション資料目録－』 島根県古代文化センター調査研究報告44
須田勉 2013「国分寺造営過程に関する検討－特に道鏡政権時代を中心に－」『技術と交流の考古学』同成社
須藤智夫 2004「第三節　古墳時代の大磯と大和王権」『大磯町史』６　通史編　古代・中世・近世　大磯町
田尾誠敏 2003「第二節　社会と文化　１古代村落の景観と構造～３土器の変遷とその背景」『平塚市史』11下　別編考古(２)　平塚市博物館市史編さん担当
田尾誠敏 2011「師長国造領の分割と地域拠点の成立－考古学からみた在位支配と首長層の動向－」『小田原市郷土文化館研究報告』№47
滝沢亮他 1990『相模国分寺関連遺跡　１－尼寺跡の調査(1989～90年度)－』海老名市教育委員会・相模国分寺遺跡調査会
滝沢亮他 1989『相模国分寺関連遺跡　詳細分布調査報告書』Ⅰ　海老名市教育委員会・相模国分寺遺跡調査会
大川清編 2006『住田正一　蒐集古瓦圖録』
中三川昇 2009「古代の三浦半島」『三浦半島考古学事典』横須賀考古学会
中三川昇 2012『乗越遺跡－相模国分寺創建期瓦生産窯跡の発掘調査報告－』横須賀市文化財調査報告書　第49集　横須賀市教育委員会
菱田哲郎 1988「瓦の笵と製作技術－高麗寺系軒丸瓦の検討－」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度　第Ⅱ部　京都大学埋蔵文化財研究センター紀要』Ⅵ
菱田哲郎 2007『古代日本国家形成の考古学』 シリーズ諸文明の起源14　京都大学学術出版会
菱田哲郎 2011「定額寺の修理と地域社会の変動」『仁明朝史の研究－承和転換期とその周辺－』財団法人古代學協會
平塚市博物館市史編さん担当 2000『平塚市内出土の古瓦』平塚市史別編　考古　基礎資料集成１
三船隆之 2010「相模・武蔵南部における地方寺院の成立－宗元寺跡を中心として－」『神奈川地域史研究』第27号　神奈川地域史研究会編
森郁夫 1974「平城宮系軒瓦と国分寺造営」『古代研究』３　元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室
森郁夫 1998『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版局
山路直充 2009「「大伴五十戸」と記銘された軒丸瓦」『駿台史学』第137号
横須賀市 2012『新横須賀市史』通史編　自然・原始・古代・中世
横須賀考古学会 2009『三浦半島考古学事典』
吉田美弥子 2001「５　瓦の諸問題　(１)御殿山支群出土の軒丸瓦について」『南多摩窯跡群　八王子みなみ野シティ内における古代窯跡の発掘調査報告』Ⅳ　八王子市南部地区遺跡調査会
依田亮一・高橋香・飯塚美保・松田光太郎・平尾政幸・尾野善裕2009『湘南新道関連遺跡　大会原遺跡・六ノ域遺跡』Ⅱ　かながわ考古学財団調査報告242　財団法人かながわ考古学財団
服部敬史・河合英夫・根本靖・江口桂・小野本淳2011「南多摩窯跡群須恵器編年の暦年代検討」『八王子市史』創刊号　八王子市史編集委員会
渡辺一 2006『古代東国の窯業生産の研究』 青木書店

【図版出典】

第２図　國平2010より引用
第３図　山路2009、神奈川考古学会2000より引用作成
第４図　大村他2013より引用
第５図　依田他2009、柏木2009、四ノ宮下郷報告書より引用作成
第６図　河野他2013より引用
第１・７～９図筆者作成

研究紀要19

かながわの考古学

発　行　日　2014(平成26)年3月20日
発　　行　公益財団法人かながわ考古学財団
〒232-0033　神奈川県横浜市南区中村町3-191-1
TEL：045-252-8689　FAX：045-261-8162
http://kaf@kaf.or.jp
印　　刷　野崎印刷紙器株式会社